The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期ヘルダー : 特に文学観を中心として
Author(s)	田中, 健二
Citation	大阪大学文学部紀要. 1957, 5, p. 309-408
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5141
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期ヘルダー

―特に文学観を中心として―

田中健二

目次

第一章　時代的背景……一
一、思　想
二、社　会
第二章　ヘルダーの生涯と作品……一七
一、モールンゲン時代
二、ケーニヒスベルク時代
三、リーガー時代
四、ヨーロッパ旅行
五、ビュッケブルク時代
附、ヴァイマル時代素描（後期ヘルダー）
第三章　初期ヘルダーの文学論……五七
参考文献……九六

第一章　時代的背景

十八世紀の動静、情調および思想は、ヘルダー（Johann Gottfried von Herder 1744～1803）の手記や著作の中に表現され、それにさまざまな影響をおよぼしている。それ故、ドイツ精神史上におけるヘルダーの偉大な業績を取扱うに先立つて、まずその時代的背景を思想と社会との両面から概観することにする。

一、思　想

近代はプロテスタンティズム（Protestantismus）と反宗教改革（Gegenreformation）とから発生した。精密科学は近代的《国際性》（Internationalität）の成立に寄与した。新しい認識の国際的な授受交換は、啓蒙主義（Aufklärung）なる名称をになうに至つたところのかの精神的基盤の上で行われたのである。つとに十七世紀中葉、理性の形而上学によつて基礎づけられた自由人の理想が擡頭しはじめた。イギリスはこの点に於て文学上典型的であつた。そこでは貴族と市民とから成る活動的な社会が精神的主権、寛容、自律的道徳および人間性の新しい感情を生みだしたのであつた（*vgl.* W.Dilthey: Schriften III. S. 88）。フランスに於ては十八世紀前半、ヴォルテール（Voltaire, 本名：François Marie Arouet 1694～1778）によつて、ニュートン（Sir Isac Newton 1642～1727）的世界像は《自由の観念論》（Idealismus der Freiheit）と結合された。このような国際性に於てもろもろの形而上学は思想界の渾一のために使用されたのであるが、しかし社会全体のためにひとつの世界観を創造する能力を実証したものはなかつたのである。かくしてキリスト教は合理的に転釈され、文明開化にみちびくもろもろの要素や目標は啓蒙主義的理性体系に総括されるに至つた。

新しい認識方法はキリスト教的信仰内容に対してさまざまな態度をとつた。新しい科学の実証主義とキリスト教的観念論と並んで、第三の世界観の型として汎神論（Pantheismus）が見出されるのであるが、ここではそれらの世界観の組織的な連関を展開し、ヘルダーの思惟の中にそれらがいかに移されているかを概念的に把握することが問題ではない。むしろ本質的に重要なことは、世界全体に対する同じ眼差のゆえに相互に共感を以て結ばれている思想家たちの系譜を、歴史に於て確立することである。かかる共属性からして初めて、ヘルダーがくりかえしこれらの思想家に立ちかえり、かつ彼の仕事の中でたえず彼等と対決している理由が明かになる。ヘルダーは彼等の著作の一部分を翻案し引用し或いは発展させ、かつ彼自身の文化観の中に取り入れたのである。

キリスト教的色彩をおびた理性形而上学（Vernunftmetaphysik）はヒューム（David Hume 1711～76）に於て、発生的方法をとる心理学のために解体し始め、ついに理性形而上学に対する抗論は実証主義（Positivismus）に於て組織化されるに至つた。実証主義はその後十九世紀の西欧の生活形態に於て決定的な役割を演ずることとなつた。かような相違にもかかわらず、十八世紀フランスにおけ

る啓蒙主義と実証主義との広汎な統一は忘れられてはならない。実証主義的傾向は畢竟、啓蒙主義的傾向の非形而上学的な継続であり具体化であるからである。ホッブス（Thomas Hobbes 1588～1679）によつて準備され、十八世紀四十年代以後偏狭な唯物論（Materialismus）に伴われてきたかかる実証主義は、ティュルゴー（Anne Robert Jacques Turgot 1727～81）以来、原初的な世界観形式たるキリスト教もしくは汎神論に於てあらわれる《永遠の力》といつたようなものを無視して、世界の形成に従事してきたのである。かかる傾向はティュルゴーの《三段階法則》に於て表現された。ティュルゴーは宗教や形而上学を過去の時代に割当て、コント（Isidor Auguste Marie François Xavier Comte 1798～1857）の先駆者として、科学を目して人生を規制するものとした。かくして実証主義は宇宙のあらゆる部分の独立的価値を確信するに至つたのである。

しかるに、実証主義とは異なる方法によつて全世界の文化意識を変革しえたものがある。それはルソー主義であつた。人間の不同性の体験がルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712～78）の指導原理となつた。彼は人間疎外の経済的、階級的な原因を示そうと欲し、かつ同時代人を分析することによつて、当時の人間は他人の意見や評価に於てしか生きることができず、従つて他人の判断から初めて自身の生存の感情をひきだすものであることを指摘した。従つてルソーの闘争は文明的勢力の専制主義に向けられ、そしてかかる文明的勢力の表現とみられたのは、特に自然法則（Naturgesetz）の概念であつた。彼は嘲笑的にいつた、――自然法則というものは、ひとが偉大な思想家、深遠な形而上学者たる場合にのみ理解できるのだ。自然法則を云々するかかる哲学者たちの見解に従えば、社会は哲学的思惟に専念するために世間から孤立する少数の精神によつて組織されたことになるのだ、と。絶対主義的な哲学者たちの自然法則に対して、いまやルソーは《人間》を対置したのである（*vgl.* Rousseau：《人間不平等起原論》Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes 1755）。すなわち、彼は自然的有機体論的な諸原則の実施から真の文化を期待したといつてよい。が、ここで看過されてならないことは、ルソーといえども彼の所説を基礎づけるためには啓蒙者流の手段たる《懐疑》を以てした、ということである。従つて、ドイツにおけるルソー信奉者たるヘルダーはいわばルソー越克者となるべき運命にあつたのであり、これこそ思想史上におけるヘルダーの最も重要な意義を示すものにほかならないのである。

啓蒙主義の本義は、晦渋かつ錯綜せる道徳的概念を開明することであると同時に、人間の権利と尊厳とに対する抑圧された感情に生気を吹きこむことである。このように啓蒙主義は本来道徳的であつたが故に、あれほど広範囲にあれほど長期間に亘つて人心を収攬したのである。この道徳的啓蒙主義に対して、哲学の実践的精神が特に有識階級に普及することによつて形成されたものは、これを技術的啓蒙主義と名づけることができるであろう。

啓蒙主義は文化的表現や宗教的支柱を求めたときはいつも、伝承的形式に立ちかえらねばならなかつたが、しかしその本来の傾向は

俗界の社会的形成物によつて文明の発展を促すことにあつた。ライプニッツ(Gottfr. Wilh. Frh. v. Leibniz 1646〜1716)の単子論(Monadenlehre)も従来単に漠然と感ぜられていた諸概念を個別的に開明することを目指すものであつた。彼の哲学は初めて大衆に自然的啓示と超自然的啓示との混淆物たるひとつの教養宗教(Bildungsreligion)を与えたのである。

十八世紀の前半は特にヴォルフ(Christian Frh. v. Wolff 1679〜1754)の哲学体系によつて特徴づけられていた。この体系は宗教とのアカデミックな妥協を示している。啓蒙主義は世界の機構上人間を神から分離し、かつ啓蒙された悟性に対しては《有用》の概念によつて人間と神との交わりを復活させた。ヴォルフにあつてはニュートンとライプニッツとは結合されてひとつの全体となつている。彼はこの両者の道を歩みつづけ、彼の平明な講義によつて中間階級のあいだに健康な哲学を普及せしめたのである。

ドイツ啓蒙主義に於て、フランスに由来する合理論的要素とイギリスに由来する経験論的・感覚論的(empiristisch-sensualistisch)要素とは一種独特な融合をみたのであつた。その活動はほぼ一七二〇年から一七八五年に亘つた。人間は、意志と理性とによつて自己を完全化し、目的意識を有する理性的行為によつて形而上学なき市民的運命を準備するところの存在である、とみなされた。ここでは英知と徳性とはひとつであり、moralisch および geistig なることは殆ど同等の意味を有していた。自然的体系はここで力を発揮することができ、法学者プーフェンドルフ(Frh. v. Samuel Pufendorf 1632〜94)の世俗的な自然法は依然たる勢力を保持していた。要するに教義学なきキリスト教、つまり世界観的にいえば、《自由の観念論》が啓蒙主義的思惟の中に充満していたのである。

ドイツには二つの啓蒙主義的階層が形成された。宮廷的啓蒙主義(die höfische Aufklärung)は、フランス百科全書派(encyclopédiste)の無宗教的な思惟をうけつぎ、国際的な精神の貴族主義とつながっていた。すでにホッブスの理論の中には、国家は民衆の諸力から発展する有機体としてではなく、理性によって規制されうる機械であって支配者の主権を安全なしめるものとして現れた。宮廷のかような封建的啓蒙主義と相並んで、世俗化されたキリスト教と功利的倫理とを結合する市民的啓蒙主義(die stadtbürgerliche Aufklärung)が発生した。フリードリヒ大王(Friedrich der Große)の統治は決定的に宮廷的啓蒙主義をもたらした。大王の《科学文学翰林院》(académie des sciences et belles lettres)もフランス文学の精神をその指導原理とした。「それは先ずヴォルテールやディドロ、さらにフリードリヒ自身によって代表せられ、ついでレッシングに於て真にドイツ的に実現された文人という新しい理念から生じたものである。実にここに於て、フランス文学の影響下ドイツ精神の歴史における決定的な進歩がなされたのである。シラーや晩年のゲーテが完成したあらゆる方面にわたる文筆活動の包括的統一ということは、フランスにおけるヴォルテールの地位を至上のものとしてうけつぐものである。フリードリヒの翰林院はかかる事情をドイツに於て初めてつくりだした。すなわちそれは文人というものを

ば、極めて抽象的な学問上の仕事から文学の批評および大衆に対する哲学的思想の感化に至るまでの、その全活動を総合して行うものとなしたのである」（W. Dilthey : Studien zur Geschichte des deutschen Geistes—Friedrich der Große und die deutsche Aufklärung 1926）。ヘルダーはこのアカデミーの懸賞論文に応じて賞金と名声とをかちえたのであるが、ズルツァー（Johann Georg Sulzer 1720～79）との不和のためにアカデミー会員たることを拒否されたのである。アカデミーの見解によれば、「単に抽象的な学問のみならず文学もまた最高のものであり、その価値や規範は、いわば国民を超えて純粋に人間的なるもの、世界的なるものの領域に存する」のであり、「ペリクレス、アウグストゥス、ロレンツォ・デ・メディチおよびルイ十四世の諸黄金時代は、それぞれ長い時代を隔てて相離れてはいるが、実はひとつの統一体を成している。それらは各時代の同一の立派な秩序ある趣味を一国民から他国民へと伝えているものであり、純粋芸術の同一の普遍的人間的規範によつて結ばれている。諸種の文学の形式は確乎たる法則によつて無時間的に定められ、不変の自然的体系を成している」のである。かかる構想に対して、「ハーマンおよびヘルダーは一民族の内的生命力から発する国民文学の独自性というものを対置したのである」（同前）。

十七世紀の中葉以来、ドイツに於ては、新しい生活形態への試みとして敬虔主義（Pietismus）が活動していた。敬虔主義は市民的自我意識の高揚に寄与したのみならず、文学に対しても生産的な作用を及ぼしたのであつた。それはまた経済的発展とつよく結ばれており、その僧職気質、社会愛および人格的宗教的な感情によつて、経済的発展を支配しようと努めた。従来ルター主義（Luthertum）は絶対君主権に屈服し自由な教区形成を放棄してしまつていたのであるが、いまや市民層の中には国家から宗教を分離せんとする運動が擡頭しはじめた。かような市民的運動の主要形式とみなされるものが敬虔主義にほかならないのである。敬虔主義者は不変的な国家から離脱して文化的な団体を設立することによつて、絶対主義（Absolutismus）に対抗しようとした。このような宗教性が、十八世紀前半における宮廷的啓蒙主義の絶対主義体制のもとにあつても、広くかつ深く市民層に浸透していた事実は、これを看過してはならない。かくしてヘルダーにあつては、宗教的文化を国家の上位に据えようとさえ試みられるに至つたのである。

このように、合理主義自体の内部に、その基盤たる理性の普遍妥当性の観念を弱化せしめるもろもろの傾向が存在していた。ヘルダーはかかる諸傾向を受容し、かつそれらを相互に融合して彼一流の極めて暗示的な見解に到達した。正統的神学は歴史的事象の経過の中に神の導きの手をみるのであるが、かかる見方をヘルダーはボシュエ（Jacques Bénigne Bossuet 1627～1704）の思想に於て見出した。この見方は、摂理の存在を推論すべき根拠を説明するために摂理の説を用いているのであつて、いわば循環論法である。この不精確な論法はまたヘルダーの屢々用いるところでもあつた。この点でヘルダーはボシュエにつながつていたのである。ヴィコ（Giambattista Vico 1668～1744）もほぼ同様の見解を持し、すでに古

代およびルネサーンスによつて提起されていた歴史循環論（historische Kreislauftheorie）を深化するためにこの方法を用い、進化思想を初めて人類史の形而上学の方向に徹底させ文化の螺旋的発展という形のうちに神の摂理をみているのである。宇宙を支配する永遠の生成と消滅、没落と再生とに関する彼の教説は、ゲーテの《死して成れよ》（Stirb und Werde!）とさほど遠く隔るものではなく、また彼はヘルダーと同様、人間は神の目的を経験することができない、という認識を有していた。ヴィコとヘルダーとのあいだにはこのように幾多の類似点があるにもかかわらず、ミシュレー（Jules Michelet 1798～1874）は „Pour voir l'homme, Herder s'est placé dans la nature; Vico dans l'homme même, dans l'homme s'humanisant par la société.“（Michelet: Introduction à l'histore universelle, 《élclaircissement》）、と両者の差異を明かにしている。ヴィコは自然的環境の力よりも人間的環境の力を強調し、人間が個人および団体として世界計画の主体となるべきことを説く。なお彼が個人意識の過重視を斥けて共同意識を揚言するのは、創造的個性の偉大を解する心のヘルダーに及ばざることを証するものである。そして結局、彼の超越主義が内在性との混淆の危険にひんしたときはいつも、彼は根底に於てボシュエの後継者たるにとどまつたのである。因に、ヘルダーがヴィコについて、一七七四年ハーマン（Johann Georg Hamann 1730～88）の言及したヴィコの名より以上のことを知つていたかどうかはかなり疑わしい。ヘルダーはヴィコとは一七九七年以前には関係を有せず実際は恐らくヴィコの著作をナポリ（Napoli）で識つたゲーテの紹介によるものであつたと考えられる。

当時重要な進歩を意味したものは、何といつてもヴォルテールであつた。人間の本性は何時いかなる所に於ても同一である、という信念に立脚した彼は、歴史の中に神的計画のはたらきをみるところのイデーを否定し、もろもろの出来事を、理性の目盛に従つて秤られた精神的過程に関係づけ、一切の事物を《現在》によつて秤り、啓蒙主義の原則と一致しないかぎりのものは一切、これを迷信、軽信もしくは背理として断罪したのである。歴史がこのように啓蒙主義の発展を明示するために用いられて以来、いかなる理想もみずからの正当性を基礎づけるためには、ひとしく歴史的前提を以てしなければならなくなつた。爾来、歴史の叙述はもはや単なる編纂であつてはならず、かつヴォルテールによつて出来事についての伝統的なキリスト教的解釈は破壊されたので、歴史的視界は無限に拡大せられ、その結果地球上の非キリスト教的国民も共に歴史叙述のうちに包含されるに至つたのである。

これに反しヴォルテールの認識を顚倒したルソーは《現在》の価値を疑い、人間的諸関係における変転交替と成長発展とのイデーに執着した。モンテスキュー（Charles de Montesquieu 1689～1755）は発展について十分な評価をなしえなかつたとはいえ、環境が人間とその本能とに及ぼす物質的影響を吟味し、すべての国民および時代がそれぞれの地理的環境や内的構造に応じて各々独自な精神的態度を有していると信じた。このことはたしかに人性が包括的一般性

と同一でありえないことを意味する。がしかし合理主義者としてモンテスキューは彼自身の決定論の結果を肯定することを拒み、さらに倫理や一般人間性の基礎的原理を固執したのである。ヘルダーは恐らく《法の精神》(Esprit de lois 1748) の弱点に気付いていたと思われる。生物学者ビュフォン (George Louis Leclerc Buffon 1707〜88) の学説は、純機械的な方向からより多く生命的な方向への転回を示し、ヘルダー的見地の形成にすくなからぬ影響を及ぼしたのである。ヒュームは、その見解を大部分ヴォルテールのそれと同じうし、人性の恒常性と人類の未開状態から文化状態への発展とに対する信念を彼の時代と分ちもつていたのであるが、ほかならぬその時代に於て理性の説明しえざる或種の事物、或種の《隠された原因》の存在することを知つた。さらに彼は、出来事と出来事とのあいだにはいかなる先験的連関も存立せず、かつまた、因果性とは、経験によつて直接に知られるものではなく、経験の反復、すなわち習慣に基づいて単に主観的に想像されたものにすぎないと主張した。この観点はヘルダーに深刻な影響を与えた。ヘルダーは誤つて、この観点を以て推測、予感、空想への傾向を孕むものと断定し、彼の生得的素質をこの傾向の赴くままに委ねたのであつた。

以上の種々なる見解にもましてヘルダーに最も重大な影響を及ぼしたものは、シャフツベリ (Anthony Ashley Cooper Shaftesburg 1671〜1713) およびライプニッツによる新プラトン主義 (Neuplatonismus) である。この両者は到る処に見出される多様性と個性とに然るべき価値を与えたのである。彼等には、生は不断に変化し更新され、つねに他の生と血縁的関係にあると考えられる。万物は神に由来する。善悪を問わず一切のものは、宇宙の偉大な美しい調和にとり囲まれている、とシャフツベリは信じた。彼は典雅な筆致で人性の美と調和的世界の楽天観を謳い、当代の権威に追従することなく、ホッブスやロック (John Locke 1632〜1704) に対立する特異な地歩を占めたのである。ライプニッツの再発見は、一七六五年彼の《人間悟性論》(Nouveaux essais sur l'entendement humain 1704) の発行と共に始つたのであるが、ライプニッツはシャフツベリと同様、すべての個的な現象を神的なるものの鏡であるとみなした。しかも個人はそれ自身の生存の法則を自己の中に含み、同時に永遠なるものを種々様々な明るさで反射するという風に。ライプニッツは探求の目標を人間存在の無意識的、非合理的側面に向け、同時に悟性のみならず本能もまた人間を真理にみちびくものであると説いた。これによつて彼は啓蒙主義の普遍化原理をくつがえし始めたのであるが、それにもかかわらずなお彼はくつがえしがたい永遠の真理を前提し、かつ生存の中で段階的に実現し理性と完成とのいよいよ高く純粋な領域の中へと上昇しゆく進歩について語つたのである。

新プラトン主義の影響は当時非常に顕著であつた。その影響はただちにメーザー (Justus Möser 1720〜94) の著作の中に現れた。ヘルダーはこの《オスナブリュック物語》(Osnabrückische Geschichte 1768) の著者を賞讃した。このひとは、全く具体的なものもしくは厳密に限られた対象を徹底的に吟味することに於て、普遍

性の代りに人類のリアルな状態を取扱い啓蒙主義的諸原則の遍通に反対した。すべての個体は自身の法則、いわば《Lokalvernunft》(*vgl.* Bodin:《locorum ac regionum ratio》)に応じて生きるべきである。彼は環境の重要性を力説し、かつシャフツベリ、ライプニッツおよびヘーゲル(Georg Wilh. Friedr. Hegel 1770〜1831)のように、あらゆる多様性の背後に神的理性の支配をみとめた。モンテスキューと同様、各民族、各時代にはそれぞれの独自性の存することをみ、それに従つて歴史を分類した。たしかにメーザーの郷土の過去に対する愛国的好愛は顕著であるが、彼にはヘルダーほどの偉大な歴史的情熱は缺けていたのである。

啓蒙主義と新プラトン主義とがヘルダー的歴史像の構成のために二本の大黒柱の役を果したとすれば、敬虔主義は第三の柱を提供したのである。敬虔主義はすでに教会史家ゴットフリート・アルノルト(Gottfried Arnold 1666〜1714)の《中正なる教会史ならびに邪教史》(Unparteiische Kirchen- und Ketzerhistorie 1699〜1700)の中に紹介されていた。これは歴史の一面的・悟性的な取扱いに対する直接の対立意識を以て書かれた著作である。敬虔主義は、理性の開明ではなく、魂の神的開悟の絶対的価値を公言し、従つて本質的には中世神秘主義(Mystik)のつづきにほかならない。ヘルダーが敬虔主義的教義に接近したのは、初めは父母の家の雰囲気により、後にハーマンを通してであつた。彼は神秘主義的な文献を多く繙き、タウラー(Johonn Tauler, um 1300〜61)、パラツェルズス(Aureolus Theophrastus Bombastus Paracelsus 1493〜1541)、ヨハン・アルント(Johann Arndt 1555〜1621)、ヤーコプ・ベーメ(Jakob Böhme 1575〜1624)、前述のゴットフリート・アルノルト、スヴェーデンボルク(Emanuel Swedenborg 1688〜1772)およびベンゲル(Johann Albrecht Bengel 1687〜1752)等にかなり精通していたと思われる。《万象に現在する全能の神》に対する直接的な感情は再びヘルダーに於て覚醒されたのである。(第二章ビュッケブルク時代参照)。それは彼の歴史哲学の発展途上における危機的時点にあたつて避くべからざることであつた。ヘルダーに於て往々誤つて汎神論と呼ばれるものは、神秘主義的傾向の優勢、魂と神との合一および神の導きによる至福への欲求にほかならないのである。

これらの主要思潮のほかにもなおヘルダーを駆りたてる別種の思潮が現れていた。モンテスキューの勢力の及ぶかぎり環境の影響力は特に重視された。しかしヘルダーにあつては、環境の影響力だけでは未だ十分でなく、生の推進力たる人間的原衝動がそれに劣らず要求された。スコットランドの歴史家たち——Ferguson, Robertson, Millar——は社会の発展およびこれを制約する物質的要素を研究した。すでに神父デュボー(Abbè Dubos)は適切な環境による詩的天才の庇護を指摘しており、イギリス人ブラックウェル(Blackwell)およびウッド(Wood)は、《ホメロス》を真に理解するためには、ホメロスのミリューの中に心を移さねばならない、と説いた。同じ要求がラウス(Robert Lowth)によつて《聖書》についても唱えられた。これらの人々はすべてモンテスキューの見地に

触れていたのである。ハード（Hurd）の《騎士文学》（Letters on Chivalry 1762）では、中世は古典古代よりはるかに詩的制作にとつて好都合な時代であり、シェイクスピア（William Shakespeare 1564～1616）の作品はすべて十六世紀の産物である、と主張された。レッシング（Gotthold Ephraim Lessing 1729～1781）は独仏両文学における国民的差異を指摘し、ヴィンケルマン（Joh. Joachim Winckelmann 1717～68）はギリシャ的偉大さの生起をその時間的・空間的の条件に従つて観察した。また、他に対する単なる摸倣（Nachahmung）よりも、それに負けじとする努力（Nacheiferung）の方に優位を与えるヤング（Edward Young 1683～1765）の見解には、いかなる個性も他人に倣つて形成されるべきでない、という理が含まれていた。

このように、提供された問題はまことに多種多様であつた。ヘルダーはそれらを総括しようと欲した。ヘルダーの仕事はいわば、他人によつてためらいがちに奏せられる旋律に対して新しい深さと、より明瞭な輪郭とを与え、その旋律を調和ある対位法的楽章に結合したものということができる。

十八世紀末以来ドイツと西方諸国とを分つ最も顕著な標識のひとつは《歴史的感覚》である。歴史的観察法の樹立は宗教改革の次に位するドイツ精神の最も重要な寄与とみなされる。この観察法は勿論ドイツの専有物ではなかつたのであるが、ドイツはこれを西方諸国よりも深く完成したのであつた。西方的思惟が一般自然権と古代哲学やキリスト教倫理説の理想とを信じ、これに基づく普遍化への傾向を有しているのに対して、ドイツに於ては場所的ならびに時間的環境を強調するところの個別化的志向が存在する。ここでは人類の研究は、もはや人間の解離性に向けられないで、生存（Dasein）を規定する諸条件をになえる《人間》に向けられる。ドイツ人は、人間と自然との統一を西方諸国民よりも強く意識しかつ体験した。このことを最も明瞭に表現したものがドイツの文学と音楽にほかならないのである。ヘルダーこそはドイツにおける歴史的観察法の主要な源泉である。グンドルフ（Friedr. Gundolf, eigtl. Gundelfinger 1880～1931）はその著《Goethe》（1916）に於て、ヘルダーに至るまでの歴史的感覚の種々相を図式的に三段階に分けている。

①合理主義は歴史のうちに、ギリシャ文化もしくはキリスト教もしくはそれらの歴史的派生物から抽象された模範と規則、模倣しうるものと思惟しうるもののみを認識する。合理主義は非歴史的、非個性的に理性に対するそれらの価値にのみ留意する。②ヴィンケルマンもしくはレッシングは個性的な世界感情から特定の教養世界を、それらの超合理的生命性に於て、しかしそれらの歴史的連関の外部で把握する。③ヘルダーは歴史的多様性の生成を世界の全体のうちに、個々の現象のうちに、歴史的連関そのもののうちに把握する。——これに基づいてグンドルフはさらにヘルダーとレッシングとの相異点を列挙し、結局「レッシングは空間における存在、理性的な恒常不変な法則性の象徴と舞台とを、ヘルダーは時間における生成、不断の更新変形の象徴、活動的な力の標識を求めた」のであると結論する。ヘルダーはまさしくかかる歴史的感覚に促がされて、いわ

ば新しい歴史的観察法の音調をかきならし、目論見をたて、かつその実行に着手したのである。ヘーゲルやロマン派（Romantiker）と時代を同じうした他の人々は、その構成に従事し、同時にそれを拡大し変化し、かつ個々に補充したのである。さきにも述べたように、この道におけるヘルダーの先輩は主として西方の思想家たちであり、その中でも特にシャフツベリ、モンテスキューおよびヒュームが最も重要な人々であつた。これらの人々の断案をヘルダーの多産的な精神は自国の所与と結びつけることによつて改鋳した。その際、一方に於て漸次高揚しつつあるライプニッツ哲学、他方に於て神秘主義の古風な憧憬がこれに与つたのである。万有への帰属と神との合一とは、シュライエルマッヘル（Friedr. Schleiermacher 1768～1834）の強調したごとく、ドイツ精神における伝統的な敬虔性であるが、それは十八世紀の東プロイセン（Ostpreußen）に於てなお生きつづけていた神秘主義的傾向の中に現れており、ヘルダーを育んだ精神的雰囲気を規定していた。その他、アカデミー的神学、すなはちスコラ哲学（Scholastik）のかすかな痕跡および晩年におけるスピノザ（Baruch d'Espinosa 1632～77）の哲学に対する新しい理解と同化とが、ヘルダーの背景を成しているのである。従つてその成果は、西方的立場からの歴史観とは質的に相異し、これよりはるかに不確かで把握しがたいものであつた。しかしまさにその故にこそ、その帰結に於てはそれだけ一層挑戦的であつた。ヒュームのイギリスにおける相続者たるギボン（Edward Gibbon 1737～94）は、ヘルダーよりもすぐれた《歴史家》であるが故に、その歴史観はより鋭く限界づけられ、その歴史観はより明確であつた。にもかかわらず、われわれは、ギボンが後世の思惟の広汎な領域に対してヘルダーと同程度に影響を及ぼした、ということはできないであらう。イギリス精神はギボン以来、ドイツ精神がヘルダー以後経験したような極端な歴史的遠望や哲学的思弁への誘惑に陥ることはなかつたのである。ヘルダーは西方的思想家の所説をドイツ人の生得的なロマン的観察法と統合した。後にドイツ的思惟は往々西方的思惟を否定し、ドイツ的観察法を過重視する傾きをもつに至つた。ここに、現代世界におけるドイツ的立場とイギリス・フランス的立場との、外見上相容れない不和の原因がある。しかしながら、この両者は或る点に於てヘルダーが示したように和解しうるものなのである。

かかるドイツ的歴史意識が国家主義（Nationalismus）を将来したことは明かであり、そしてヘルダーが近代国家主義の父とみなされるのも尤もなことである。民族国家、民族に秘められた創造的な力、個人の民族共同体への所属性および現在の過去による被規定性等の発見、これらすべてはまさしくヘルダーに由来する。とはいえ、われわれは現代的弊害のゆえを以てヘルダーを非難してはならない。彼はこれらのイデーを普遍的人間愛および永遠の自然権の古典的諸原則と結合した、いな、彼は Nationalismus を Internationalität（国際性）への最も重要な前段階、すなはち普遍的人間性の基づくべき根拠とみなす限りに於て、これらのイデーを人類愛や永遠の自然権に従属せしめさえしたのである。しかも、ヘルダーの新しい観

察法の成果は他の領域に於ても見出される。それはさらにあらゆる種類の既存の諸科学に対しても新しい道をひらき、新しい科学を生ぜしめることになる。歴史哲学、文学史、生物学、地理学、教育学、考古学、聖書批評等、人間の生成とその環境との関係を明かにする知識の全部門は、それぞれの特殊性に応じて、ヘルダーの恩恵を蒙つている。彼の視線にはいかなる境界もひかれていなかつた。にもかかわらず、みずから偉大なものとして聳え立つことよりも、むしろ他の人々の振励者たることが彼の運命であつたようにみえる。ゲーテが一八二八年にみとめたように、当時すでにヘルダーの名にはわずかの栄誉しか附著していなかつた。彼の最大の業績たる《人類歴史哲学考》(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit 1784～91) はゲーテの晩年にはもはやわずかに「五〇年前ドイツに生じた作品であつて、それは信ずべからざるほど国民の教養に感化を及ぼしたが、いまやその責任を果しえたのちには忘れられたも同然」(Goethe, Werke, Weimarer Ausgabe, I, XLI (2), S. 345) だつたのである。ヘルダーは存命中ゲーテ、シラーおよびカントといつたような卓越せる人物の蔭に蔽われており、彼独自の方法による新しい批評主義 (Kritizismus) が一般に考えられていたよりはるかに重要な意義を有していたと認められるまで、彼の業績は日の目をみることがなかつたのである。

ところで、この歴史的感覚は、さきにも暗示したように、ドイツ的思惟を支配したところの、かの無限欲求、自負心と劣等感、自己試練および此世に存在せぬものへの憧憬などの遠因となつたのである。ヘルダーにあつてはこのような傾向は最初から明かである。彼は今なお三十年戦争 (Dreißigjähriger Krieg 1618～48) の徹底的惨禍の影響下にある時代の悪弊を呪詛断罪し、羨ましげに過去に目をやり歴史の逸したもろもろの機会を幻想する。それから心機一転して幾分メランコリーをまじえた期待を以て、事物の進行はこれを容認すべき義務のあることを感じる、と同時に彼は不承不承《世紀の禍悪》(Mal du siècle) を放任し、ストイック的なひびきをやどす由々しい宿命論 (Fatalismus) を告知する。彼にはすべての点に於て奇妙な不統一と矛盾が現れており、これらは後の発展に於ても作用しつづけたのである。

彼の文学論（第三章）に於て詳細に述べるはずであるが、ヘルダーの見方は、悟性の代りに感情を、理性の代りに信仰を人間的行蔵の主要発条として据えることであつた。彼は専らドイツ精神を特徴づけているかの情緒的素質を突発せしめた。従つてヘルダー時代に生じた新ドイツ文学は紛れもなく最初から、郷愁や憧憬に規定された感情に力点をおくところの軌道に踏みまようと同時に、当時一般の典型たる古代精神との対立を意識し独自の使命を達成すべき確信をもつに至つた。ヘルダーの処女作たる《ドイツ文学評論断篇》(Fragmente über die neuere deutsche Literatur 1767) は、近代と古代、北方的と南方的、ロマン的と古典的との対立性をドイツ文学に知らしめた。まさにこの著作の特徴は全体をつらぬくロマン的要素であつた。ここに於てヘルダーは、ローマ文明の崩壊、ゲルマン種族の侵入、アラビヤの影響、キリスト教の到来および古典的英

知の再生等の中から、古代精神とは異質的な新しい近代精神が生じたが、この精神は、古典的精神がよく古代精神の特徴を示しているごとく、いかにも新時代にふさわしいものである、と主張したのである。しかし、ここに於ては《klassisch》と《romantisch》との極性は、フリードリヒ・シュレーゲル(Friedr. Schlegel・1772～1829)におけるほど鮮明かつ厳密に設定されなかつた。けだし彼はあまりにも歴史家でありすぎたからである。彼は事物の生起した状況のままにこれを個別的に描写し、かつ人間の思惟および人類一般の発展を最古から最近の時代に至るまで叙述することに没頭しすぎていた。そして彼の発見を更に追求するに必要な確信がなかつたらしく、彼はただ近代的性格を嘆きドイツにおける国民的特性の喪失を遺憾とし、憧憬と驚嘆とを以てギリシャ人の偉大さをかえりみたのであつた。まさしく《世界苦》(Weltschmerz)と《歴史》(Geschichte)とは常にヘルダー精神における双対とみなさるべきである。

このようにヘルダーの活動範囲は異常に広大であつたにもかかわらず、彼の視線は主として《文学》に注がれていたのである。文学は彼のあらゆる努力のアルファにしてかつオメガであつた。彼は文学を、常に新しい観点から尋ね、その創造の源泉にふれ、その価値と影響とに基づき生の表現として吟味し、かつ、あらゆる時代と土地に由来する人間性の証跡とみなした。かくして彼は文学の歴史を書く技術の創始者となつたのである。彼の最初の課題は、ドイツが文学への可能性のみならず一般に文学的能力ある言語を有しているという確信を、ドイツ国民に吹きこむことにあつた。かようなことは現今では殆ど想像することができない。彼の仕事の偉大さは、彼の在世中にドイツ文学が全世界に指導的地位を占めるに至つたことを想起しさえすれば、明かに首肯しうるところであらう。

ドイツ語はヘルダーの最初の関心事であつた。彼はドイツ語を「やたらに見慣れぬ装飾を施され図体は大きいくせに見栄えのしない新流行のビルディング」(I. 376)にたとえた。ラテン語はなお学術の用語として重要であり、フランス語は教養語として通用していた。フリードリヒ大王および他の支配者たちの宮廷におけるフランス的雰囲気はあまりにも周知のこと故、ここではもはや言及の必要をみとめない。夥しいフランス語彙がドイツに輸入されていたので、ドイツ語は雑種とはいえないまでも、わずかに無教養階層のみが話す国語となる危険にさらされていた。たしかに哲学者ヴォルフはドイツの哲学的概念語を新造し、詩人クロプシュトック(Friedr. Gottlieb Klopstock 1724～1803)は新しい感情の表現を獲得し、レッシングは劇作のための明確犀利な叙述方法を案出したのであつた。がしかし、ドイツ語の自己主張のための戦線は、一般にはなお著しい前進を示しておらず、わずかに若干の外堡しか奪回されていなかつたのである。ヘルダーはかかる状況に検討を加え、その弱点を見出しこれを除去すべき計画に着手したのである。彼は先ず文学における独創性を発掘した。フランスを範とするゴットシェト(Johann Christoph Gottsched 1700～66)の改革はドイツにいかがわしい結果をもたらしたかにみえた。そこでは恐るべき自然状態からの醇化は堪えがたい自由の喪失を以て贖われたからである。ゴットシェト

の論敵、スイスの批評家ボートマー（Johann Jakob Bodmer 1698～1783）およびブライティンガー（Johann Jakob Breitinger 1701～74）は、詩的創造に於て想像力および感情の参与を悟性のそれよりも高く評価し、クロプシュトックの《救世主》（Messias 1748～73）と《頌詩》（Ode）とに道をひらいた。クロプシュトックは奔放な想像力と幽深な敬虔神秘の感情の持主であり、その作品では在来の古い表現の殻を破つて多くの新造語を用いた。それはひとつの発端もしくは始動の時代であつた。スイス人ゲスナー（Salomon Geßner 1730～88）は牧歌をかきはじめ、それは直ちに全ヨーロッパに弘まつた。道徳学者たるゲレルト（Christian Fürchtegott Gellert 1715～69）は寓話作家として、リチャードスン（Samuel Richardson 1689～1761）の小説や《涙の喜劇》（comédie larmoyante）の移入者として著名だつた。ヴィーラント（Christoph Martin Wieland 1733～1813）は主としてシェイクスピア翻訳者として、軽快な詩や教養小説（Bildungsroman）の創始者として名声を博した。しかし何といつてもこの時代の支配的な形姿はレッシングであつた。彼は友人ニコラーイ（Christoph Friedrich Nicolai 1733～1811）やメンデルスゾーン（Moses Mendelssohn 1729～86）に支持され、単に仮借なき批評家たるにとどまらず、また指導的劇作家ならびに《ラオコオン》（Laokoon oder über die Grenzen der Poesie und Malerei 1766）の著者として比類なき名声をかちえていた。ニコラーイはジャーナリズムの世界に於て重要な人物であり、メンデルスゾーンは哲学の新領域を開拓せんとしつつあつた。それにもかかわらず、この時代全般を通じて、ドイツは根底に於て依然として外国の文学的典型の制縛下におかれたままであつたのである。

レッシングの評論誌《文学書簡》（Briefe, die neueste Litteratur betreffend 1759～65）の刊行が中止されてしまつたとき、ヘルダーの登場をみるに至つた。当時事態は明かに顕わな挑発と振励的な指導性とを必要としていた。ヘルダーはこれに意を用いた。文学の広い王国はただ《摑みかかり》（Zugreifen）のみを待つていた。批評の領域についていえば、ドイツに於て彼に匹敵する先駆者はレッシングのほかにひとりも存在しなかつた。彼は母国語の価値を意識し、彼の使命の存するところを告知しつつ《摸倣》に戦を宣した。かくして民衆、国民、創造的個性および歴史的持続性のイデーを展開したのである。しかしながら、ヘルダーは時代の頽落を非難することによつて図らずもかのドイツ的思惟の危機をも導入したのである。かかる危機は現代に於ても未だ全的に解決されたとはいいがたいのである。ヘルダーを通して《憧憬》や《世界苦》といつたゲルマン的感情が蘇り、情緒的、非合理的、ロマン的要素があますところなくドイツ的志向の前景に押しだされた。しかも、憧憬と現実との和解はまさにヘルダーの生涯をかけての試みであつた、あたかも彼の祖国が爾後かかる試みから脱出することができなかつたように。

二、社　会

上述のごとく、思想史的系列に於ては、十八世紀は文明的なるも

のに優位を占めさせたのである。宗教、特に新教は世俗的な運動によつて著しく変化した。文化的諸力も同様に思想や実践的活動に於て新しい表現を見出した。合目的性と合理性という生活感情は必然的に反対運動をとき放つこととなつた。すべてのヨーロッパ国民は新しい創造によつて文化的な衝動を充たそうと試みた。社会的団体と文化の担い手とは文化活動と思想とに対する本質的な前提となるものであるから、いまやドイツの発展を促す社会的基礎が示されねばならないのである。

三十年戦争の結果、ドイツの農民および市民の勢力は、民衆生活の指導的支配者として君臨した領邦政府（Territorialregierung）の階級的・封建的特権のために、徹底的に弱められたのであつた。かかる情勢から、民衆と宮廷とを結合する特殊な行政機構が生じた。かつまた、両者の仲介の役割は宗教界の受けもつところとなつたのである。ヘルダーの例は、自己のうちに大世界を受容しながら、しかも都会に於て個人と関係を保つ可能性が与えられていたことを示している。各宗派を和解せしめようとする試みもまた、宗教界が民衆のためにかかる仲介の役を意識していたことをあらわすものである。しかしながら、当時の大学がそうであつたように、宗教界は国家権力に義務を負い、それ自身無力であつた。宮廷はしばしば純政治的な必要によつて諸宗派の上位におかれた。教育機関はいよいよ直接国家に従属せしめられ、階級制度は教育の形態を規定するものとなつた。絶対主義は諸階級にさほど大きな政治的任務を委ねていなかつたにもかかわらず、諸階級の社会的懸隔は充分にこれを存続せしめたのであつて、それはまた各教育機関がそれぞれ厳しく隔離されていたのと軌を一にするものである。„Volksschulen, Bürgerschulen, Gelehrtenschulen, Adelsakademien standen in harter Abgeschlossenheit nebeneinander, gleich den Ständen selber.“（W. Dilthey: Schriften III. S. 163）。

従つて貴族階級は概ね爾余の民衆から完全に分離されていた。かような境遇のなかで、この階級は柔弱と奢侈のために堕落した、とゲーテはいう。貴族と市民とが相会したところでは、両者の距りを表徴するために、坐席のあいだにはいくらかの空間が残されたのであつた。市民的教養は決して貴族の風習とはならなかつた。似而非ルソー的思想がひろく貴族社会の教育をさまたげ、自然なこと（Natürlichkeit）がこの社会の流行となつた（*vgl.* H. Weil: Die Entstehung des deutschen Bildungsprinzips. 1930）。真の貴族の標識としては常に徳操と英知とが第一に挙げられていたが、しかし殆どすべての貴族はかれらの階級的な閉鎖性を主な特徴とみなしたのであつた。貴族の最も上品な形態は田舎貴族（Landadel）であつた。彼等は賦役農夫と交渉をもつ必要がなかつた。田園生活は世の中のあらゆる生き方の中で、正直で賢明なひとにとつては最も快的な最も無邪気な最も健康なものである。それ故、無邪気に生活し、神の恵みにやすらかな浄福を享受しうる限り、田舎貴族はかような安楽な生き方のほかに何も考えなかつたのである。かかる自然に耽溺せる貴族に対して、都市貴族（Stadtadel）は、彼等があらゆる不安定な職務を放棄し、ともかくもこの階級の名を辱しめない場合にのみ、

田舎貴族と同等の価値を認められたのである。また一般に、《書籍》に対する貴族の態度は、市民層のそれとは全く異る意味を有していた。書籍は彼等にとつて最も上品な最も有益な娯楽の対象であつた（註。この辺の消息は、一七五二年刊行の J. M. von Leon著《Der Adel》および《Gedanken zur Verbesserung der menschlichen Gesellschaft》の中にうかがわれる）。貴族階級に於ては、享楽（Genuß）と教養（Bildung）とは等価値視されたのである。貴族と教養との崩壊について特筆すべきことは、学者貴族（Gelehrtenadel）が当時すでに勢力をうしなつていたという事実である。これに反して、国家から生じた軍人貴族（Militäradel）と官僚貴族（Beamtenadel）とは、他の貴族よりはるかに強く啓蒙主義やフランス風の宮廷文化につながつていたのである。一般に、貴族には大体三つの可能性が与えられていた。すなわち、自力で働き文筆家として立つこと、市民的知性のために芸術保護の任を果すこと、宮廷や都会のサロンに於て精神界の選良分子のために社会的基盤をつくる手助けをすること――これが貴族のなしうる可能性であつた。

一七四〇年以来、ドイツ市民階級は著しく覚醒し始めた。市民階級が国家および貴族と対決することによつて、社会的なるものが発見され、階級理論が基礎づけられたのである。階級意識とともに個人の意義が高められ、個人はいよいよ強く生活形成の諸力を自己の内部から発現せしめることができ、かつ発現せしめざるをえなかつた。何となれば、個人は文明の進展とともに自然的ならびに階級的なつながりから引離されたからである。市民層は新教的正統信仰から鋭く分離していたにもかかわらず、なお根づよくキリスト教的宗教心をもちつづけていた。かくして市民的啓蒙運動は依然として、すでに宗教改革の本質の中に根ざしていたような庶民の宗教的傾向とつながつていたのである。フランス啓蒙主義とは反対に、ドイツに於てはあらゆる階級の内面的な連帯が追求された。かかる市民的啓蒙主義はまたドイツ人みずからの価値に対する自覚によるところが大きいのである。かような自覚はすでに一七二五年、文学史をドイツ的価値の自己発見のために開拓せんと欲した学者に於て見出される。„Die anderen Völker werfen uns Rückständigkeit vor. Aber sie wußten eben um ihre früheren Meriten, während wir nichts über unsere, so daß wir nichts antworten konnten. In Wirklichkeit haben uns die Ausländer dreimal mehr als wir ihnen zu verdanken“（Reimann: Versuch einer Einleitung in die historiam litterariam. III. 2. Hälfte 1721 S. 40）。宮廷や学校がただ外国の衒学的な模倣のみに終始していたのに対して、ようやく識者の論難が加えられ始めた。この際特に重要なことは、他民族に敵対する国民的闘争ではなくて、市民階級がその独自なドイツ的価値のために反宮廷的な社会的権利を主張しえたという事実である。文学史は独自な民族意識を旺盛ならしめた。それ故、フリードリヒ大王の官僚国家とドイツ市民階級との、すなわち宮廷的啓蒙主義と市民的啓蒙主義との結託は内面的矛盾を含んでいる。ドイツに於ても勿論、ヒューマニズムの伝統の中で国民的なるものが培養されたのであるが、しかしそれはあらゆる文化と同様、依然としてア

カデミックもしくは宮廷的な色彩をおび支配権力に拘束されていたので、国民全体に対して社会的な影響を及ぼすまでには至らなかつた。絶対主義の政治は民衆社会の生活になんら顧慮するところがなかつた。民衆生活の統一的な機構を支配すべきものは理性にほかならなかつたのである。

すでに一七六五年トーマス・アプト（Thomas Abbt 1738～66）は新しい市民的発展の危険に感づいていた。彼は学者と民衆との疎隔をみるとともに、学者および貴族風の教育をうけた人々のあいだでは、国民の精神や趣味を見出すことの不可能なる所以を説いている。知識層はもはや根底に於て全然いかなる国土にも属していなかつた。アプトはいう。外国の風習や知識に未だ感染していない国民のみが、国民精神を擁護しうるのである（T. Abbt: Vom Verdienst 1765 S. 272）、と。しかしこのアプトの市民階級に対する警告に耳を籍すものは当時殆ど存在しなかつたのである。市民層が旧い権力と結託するに至つたのは避けがたい勢いであつた。しかもその進歩的な諸力は漸く貴族からも認められ、未来の社会形成のために有用視されるに至つた。ドイツ貴族は個々の代表者を介して市民的運動に参加したが、国民精神を改造する原動力は中流階級であつた。いまや、国家の任務は、国民の政治的秩序を市民的教養の中にはたらく国民的精神と調和せしめることとなつたのである。市民的権利の主張は中んずく《世論》（öffentliche Meinung）という新しい標語によつて正当化された。世論は権威をもち、貴族は世襲的地位から選挙による地位に変じ、同時に《公的に善き意見》は或る人間を或る地位に選ぶための判定者となつた。市民階級に対するかかる信頼の基礎は、市民の文明開化的な諸力の中に、その啓蒙された労働意欲の中に在しているのである。

ここに於てわれわれは、教養の担い手たる知識層が民衆全体の中でいかなる地位を占めていたか、を明かにする必要がある。

絶対主義的身分国家（Ständestaat）はすでに新しい諸学問の総本家たるの観を呈していた。神学的、法律的もしくは自然科学的な教養は、市民層に属する人々の地位を向上させるための前提条件であつた。従つて啓蒙主義にとつて教養概念とみなされたものは、内部からの発展および拡大ではなくて、規定の目的にかなつた現存の知識材をわがものとすることである（*vgl.* A. Bender : Thomas Abbt 1922 S. 40）。かかる事情から、教養の担い手たる大学、アカデミーおよび教会が、民衆の中から生じた新しい理論を受入れなかつた理由を察知することができる。啓蒙主義は通常寛容の精神として知られているにもかかわらず、かかる狭量な面をもつていたことも看過されてはならない。このことは恐らく知識層の社会的地位に基因すると思われる。啓蒙的教養は、その宮廷的形式に於ては特に《享楽と遊戯》であり、その市民的形式に於ては主として《確実かつ有用なる知識》であつた。支配階級は全体的教養を有せず、市民的教養層は領主や貴族に従属していたので、真に自由な教養社会はドイツ啓蒙主義からは生じなかつたといつてよい。かくして王室の官吏たるハーマン（Joh. Georg Hamann 1730～88）に於て、教養層のかかる境位から、宮廷の権力支配および市民の権力参加の手段

となつた啓蒙主義に反旗をひるがえす最初の運動が勃発した。《北方の魔仙》（Magus des Nordens）は秘密にみちた言葉で民力の衰微に対する訴えの書をかいたのである。それ故市民階級にとつては、知識人や労働者の交際を可能ならしめる独立の団体を確立する必要が生じてきた。そのような団体のひとつとして、特にフリーメーソン（Freimaurer, *engl*: free-mason 共済秘密結社〔会員〕）の名を挙げることができる。それはイギリスに於て十七世紀の初期在来の石工組合（societies of freemasons）が新たに名誉会員（accepted mason）の参加を許して以来、思想的にも訓練され次第に発達し、一七一四年ロンドンにおける四秘密会（lodges）が合併して新たに grand lodge なる新組織を結成した。これがドイツにも広まり、一七四〇年以来、以前のドイツ諸結社を排除し、会員相互の扶助と友愛の助長を図る目的のもとに自由都市の市民の中に多数の信奉者を獲得するに至つたのである。この結社の連合組織体の中にヒューマニズム礼讃の思想が長く生きつづけ、これによつて社会の活動的な人々の会合が可能となつた。ここに於てはキリスト教とヒューマニズムとは統合されており、合理主義と敬虔主義との実際的な協調が探求されたのであつた（*vgl.* E. Lenhoff: Die Freimaurer 1929）。

その他、フリーメーソン制度とは無関係に、より小さな精神的サークルが多く結成された。ヤコービー（Friedrich Heinrich Jacobi 1743〜1819）を中心に一種のプラトン的アカデミーが結成され、ゲッティンゲン（Göttingen）には《森の詩社》（Hainbund 1772）が成立した。なおこのほかに、ゲーテも近づいた《静寂派》（Die Stillen im Lande）の人たち、すなわちハーマン、モーザー（Friedr. Karl Ludwig v. Moser 1723〜98）、クレッテンベルク（Susanne Kath. v. Klettenberg 1723〜74）等の仲間が存在した。その他群小団体について特記すべきことは、それらが或る中心的な文学的題材の享受を主要目的としており、活動的な運動を何ひとつ起さなかつたという事実である。このような幾分内密的な団体と並んで、定期刊行物の編集所もまた文筆家たちの会合の場所となつたのである。かくして、もはや個人だけでは公的社会に現れることなく、むしろ概ね志操を同じうする仲間がそれ自身ひとつの堅固な公衆を組織してもろもろの社会的限界を打破しえたのであつた。ヘルダーもまたこの例に洩れるものではなかつた。彼は暫時フリードリヒ・ニコラーイの啓蒙的な《通俗ドイツ文庫》（Allgemeine deutsche Bibliothek 一七六五年創刊）にすら加わつていた。当時の雑誌や新聞および交友間の文通等が醸成した知識層の共同社会形式は、かのフリーメーソン結社の盟約に劣らず重要なものであつた。

文化、特に文筆活動に対する宗教者の意義もまた啓蒙運動によつて強められたのである。多くの神学者たちは正統信仰派の抵抗をうけながら、市民層の代弁者であるとともに文筆家でもあつた。これに反しフランス化された上層階級は、表面は民衆のために相当の努力を試みたにもかかわらず、全く威信を失い殆ど無にひとしい存在となり、宗教者からも敬遠されるに至つた。《家庭教師》（Hofmeister）からも文化に対する活動はもはや期待できなかつた。知識人の多くが経験したこの地位は精神的圧迫がはげしく、そこからい

かなる積極性も生れようがなかつたからである。

市民階級の啓蒙主義は本来明かに社会的、政治的な運動と考えられていた。にもかかわらず、どこにもそれらの自主的統合を見ることはなかつた。従つてトレルチュ（Ernst Troeltsch 1865～1923）のいうごとく、最初から小市民的（kleinbürgerlich）であり、善意の官吏、学者、宗教者等の無力なサークルに分裂してしまつていたのである。ひとびとは新しい理念を主張する王候を崇拝した。十八世紀中葉以来、宮廷が市民的精神を自己の圏内にまで「引上げる」に至つたのは、まさにその優勢な政治的地位によるものであつた。

ヘルダーはかかる時代の趨勢と発展とに対決しなければならなかつた。彼は私的な職業上の危険については殆ど発言しなかつたが、彼の思想と経験とはたえず社会および国家を目指していた。さらに一層彼を動かしたものは、人間および社会の中にはたらいている seelisch-geistig な諸力であつた。これらの諸力を識別し評価することが彼の目標にほかならなかつたのである。彼の教説は社会的ならびに心霊的・精神的な生活圏に於て、彼の個人的な形姿の展開とともに発展したのである。われわれがかかる生活圏をこの時代の諸勢力の中で理解しようと試みたのは、ヘルダーの形姿と文筆活動の本質とにより近づくためであつた。ヘルダー自身が観察と熟考を通して時代の諸勢力をみたに相違ないように、われわれもまたこれら諸勢力の主要な特徴を知ろうと欲した。いかにそれらがヘルダーの生存に於て内面化せられ、かつそれによつてさらに広大な力にまで形成されたかは、これからの課題である。ヘルダーは一市民の世俗的運命を宗教的・文化的な諸力で充たし、同時にその生活を普遍的な意義にまで高めたのであつた。

第二章　ヘルダーの生涯と作品

一、モールンゲン時代

Mohrungen における幼少時代（一七四四年―六二年）：――Johann Gottfried Herder は一七七四年八月二五日夜おそく（午後十二時前）東プロイセン（OstpreuBen）の小さな町モールンゲン（Mohrungen, 当時人口約一八〇〇）に、教会の合唱指揮者を兼ねた貧しい学校教師の長男として生れた。両親とも勤勉で信仰心あつく町民の尊敬をうけていた。„Der Vater war ein ernster, seine Pflichten gewissenhaft erfüllender Mann,…Die Mutter, eine verständige, besonnene, fleißige und stille Frau, mit der zärtlichsten Liebe und Frömmigkeit an ihren Kindern hängend,…Dieses Ehepaar lebte, bei geringem Einkommen, zwar arm, doch nicht eben dürftig, und erhielt sich durch einen regelmäßigen Haushalt, Fleiß und eigezogenen frommen Lebenswandel die Achtung seiner Mitbürger.“（Maria Karoline, Herders Frau: 《Erinnerungen aus dem Leben Joh. Gottfrieds von Herder》）。苦しい生計の中で厳格な父と柔和な母のかもしだす宗教的な雰囲気は、ヘルダーの生涯に大きな影響を及ぼしたのである。彼は幼少の頃から父

の早教育を受け、知識欲旺盛で常時読書に耽つた。Stadtschule 入学後はいよいよ俊才ぶりを発揮、特にラテン語をよくし、さらにギリシャ語、ヘブライ語の特別教育を受けた。家にあつて聖書を耽読し、すでに聖書に対する彼独自の宗教的審美的感覚の萌芽を示しはじめていた。十六才の時、副牧師トレショ(Sebastian Friedrich Trescho; 当時二十七才、《Geschichte meines Herzens》など宗教的作品を書いてかなり成功を収めていた)の助手兼筆耕となつた。この地位は少年ヘルダーにさらに多く読書の利便を与えた。病弱なトレショの神経質な仕打ちのために往々不快な目にあつた(註。過度な読書欲のために屢々トレショの言いつけを守らなかつたことも事実である。)のであるが、ヘルダーはトレショの蔵書から初めてクライスト(Ewald von Kleist 1715〜59)など多くの古いドイツ詩人や同郷の詩人ダーハ(Simon Dach 1605〜59)を知つたのであつた。„Mit welchem Entzücken erinnere ich mich meiner Jugend, da ich zuerst diese (註:=Uz, Haller, E. v. Kleist, Klopstock, Lessing, Winckelmann) und die alten Schriftsteller und die ersten Schriftsteller fremder Nationen las! Kaum reicht in meinen späteren Jahren etwas an diese Freude, an dies süße Erstaunen." (Der 52jährige Herder in seiner XVII. Schulrede 1796)。ヘルダーは早くから詩作を試みていたが、それらの初期の試作の中、この時分のものをひとつだけ紹介しておこう。„…ich blinzle!…Denn im Waffenfeuer/ fuhr Pindar vor mir her,/ und Siegespfeile rauschten aus der Leier/im Tritt der Harmonien schwer: ‖ Die trafen, blend'ten

mich! —Unlöschbar brannte/sein hohes Götterbild/sich in mein Kapitol, und jeder Altar nannte/den Gott, der meinen Tempel füllt ‖ mit fremden Kohlen; denn mein Sonnenfeuer/ ist tot! —O flöh ich dich,/daß tief in Wüstenein, wo keine Leier/bezaubert, ich noch fühlte mich!" 一七六二年の春ヘルダーは内密にトレショの作品に添えて、《An Cyrus, den Enkel des Astyages》と題する自作の詩をケーニヒスベルクの Kanter 書肆に送つた。これが Kanter の注意をひき、彼の作品が印刷に付された最初のものとなつた。東プロイセンは一七五八年以来ロシヤの占領下にあつたが、一七六二年 Elisabeth の死後、Friedrich 大王の熱烈な崇拝者たる Peter 三世が即位するや、ただちに大王と和を結びこの土地を明け渡した。ヘルダーの詩は、この事件を、解放された一ユダヤ人がキュロス(Cyrus 559〜529 v. Chr.)に献げる感謝の讃歌という形式で、讃美したものである。それは「精神と感動とのこもつた」(Kanter の評言)ものとしてケーニヒスベルクではかなり注目をひいたようである。„Der gürtet Königen das Blutschwert ab,/und regnet Ruh und Glück/Auf seine Herden. Fremde gibt sein Stab/Dem ersten Hirten gern zurück…"

ヘルダーの生涯における最初の決定的な転機は、一七六二年の夏に訪れた。先年の冬、七年戦争(der siebenjährige Krieg 1756〜63)からの帰途ロシヤ軍隊とともにモールンゲンに滞在していた Schwartz-Erla という連隊付軍医が、この十八才の若者の卓れた才能、特にラテン語の知識に興味をいだき、ケーニヒスベルクで外科学を

習得させ、眼病（註。ヘルダーは五才のとき涙嚢管炎にかかり、それが生涯の持病となつた。）の治療を受けさせようと申出た（*vgl.* Hans Reiser: Herder S. 20）。ヘルダーは外科学の勉強に格別関心をよせていたわけではないが、自分の苦境を救つてくれるものと思われたので、喜んでその申出を受け入れた。晩年に於てもヘルダーは深い感謝の念を以てこのひとを追憶し、いつも口癖のように言つた。「このように其の後私の生涯にいろんな障害が起つたとき、何か予期しないものが私を助けにきてくれて私の運命を決定した」（ebd. S. 20～21）と。かような人生体験からいよいよ彼は目にみえぬ導きの力を信じ、何か高次なる存在に導かれていると感ずるようになつた。こんな気持でヘルダーは一七六二年夏恩人とともにモールンゲンを去つた――そしてもはや両親と再び相まみえることがなかつたのである。

二、ケーニヒスベルク時代

Königsberg 時代（一七六二年―六四年）：――突然いなか町から大都会に出てきたヘルダーには、ケーニヒスベルクは何もかも驚嘆の種ならざるはなかつた。„Einzig war der Eindruck: aus meinem armen, stillen Mohrungen in diese große, gewerbreiche, geräusch- und geschäftsvolle Stadt mit einmal versezt! Wie staunte ich alles an! Wie groß war mir alles!“（ebd. S. 22）。早速外科学の勉学にとりかからねばならなかつたので、かの軍医に伴われて或る解剖を参観した。その時彼の繊細な神経はその惨忍さに堪えることができず失神してしまつた。この偶然の出来事が永久に彼の人生を決定づけたのである。医学の勉強を諦めたヘルダーは、神学の修業を志し、モールンゲン時代の学友エンマリヒ（Johann Christian Emmerich; 註。ヘルダーより年長であるが、ギリシヤ語、ヘブライ語の特別授業に同席したことがある。すでに伝道師職候補者になつていた。）と相談の末、大学入学の試験を受けこれに合格した。恩人の切なる勧奨にも翻意しなかつたが、約束した医学論文のラテン語翻訳はつづけた。エンマリヒの世話と故郷の友人からの好意とによつて辛うじて苦境を切抜けはしたが、フリードリヒ学院（Collegium Fridericianum）に就職する（Ostern 1763）までは経済的に極度の辛酸をなめたのである。次の断篇から当時の心境をうかがうことができる。„Ich Gymnosoph, wie viel kann ich entbehren!/Pracht, Winter, Regen, seht!/Euch trotzt mein Kleid und ird'schen Ehren,/Und reich bin ich wie ein Poet/Und akademisch frei!—Nur meinem Magen/Dien', denk' und bin ich—sonst recht frei.“

やがて彼は書肆主 Kanter の好意で読書の利便を与えられ、その計らいで、ケーニヒスベルク新聞に小論や詩を書くようになつた。何といつてもこの時期におけるヘルダーの最も大きな体験は、カント（Immanuel Kant 1724～1804）の哲学的天才に触れ、かつハーマン（Johann Georg Hamann 1730～88）との生涯にわたる親交の端緒をえたことであつた。Kanter 書肆は当時学者や学生の集会所のごとき観を呈していた。ヘルダーは最初ここでカントと知り合

いになつたものと思われる。未だ齢四十にとどかぬ私講師（Privatdozent）だつたカントは、当時ヒュームによつてヴォルフの合理論から転向せしめられ懐疑的経験論に一時的な立脚点を見出し、その中に哲学と倫理学との新しい基礎づけを試みていたのである。ヘルダーは専門の神学の科目以外に、カントの講義を最も熱心に聴き、その《批判哲学》以前の哲学を通して、一切の認識は経験の中に与えられており、かつ哲学への道は人間の研究を通過せねばならぬ、という確固たる信念を植えつけられたのであつた。ハーマンは、ヘルダーが恩人Schwartz-Erlaの紹介で世話になつた市の外科医の息子で、すでに放恣な青年時代を経てロンドンで回心を経験した後帰郷、当時ケーニヒスベルクに於て宗教的神秘的な文筆活動の頂点にあり、《ソクラテス的回想録》（Sokratische Denkwürdigkeiten 1759）や《言語学者の十字軍》（Kreuzzüge eines Philologen 1762）を発表して間もない頃であつた。彼はカントよりも一層断乎と合理主義に挑戦し、一切の高次な知を感性と信仰とから誘導した。カントとハーマン、特に後者によつて、ヘルダーの精神は、わずか二年あまりの修業期間であつたにもかかわらず、決定的な方向をとるに至つたのである。ヘルダーはケーニヒスベルクでも同僚間にその勤勉と秀才を謳われ、また時折新聞に熱狂的な詩を発表したりした。カントすらヘルダーの或るKarfreitagsgedichtに対して、„Wenn das brausende Genie wird abgegoren haben, wird er mit seinen großen Talenten ein nützlicher Mann werden“ と批評したそうである（*vgl.* H. Reisiger: Herder S. 29）。ヘルダーもまたいかに当時のカ

ントに敬服していたかは、カントによる精神の解放感を歌つた彼の詩によつて窺うことができる。“Als ich, wo man nichts denkt—nichts fühlt,/einst Ketten trug, durchnagt von Staub und Schweiß und Tränen,/seufzt' ich—denn singt ein Sklave wohl?/Da kam Apoll, der Gott:/Die Fessel weg! mein Erdenblick/ward hoch—Er gab mir Kant!“ また、一七九五年の《人道主義書簡》（Briefe zur Beförderung der Humanität）に於ても彼自身のカント回想は感謝と好意にみちており、そこにはカントの潑剌たる講義ぶりが語られている。„Ich habe das Glück genossen, einen Philosophen zu kennen, der mein Lehrer war…Mit eben dem Geist, mit dem er Leibniz, Wolff, Baumgarten, Crusius, Hume prüfte und die Naturgesetze Keplers, Newtons, der Physiker verfolgte, nahm er auch die damals erscheinenden Schriften Rousseaus, seinen Emile und seine Héloïse so wie jede ihm bekanntgewordene Naturentdeckung auf, würdigte sie und kam immer zurück auf unbefangene Kenntnis der Natur und auf moralischen Wert des Menschen…sein Bild steht angenehm vor mir.“ ヘルダーが批判哲学以前のカントに多大の共感と尊敬を感じたことは明かである。にもかかわらず、カントのいわゆる „das brausende Genie“（前出）たるヘルダーには、その本質的内奥に於てカントと折り合わぬ何ものかがあつたこともまた想像に難くないのである。„Kants glückliche Gabe, schön und scharfsinnig zu reden, konnte Herder nicht ganz befriedigen, und eine Sympa-

"thie beider Gemüter fand niemals statt."(《Erinnerungen》)と Karoline Herder も指摘している。しかるに、ハーマンとは益々親密の度を加えるばかりであつた（註。両者は年令に於て十四才の隔りがあるにもかゝわらず、書簡では互に Freund を以て呼び合つた）。ヘルダーはハーマンの中に、自分が探し求めていたもの、すなわち一切の das Große und das Gute に対する共感、精神的な敬虔性、最も厳粛な道徳的諸原則、心情や精神における高貴かつ神聖な天才性といつたものを発見した。ハーマンは、自分は合理的な真理、原則および体系に堪えることができない、ただ断片、気紛れおよび思いつきを与えるだけである、といつた。かかるハーマン的要素はとりもなおさずヘルダーの内面に符合するところが多かつたのである。彼等の志操の一致は相互の精神的伝達によつていよいよ深化した。ヘルダーはハーマンに英語を教わり、シェイクスピア（William Shakespeare 1564～1616）の《ハムレット》（Hamlet 1600～1）およびミルトン（John Milton 1608～74）の《失楽園》（Paradise lost 12 Bde. 1658～63）を読んだ。特にハムレットには痛く感動し、これを殆ど暗誦するまでになつた。これは民謡の素朴感動的な自然言語への興味と偏愛とを生ぜしめ、後の《シェイクスピヤ論》および《オシアン論》執筆の源となつた。そして彼が神学的・哲学的研究のかたわら文学に向けたところの情熱的な関心は、《頌詩論》（Abhandlung über die Ode）の試案を熟さしめた。この断篇の中に、„…Die Ausbreitung der Wissenschaften verengert die Künste, die Ausbildung der Poetik die Poesie; endlich haben wir Regeln statt poetischer Empfindung; wir borgen Reste aus den Alten, und die Dichtkunst ist tot!…Laßt uns unsere Menschen nach unserm Gesicht malen, ohne poetische Farben aus einem fremden Himmelsstrich zu holen…—Shakespeares Schriften und die nordische Edda und Skaldrer Gesänge müssen unsere Poesie bestimmen." と主張されている。これはまさしく後の著作への発展の萠芽にほかならないのである。

これより先、ヘルダーはハーマンの推薦で Collegium Fridericianum に監督係（Inspizient）として採用されていた。初めはその附属小学校（Elementarschule）に勤めた。一七六二年のミカエル祭（Michael 九月二九日）頃には下級生に算数を教えていたが、翌六三年にははやくも才能を認められてギリシャ語、フランス語、ヘブライ語および数学の第三学級における教授を委任されるに至つた。そこで小学校を辞し、それ以来一七六四年まで第二学級でラテン語と詩を、さらに歴史および哲学の第一学級をも教えたのである。この短期間における異数の昇進にひとびとはただ瞠目するばかりであつた。次の言葉はこの消息をよく伝えている。„Jedermann war erstaunt, daß ein so junger Mann so schnell den Unterricht in den obern Klassen bekam, und wir Schüler bewunderten seine feurige Sprache, als der Inspektor ihn aufforderte, die öffentliche Betstunden zu halten: ein Amt, das sonst nur den älteren Lehrern zuteil ward." (Subinspektor Thiele, ein ehemaliger Schüler Herders; Reisiger: Herder S. 28)。

なおケーニヒスベルク時代のヘルダーにとつて忘れることのできない事件は父の死であつた。辛うじて独立の生計を営めるようになつた息子と再会することもなく、父は一七六三年九月二十六日モールンゲンで他界した。わがヘルダーの悲しみも十分察することができる。彼は母に相続財産――小家屋・庭・若干の田畑――を贈つてこれを慰めたのである。

再びハーマンによつて、ヘルダーはリーガー（Riga）大聖堂附属学校（Domschule）の校長リンドナー（J. G. Lindner）に、助教師（Kollaborator）の地位を推薦されていた。一七六四年十月二十七日任命状が発送され、十一月初めヘルダーに届いた。それには „125 Gulden Preußisch“ の旅費が添えられてあつた。彼は直ちに赴任しようと思つたが、折悪しく十一月十一日ケーニヒスベルクに大火災が起り、数日間燃えつづけ市街の大半は焼失、市の機能は全く麻痺状態に陥つたため、出発を延ばさねばならなかつた。この大椿事を記念して、彼は „Trauergesang auf die Asche Königsbergs“ という悲愴な詩をつくつている。

三、リーガー時代

Riga 時代（一七六四年―六九年）：――一七六四年十一月末任地リーガーに到着、十二月七日 Domschule の Kollaborator に就任した。この Livland の首都リーガーは古いハンザ同盟都市（Hansestadt）であつた。Livland は der nordische Krieg 後ロシヤの所領となり、一七六二年ペーター三世（Peter III.）が弑せられて以来、カタリーナ女帝（Katharina die Große）の支配下にあつた。その君主政治の下にあつて、リーガーは依然貴族的―市民的な都市共和国（Stadtrepublik）として自治権を有していた。ロシヤと女帝（このひとは事実ドイツ人でもあつた）に対する忠誠にもかかわらず、ドイツ的風習を固執し、ドイツ的精神生活との交渉は依然として活発であつた。従つて教育者や聖職者はドイツから、特に近在のケーニヒスベルクから招聘されたのである。

ヘルダーはここで市民生活や政治の事情にめざめ、彼の人生観はいよいよ拡大された。彼は公共的な人間生活の知識が増大するとともに、市民的自由、市民的福祉に関するより高い理想をいだくようになつた。リーガー市民の愛国的な志操にまきこまれ、市の一般用務はまた彼の関心事となつた。彼は屢々演説や詩文を通して市民生活を活気づけようとした。例えば一七六五年リーガー市庁の新築祝に《Haben wir noch das Publikum und Vaterland der Alten?》という演説を行つている。

ヘルダーの著作活動について特筆すべきことは、当地に於て誠実な後援者を見出したことである。ケーニヒスベルク時代の学友ハルトクノッホ（Johann Friedrich Hartknoch）はヘルダーの意見をいれてリーガーで書籍出版業を始めた。爾来このひとはヘルダーの著述の出版者となつたり、後のヘルダーの旅行に援助を与えたりして、両者の親交は一生涯つづいた。

ヘルダーにとつてリーガーは外的生活に於ては一応快的で活気が

あつたが、内的生活に於ては何となく刺戟に乏しかつたらしい。

„Ich habe sehr mäßige Arbeit, so daß, weil der Boden hier vor einen Gelehrten von Profession ein solum papaveriferum, somniferum（註:＝ein Mohn und Schlaf hervorbringender）ist, ich beinahe schlummere; mir fehlen die Türen zu Bekanntschaften und Stacheln zu kleinen Arbeiten…“（Herder an Hamann, 16. Jan. 1765）。彼は友人との交際を断ち、いかにして哲学が民衆のために一層役立ちうるようになるか、という問題に没頭したことがあつた。„Ich lebe abgesondert von meinen Brüdern: und auch hier wie unter Fremden.—Ich bin eine Zeitlang totus in illo（註:＝ganz damit beschäftigt）gewesen, eine Menge meiner Lieblingsideen unter das Thema zu bringen: wie die Philosophie zum Besten des Volkes allgemeiner und nützlicher werden kann…“（an Hamann, 4. Mai 1765）。因に、この手紙に対するハーマンの返書に、観念論的思考の廃棄を促すかの有名な《より少く考え、より多く生きよ》（Denken Sie weniger und leben Sie mehr!）ということばが書かれている（*vgl.* Hamann an Herder, 18. Mai 1765）。

ヘルダーはハーマンの忠告をきき入れ、実際的な指示者となり、書物の代りに人間を知るべく努力することを誓い、„Die Literaturbriefe habe ich noch nicht in ihrem Abschiedskleide gelesen; und ich denke, weil dies Werk gleichsam mit meinem Geschmack zusammen aufgewachsen ist, es noch einmal ganz zu durchlaufen.“（an Hamann, 21. Mai 1765）と附け加えている。ここにいわれている „Literaturbriefe“（文学書簡）とは《Briefe, die neueste Literatur betreffend》のことである。この文学評論誌はレッシングが友人ニコラーイの協力をえて一七五九年ベルリーンで発刊したものであり、同誌上でレッシングは、合理主義的思想の親近性にもかかわらず、ゴットシェットを論難し、フランス絶対等族王政の文学である古典主義文学を範とするゴットシェットの文学論に内在する宮廷的奴僕的要素を根絶しようとした。しかし一七六〇年秋露墺連合軍がベルリーンを占拠して言論弾圧が加わるに及んで、タウエンツィーン将軍（Bogislaw von Tauentzien 1710～91）の秘書としてブレスラウ（Breslau）に赴いたので、結局文学書簡二四巻の中六分の一だけが彼の執筆にかかるものであつた。彼の後この評論誌の最も重要な協力者はフランクフルト（Frankfurt an der Oder）大学教授の Thomas Abbt であつたが、遂に一七六五年に廃刊のやむなきに至つた（註。その代りにニコラーイは《通俗ドイツ文庫》Allgemeine deutsche Bibliothek を刊行した）。

ヘルダーの精神は学校や教会の狭隘な領域から時代の広大な生活領域へと羽ばたき始めた。すでにケーニヒスベルクに於てレッシングの《文学書簡》に対する是非の考察に着手していた。かくして一七六六年秋《新ドイツ文学評論断篇、第一断篇集》（Über die neuere deutsche Literatur. Erste Sammlung von Fragmenten）および第二断篇集が、翌六七年復活祭に第三断篇集が発表されたのである。これら諸断篇はレッシングの文学書簡にささげられている。《断篇》

は《文学書簡》の「続き」もしくは「附録」としてあらわれ、この有益な評論誌の批評の再批判を行い、その若干の権威的命令に抗議し、その若干の缺点を補充しようとするものであつた(*vgl.* Vorrede zur zweiten Ausgabe)。元来ヘルダーは「相互に強化し合い殆ど分つことのできない」(gemeinschaftlich sich zur Stärke dienen und beinahe unzertrennlich sind)「文学の四つの領土」(vier Ländereien der Literatur)、すなわち言語、美学、歴史および哲学を四つの断篇集に於て取扱うつもりであつた。ところが執筆中に《言語》のテーマが著しく増大したので、このテーマは第一集のみならず、そこから生ずるドイツ文学と東洋、ギリシャ、ローマ詩人との関係についての考察とともに、また第二集および第三集をも充たした。そして結局、美学、歴史および哲学を一緒に取扱うはずであつた第四集は全然成立せず、かえつてこれらは新しい別の仕事として残つた。彼が知識、観察および予感の充溢や多様性にもかかわらず、否そのために、常に断片性を保持したということは、ヘルダー的活動の特徴である。いわば彼は到る処生命と生長をよび起す春の風に似ていたが、彼自身に於て実を結ぶことはなかつた。この場合、われわれの脳裡をかすめるのは、„Der Unruhe des Frühlings trieb ihn umher, aber er selber war der Frühling nicht!“(《Der Wanderer und sein Schatten》)というニーチェ(Friedrich Nietzsche 1844〜1900)のことばである。欝勃たる行為への衝動にもかかわらず、どこか隠遁性を秘めているような人間の典型が、これら二個の偉大な、ドイツ的な、あまりにドイツ的な形姿の中にみとめられないであろうか。ニーチェにあつても、完成したるものとしてわれわれに与えられるものは存在しない。なぜなら彼のうちには究極の安息も究極の真理も決して維持されることなく、彼はまさしく本来的な《生》衝動から発するところの前進の源泉たる不安の原動力だからである。まことに、ヘルダーの十八世紀的 Aufklärerei に対するは、ニーチェの十九世紀的 Bildungsphilisterei に対するのと軌を一にする。

さてしかし、《Fragmente》なるこの処女作における予感にみちた動揺は、やがて全ドイツの耳目を聳動せしめたのである。ヴィンケルマンでさえ „Was ist für ein neuer Pindar unter euch aufgestanden?“ (an Christian Gottlob Heyne) といつた。若冠二十二才の青年がレッシングに対決しつつ、他民族の本質と言語とに対する非凡な感入力によつて、ドイツの母国語およびドイツの独自性への自覚を喚起し培養すべきことを揚言した。それはハーマンの精神に於て、特にまたレッシングの精神に於てではあつたが、しかしさらに一層若々しい情熱とあらゆる時代の諸文化への一層包括的な眼差しとを以てなされたのである。その不朽の歴史的意義はドイツ文学を次の二つの観点から論じたことにある。すなわち、言語は精神形成の基礎であるということと、ドイツ文学は外国文学の典型に、またギリシャ・ローマの典型にも、屢々不自然な外面的模倣によつてでなく自己創造的な追形成によつて、民族的独自性を維持しつつ比肩しうるようにならねばならないということとがそれである。ヘルダーは端的に叫ぶ。 „Raube ihnen nicht das Erfundene, son-

dern die Kunst, zu erfinden, zu erdichten, einzukleiden!“と。かかる主張は明かにヘルダー自身の外国語教授の経験と考察とから生じたのである。またドイツ語自体に関する考察は、母国語の力と美との自覚を、ひいては alte Nationallieder の蒐集を促すに足る無限の刺戟と価値とをもつているのである。要するに、ヘルダーによれば、一切の思惟と判断とは民族性の土台の上にきずかれた人間教化に寄与するものでなければならない。„Alle Philosophie, die des Volkes sein soll, muß das Volk zu seinem Mittelpunkt machen.“明かに《断篇》の中でハーマンの思想が綻びたのである。しかしさきにも述べたように、ヘルダーは第四集の中途で筆を折り、《文学書簡》で縷述されたところの美学、歴史および哲学の問題には遂に触れるところがなかつた。

《断篇》は匿名で発表されたが、すぐヘルダーの作であることは人々に感づかれた。まずニコラーイは著者の才能を認めて《通俗ドイツ文庫》への加入を促してきた。„Inzwischen ist kein guter Kopf sicher, von mir zum Mitarbeiter an der Allgemeinen deutschen Bibliothek aufgefordert zu werden; auch Sie bitte ich hiemit feierlichst, zu dieser periodischen Schrift… einige Beiträge zu liefern.“(Nicolai an Herder; Berlin, d. 19. Nov. 1766)。特にグライム(Jahann Wilh. Ludwig Gleim 1719〜1803)は、自分の Kriegslieder が《断篇》の中でギリシャの偉大な戦争歌人 Tyrtäos の歌と同等、いなそれ以上の価値を与えられたことに対する感激の言葉とともに、著者の芸術批評の才を称讃する手紙をよこした。

„Von allen unsern Kunstrichtern erfüllte noch keiner so ganz wie Sie, sagt' ich, den Begriff des vollkommensten Kunstrichters, den Pope und Horaz uns zeichneten. Welch ein feiner Kenner alles Schönen, wo es sich findet, in der Epopöe, im Sinngedicht, überall!…“(Gleim an Herder, Halberstadt, d. 8. Feb. 1767)。

《断篇》の発表後、ヘルダーはかなり重い肺炎にかかり、その恢復後二、三ケ月間眼病の治療のために極めて無聊な生活を送つた。一七六七年四月十三日 St. Petersburg の Kirchen-Konvent から同地の Peterschule の校長として招聘を受けたが、リーガー市参事会がヘルダーを手放そうとしなかつたので、その代り彼は牧師職を希望した。四月二五日彼は助司祭(Pastor adjuncta)に任命された。彼の説教もまた極めて魅力的で、市民の人気をかちえた。当時ヘルダーの友人で後にリーガー市長となつた Karl Wilpert のことばがこれを裏書きしている。„Ausgezeichnet groß war der Beifall, den seine Kanzelvorträge fanden. Obschon sie nachmittags gehalten wurden, obschon seine Kirche in der Vorstadt war, so war sie doch immer den Städtern nicht zu weit, besonders war die Zahl der jungen Leute und jungen Kaufleute sehr groß.“(Reisiger: Herder, S. 62)。しかし次第にひとびとはこの多才な青年説教師になんとなく疑訝の眼を向けるようになつた。彼は一方では、聖書について世俗的社会的な歴史物語のように論じ、

その内容や位置を文献学的歴史的に吟味した。が他方、神の啓示についても語ることを忘れず、しかも或時は啓蒙的な理神論者（Deist）であり、或時は謙虚な敬虔主義者（Pietist）であるようにみえたからである。

一七六六年十一月、Wilhelm von Schaumburg-Lippe 伯領の宗教局評定官 Thomas Abbt がビュッケブルク（Bückeburg）で他界した。一七六八年にヘルダーは Abbt への記念論文《Über Thomas Abbts Schriften. Der Torso von einem Denkmal an seinem Grabe errichtet》を発表した。ヘルダーがこの断片に於て彼のいわゆる「精神における兄弟」（Bruder im Geiste）について語るところのものは、同時に彼自身の自己証明書たるの観がある。„…Genaue Systeme, abgezirkelte Lesebücher zu schreiben, war nicht für Abbt!… Sinnliche Aufmerksamkeit heftet sich auf jeden Punkt des Gegenstandes, fliegt von Seite zu Seite, und auf jeden wirft sie Strahlen; seine Idee wird lebhaft, gehäuft, helle, und seine Rede schimmert. Das Licht ist nicht scharf, nicht streng, aber ausgebreitet, immer im neuen Zustrome. Er wird faßlich, durch die Menge seiner Merkmale; er kläret auf, wenn er auch nicht bewiese; er macht sicher, gewiß, stark; wenn er auch nicht überzeugte, so überredet er bis zum Augenschein…Feurig: er hat ein starkes Gefühl für das Schöne, das Menschliche und Sittliche; daher ist sein ästhetischer Geschmack, sein menschliches und moralisches Urteil auf Empfindung, nicht wie bei fühllosen Sitten- oder Kunstrichtern auf Regeln gebauet…" この断片もまた匿名であつたが、この場合もその特異な文体のゆえに簡単に感づかれたのである。„Ihre Schreibart verrät Sie allzu leicht…Ihre Schreibart ist noch immer etwas allzu rätselhaft…"（Nicolai an Herder, 14. Juni 1768）。

これより先、一七六六年にレッシングの《ラオコーン》（Laokoon, 副題《絵画と詩との限界について》Über die Grenzen der Poesie und Malerei）が刊行された。レッシングは《文学書簡》に於てゴットシェットおよびフランス文学の権威を否定したとすれば、《ラオコーン》に於てはヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann 1717～68）の主著《古代美術史》（Geschichte der Kunst des Altertums 1764）に刺戟され、その謬論を訂正しつつ文学と絵画とをその対象描写の時間的特性と空間的特性とによつて区別し、文学に独立の分野を確立したのである。

ヘルダーは《ラオコーン》を彼の習慣通りに「手にペンをもちながら」（mit der Feder in der Hand）読んだ。彼はすでに《断篇》の第一集に於てレッシングのラオコーンを「他の機会に論じ」たいとの意図を表明しており、また一七六六年十月四日付友人シェフナー（Johann Georg Scheffner）宛の手紙の中で、ヴィンケルマンとレッシングとの比較（註。Erstes Wäldchen の第一章に於て実行された）に関する大筋を示している。六七年一月十四日から十六日にかけて《Über Lessings Laokoon》の標題の下に、改訂《第二断篇

集》の前仕事としてラオコーンの読書中に生じた疑惑や異論を書きおろした。これらの手記は少し文体を変えて Erstes Wäldchen の第三、四章の中に移行したのである。一七六七年にヴィンケルマンの芸術史に関する一連の論文、すなわち未完稿の „Wäldchen“ が生じた。一七六八年六月八日のヴィンケルマンの急死によつて、„Wäldchen“ を携えて彼に相見えようというヘルダーの期待は水泡に帰したので、第二断篇集の再版の中にそれを入れてしまつた。

かくしてこの年の夏ヘルダーは本格的に論文の作成にとりかかり、年末頃には既に書き上げてしまつていた。これが《批評の森》(Kritische Wälder. 副題《美の学と術とに関する考察》Betrachtungen, die Wissenschaft und Kunst des Schönen betreffend, nach Maßgabe neueren Schriften) である。Erstes und Zweites Wäldchen は翌六九年の一月に、Drittes Wäldchen は同年の六月頃(ヘルダーのリーガー出発以後)にいずれも又匿名で発刊された。彼が《ラオコーン》の著者に対していかに敬意をいだいていたかは、Erstes Wäldchen が「レッシングのラオコーンに献げられ」ていることや彼自身の言葉がこれを証明している。„Der „Laokoon“ des Herrn Lessings, ein Werk, an welchem die drei Huldgöttinnen unter den menschlichen Wissenschafen, die Muse der Philosophie, der Poesie, und der Kunst des Schönen, geschäftig gewesen, ist in unsrer jetzigen kritischen Pestilenz in Deutschland für mich eine der angenehmen Erscheinungen gewesen, um welche Demokritus die Götter bat als um die Seligkeit seines Lebens.“ (Eingangsworte des ersten Wäldchens)。„Es wäre mir ungemein empfindlich, wenn mein untermischter Widerspruch Ihnen mißfällig werden〔sollte〕… Jedes Wort sei verbannt, was einen Lessing beleidigen wollte; allein jedes Wort werde auch um so schärfer geprüft, was ein Lessing sagt, denn wie viel hat der nicht Nachsager!“ (Herder an Lessing. 註。この手紙は、Kritische Wälder の著者と感づかれないように他人に書かせたもので、署名は St. としてある)。

さて Erstes Wäldchen は造形芸術に関するヘルダーの最初の公的な発言を含み、この分野を取扱う後の著作の出発点をなしている。彼の見解は屢々レッシングに依拠し、その造形芸術論に賛同する。しかし詩文に関するレッシングの命題はこれを新しいより自由な形式に変え、その内容を拡大した。その結果彼は詩的作品の批評により広い視野をひらき、特にホメールのために、レッシングの単に合理的な観察の限られた枠を超脱し、歴史的発展と自然的感情とに基づく批評の道をひらいたのである。ヴィンケルマンに対する彼自身の立場を必ずしも十分に基礎づけはしなかつたし、時にはレッシングの意見を誤解し、否、レッシングの究極の目標を明かに看取しえなかつたようでさえあるが、しかし彼は生産的な刺戟、新しい観点および根底に於て芸術の作用に対するひとつの深い真の感情を到る処に提供したのである。それ故、ハーマンが一七六九年二月六日付ケーニヒスベルク新聞に発表した批評の中で《Kritische Wälder》の《Laokoon》に対する位置を特徴づけたことは „Das „Erste Wäld-

chen' scheint überhaupt für Winckelmann, und wo nicht über, doch wenigstens ziemlich neben Lessing geschrieben zu sein." は正鵠をえたものといわねばならない。

《批評の森》にはかなり無躾なラオコーン批判が含まれているにもかかわらず、しかもそれは „Opfer der Achtung für den Verfasser des ‚Laokoon'" たるの基調を失っていないのである。そのためにであろうか、レッシングもクルダーのラオコーン批判に満足だったらしい。„Der Verfasser sei indessen, wer er wolle, so ist er doch der einzige, um den es sich der Mühe lohnt, mit meinem ganzen Kram an den Tag zu kommen." (Lessing an Nicolai, 13. Apr. 1769)。また《Wie die Alten den Tod gebildet》(1769) なる論文に於て、レッシングは《Kritische Wälder》の著者から受けた重要な指摘に謝意を表したのである。

Zweites Wäldchen はクロッツ (Christian Adolf Klotz 1738～71; Prof. an d. Univ. Halle) の《Homerische Briefe》(Epistolae Homericae), 《Über die Schamhaftigkeit Virgils》(De verecundia Virgilii) および《Horazische Rettungen》(Vindiciae Horatii) を取上げ、論敵クロッツの虚栄と無分別を暴露した。Drittes Wäldchen の主要内容を成すものは《Beitrag zur Geschichte des Geschmacks und der Kunst aus Münzen》(1767) の批判である。クルダーはその非歴史的な叙述とその不遜な口調とに痛烈な非難を浴びせた。この二つの論難書に於て主張されたクルダーの立脚点は、特に個別的諸現象の時間的・民族的・歴史的な評価に基づいているのである。

クルダーとクロッツとの関係はすでに《批評の森》以前に生じていた。《断篇》の第一および第二集に於てクルダーは、後にハーマンが非難したところによれば、「良心に反して」(„gegen Ihr Gewissen"; Hamann an Herder, 9. Apr. '69) クロッツに対し度々讃辞を呈したが、第三集ではこれに手ぬびしい批判を加えた。ニコライはクロッツを警戒するようにとクルダーに忠告した。„Ich ergreife diese Gelegenheit, um Sie aus wahrer Freundschaft für Herrn Klotz zu warnen……Er ist äußerst ruhmsüchtig, und die geringste Kritik vergibt er nie." (Nicolai an Herder, 20. Feb. 1768)。事実またクロッツはその主宰する《Acta litteraria》および《Deutsche Bibliothek der schönen Wissenschaften》誌上で、《断篇》に対する無価値な反論を行い、同時に匿名に執着する著者の人柄を中傷した。これに対しクルダーは《Vossische Zeitung》(24. Dez. 1768) 紙上で反駁を試みた。クロッツは既にレッシングの論敵であり、特に《Hamburgischer Dramaturgie》(1767～69) におけるレッシングのクロッツに対する敵視は世に知られていた。クルダーは両者の論争にまきこまれたくなかった。„In das Innre der Streitigkeit zwischen Ihnen und demselben (註。=Klotz) habe ich nicht greifen wollen." (前出。レッシング宛匿名の手紙)。しかし „…seit Gottsched weiß ich keinen Schriftsteller, der sich mit der innern Seichtigkeit dieses Mannes (註。=Klotzens) so heraufgeschrien hätte! — Ich schäme mich vor dem

Urteil der Nachwelt über ein Zeitalter, das solch einen Mann vergöttert.“（同前）という考えのもとに執筆された《批評の森》がクロッツおよびその仲間を強く刺戟したことは当然の成行であり、彼が論争に引摺りこまれたのも明かに自業自得というのほかないのである。クロッツは第二および第三の Wäldchen に対して、《批評の森》の批評ではなく、《第一断篇集》の未だ市販されていない第二版（註。印刷所で原稿の内容が洩れた）の批判を以て復讐した。この批判は《断篇》の著者の「独裁的かつ破廉恥な」調子をあげつらい、その虚言と歪曲を非難し、著者の「ギリシャ人に関する知識は単に伝聞からえたものにすぎない」と主張し、ヘルダーとハーマンとの関係に不当な難癖をつけたものである。

これら一連の著作がヘルダーによるものであることはもはや何びとの目にも明かであり、見識ある評者のあいだでは称讃と賛同を見出していたにもかかわらず、しかもハーマンやシェフナーの切なる勧めにもかかわらず、ヘルダーは頑なに匿名を固執し、ニコラーイの《通俗ドイツ文庫》（一七六九年）に於て自分が《批評の森》の著者にあらざることを公言した。彼がかくも匿名に執着した理由は恐らく彼の境遇に対する配慮からだと思われる。芸術論といつたようなものの発表は当時極めて自由であつたにせよ、文学と芸術史とが一宗教人の主要関心事であるということは世間の常識に反することだつたからである。しかもすでにヘルダーは牧師長から彼の栄進と衆望のために嫉視され、その上彼自身のうちに杓子定規な教会の空気に反撥を感じていたのであるから、なおさら神経質にならざるをえなかつた。尤もこの場合彼の不幸な性格がそれに拍車をかけたであろうとも考えられる。さらにこのことに関して重要なことは、彼自身この著作に不満足だつたということである。Viertes Wäldchen の末尾で彼は《Wälder》の改訂新版の刊行を約しており、《旅日記》の中で修正案について語り、また後年一七八八年ローマ滞在中にも修正の意図を想起したのである。従つて前述の《通俗ドイツ文庫》における弁明文に於て „Ich protestiere nochmals gegen die kritischen Wälder, mit deren Ton ich ebensowenig zufrieden bin als Herr Klotz;…“ というのは必ずしも単なる口実とばかり思われぬふしがある。しかし修正の計画は終に実行に移されなかつたのである。

ここで、彼の生前には発表されずに終つた《Viertes Wäldchen》にも触れておかねばなるまい。この第四の Wäldchen はヘルダーの息子エーミール・ゴットフリート（Emil Ernst Gottfried von Herder 1783～1855）によつて、やつと一八四六年《ヘルダー伝》（Herders Lebensbild）の中に発表された。これは第一の Wäldchen と同様豊富な思想内容をもち、ヘルダーの芸術観の発展にとつて高い意義を有している。ここに於て彼は主としてクロッツ門下リーデル（Friedrich Just Riedel 1742～86）の芸術論に反対し、自己の美学の基礎をきずいた。彼の美学は、たしかに或種の美感情に基づいてはいるが、しかし一般的概念から導かれるいかなる趣味判断も認めず、却つて趣味判断をば国民、時代および個性に応じて発展させるものである。これと関連するのは、美学を感性の生理学の上

にきずかしめんとする要求と民族的芸術を実現せしめんとする願望とである。三種の美的感覚に応じてヘルダーは自然を模倣する三種の芸術、すなわち、視覚の芸術たる絵画、聴覚の芸術たる音楽、触覚の芸術たる彫刻術を認める。かくして彼は建築術から彫刻、絵画および舞踏術を経て、直接魂に訴える唯一の芸術たる《詩》にまで進みゆくことによつて、「一切の芸術や学問をつらぬいてひとつの美学説にいたる偉大な経路の構想と輪郭とを」開陳したのである。

因に、Wälder もしくは Wäldchen という語は恐らく《林間を逍遙しながら集めたような締りのない粗雑な考察》というほどのことを意味するものと考えられる。このような意味の語をヘルダーが自著の題名に選んだ理由は、謙遜によることは勿論だが、この著作が極めて短期間に成り、しかも彼自身これに不満だつたという事実からも推測できるであろう。

クロッツの仲間と争つていた時、ヘルダーは、人類とその発展とに関する問題をさらに深く掘り下げようとしていた。すでに《断篇》に於て、芸術と学問との起源がギリシャ人を越えて東洋人の中にあることを示唆した。いまやこの問題が拡大されて《東洋の考古学》(Archäologie des Morgenlandes) という構想が生じた。一連の大担な草案に於て彼は聖書を、啓示信仰から離れて、東洋の民族性と自然とに制約された文学として説明しはじめた。かかる考察方法はたしかに当時の自由な宗教学者たち (Michaelis, Semler, Ernesti) の考えによつて喚起されたのであつたが、しかしその考察法を我がものとし、それに活力を与えたのはヘルダーの感入力だつたのである。彼はモーゼの天地創造史を、モーゼの思想詩ではなくて、モーゼより遙か以前に存在する「世界創造時における平日と安息日との配置を歌つた太古の東洋思想詩」と解釈し、かつこの詩の七つの創造詩節の各々を全く自然現象から追体験するのである。かような聖書解釈の独異性は彼の説教にも影響を及ぼしたので、人々がそれに不審の眼をむけたであろうことは想像するに難くない。

ヘルダーは《断篇》や《批評の森》によつて批評的美学的著述活動の第一線に立ち、この点に於てもレッシングやヴィンケルマンに比肩しうるに足る実を示したのであつた。このことが彼の自信を深め、名誉欲をみたしたことは否定できない。しかしヘルダーの problematisch な性格は、移住の当初あれほど自由に感じていたリーガー市を、すでに一七六〇年には „ein Kaufmannsort, wo man alles, selbst Wissenschaften, mit Maß, Zahl und Gewicht mißt“ に変えた。それに応じて学校や教会の狭隘はますます堪えがたいものとなつた。かてて加えて、匿名が暴露され他人の論争にまき込まれたので、いよいよ気をくさらせたのである。二五才の若さで一躍有名になつた喜びはたしかにあつたであろうが、同時に彼には潔にも缺けていなかつた。いまや彼は内に発酵するものを、浄化をせまるものを強く感じ、彼の心は限られた環境をつき破つて外へ向つて駆りたてられたのである。彼はいまやリーガーを離れる以外に自己を救う道のないことを知つた。リーガー在住の友人たちが彼の旅行の援助に協力した。特にハルトクノッホは旅費の大半を引受けた。一七六九年五月五日リーガー市議会に辞職を申出た。これが許され

たので、五月十七日 St. Gertruden-Kirche における別れの説教を行い、二十三日に友人の実業家 Gustav Berens と連れ立つてリーガーを発ちナント(Nantes)行の船に乗り込んだが、悪天候のためようやく二十五日にリーガーを出帆した。そして永久にリーガーの地を踏むことはなかつたのである。(註。当時は旅行後再びリーガーに帰任するつもりであつた。)„Am 23. Mai reistete ich aus Riga ab und den 25. ging ich in See, um, ich weiß nicht wohin? zu gehen.“ と《旅日記》(Journal meiner Reise im Jahre 1769) を書き始める。„Ein großer Teil unserer Lebensbegebenheiten hängt würklich vom Wurf von Zufällen ab. So kam ich nach Riga, so in mein geistliches Amt und so ward ich desselben los ; so ging ich auf Reisen.“

四、ヨーロッパ旅行

ヨーロッパ旅行(一七六九年—七一年):——ヘルダーがいかに別離の悲しみに打克ち希望に満ち溢れてバルト海に出たかは、頌詩《Als ich von Livland zu Schiff ging》によつて推察することができる。《Nicht zweifle Freund! Sieh, über uns hängt Himmel, / Auch dann hängt Himmel über dir, / Wenn alles rückbleibt, Hoffnung nicht! Ich trete / Aufs schwarze Todesschiff / Mit Hoffnung...“ ヘルダーは最初、Klopstock, Resewitz, Cramer および Gerstenberg 等に会うために Kopenhagen にゆき、ゆくゆくはフランス、イギリスおよびイタリヤを訪ねたいと考えていた。しかしこの計画は急に変更された。Helsingör で下船するはずだつたが同行の Berens の勧めに従つてフランスに赴くことになつた。四週間の航海の後一七六九年七月十五日 Painbœuf に上陸した。翌日 Berens と共に Nantes に着き、爾来三ケ月半、友の取引先 Babüt 家に滞在した。この間生きたフランス語に接し、屢々田舎に出かけてフランスの文物に親しんだ。やがて彼がドイツの有名な著述家であることが知られるに及び、フランス人との交際がひろくなり、特に若いスウェーデン人 Koch と識り合い、これと活発な意見の交換を行つた。益々フランス人のものの考え方、言葉、風習になじむにつれて、新旧さまざまな腹案が浮んできたが、初めのうちはまだはつきりした輪郭をとらず、いわば彼の思想は不断の醗酵状態にあり、過去の経験、観察および腹案が新しい印象と交錯していた。彼の著述衝動は学問および公共制度の形成のために多彩な目論見を展開した。この休みなき、自己を満足させぬ精神活動の証拠は、航海中に草案をつくり Nantes で仕上げたところのかの日記である。これは作者の生前には発表されず、死後初めて《Journal meiner Reise im Jahre 1769》として発刊されたのである。それは、第三章で述べるように、普通の意味における旅行記ではない。それ故にこそ、ヘルダー精神の発展に関する最も重要な記録となつたのである。Nantes 滞在中に彼は別人になつたという。《Jetzt darf ich's gewiß sagen, daß ich Nantes nicht so verlasse, als ich hierher gekommen bin, selbst bis auf die Bildung mancher

Seite meiner Denkart."(Ernst Naumann : Herders Werke 1. Teil,《Lebensbild》S. 25)。しかしこのことばは、《旅日記》における Nantes の第一印象とはあまりにもかけはなれている（本稿第三章参照）。しかもヘルダーは根本に於てフランス精神と相容れなかつたのであるから、なおさら矛盾を感じさせる。ここにヘルダーの主情性と批評家的素質とを窺うことができるであろう。なぜなら、批評に於ては、往々評者の主観的感情によつて批判さるべき対象が不当に拡大（もしくは誇張）されやすいからである。従つて、如上のことばを以てフランス心酔と即断してはならないのは、それをヘルダーの虚言とみなすべきでないのと一般である。

さて十一月に入つて彼は旅をつづけ、四日後 Paris に着いた。二〇年以上もここに在住する Hessen 生れの銅板彫刻師 Wille の案内で美術館、図書館、劇場および名所旧蹟を訪ねた。短い滞在期間だつたが、芸術品やフランス首都の生活をかなり詳しく識ることができた。同時に最も重要なフランスの学者および作家と交際した。d'Alembert, Thomas, d'Arnaud, Duclos, Barthélemy, de Guignes, d'Aubenton, Garnier と知り合い、百科全書派の首領 Diderot とは精神的素質や哲学に於て共感を見出し、哲学および文学の問題について討論した。このようにパリは彼に夥しい刺戟と教訓とを与えてくれたにもかかわらず、彼はパリについてあまり多くを語らず、この大都会の営みはすべて薄絹をすかしてみる感じだつたので、衷心からの満足を以て去ることはできなかつた。彼は後年のイタリヤ旅行に於てはこれ以上の失望を味つたのであるが、この点に於てもヘルダーとゲーテとの懸隔をうかがうことができる。Hartknoch 宛の手紙の中で、„Alles, was Goût und Pracht ist in Künsten und Anstalten, ist in Paris im Mittelpunkt : so wie aber der Geschmack nur der leichteste Begriff der Schönheit und Pracht nichts als ein Schein und oft eine Ersetzung des Mangels derselben ist, so kann Frankreich nie völlig sättigen, und ich bin seiner auch herzlich müde."（Dez. 1769）と述べている。しかし演劇と歌劇とについて、また Versailles 宮殿の庭園に於て造形芸術に関する彼の思想——後に《Plastik》（1778）に於てまとめられた——のために受取つたところの刺戟について若干の覚え書をものしたのである。"…Tragödie ist nicht für Frankreich… Tragödie ist am wenigsten für französische Sprache…oder fühle ich nichts, weil ich ein Deutscher bin? …Der wahre Ausdruck der Leidenschaft ist Simplizität."（註。フランス歌劇の華美な外面的扮飾について語つたのち）„…O eine neu zu schaffende deutsche Oper! Auf menschlichem Grunde und Boden, mit menschlicher Musik und Deklamation und Verzierung, aber mit Empfindung. *Empfindung*, o großer Zweck! Großes Werk!"（《Bemerkungen über das französische Theater》und《Über die Oper》）。ひとはここで、フランス歌劇に反対して《Fliegender Holländer》と《Tannhäuser》との構想に腐心していた若き W.R. Wagner（1813～83）が一八四〇年パリーでいつた言葉をきく思いがするであろう。それにヴァーグナーもまたリーガーから海路パリの

「大世界」に逃れたのであつた。まことに興味ある符合というべきか。

予定では Berens が迎えにくるまで四週間パリに滞在し、それから一緒にオランダに行き、そこからイギリスに渡り、ついで Kopenhagen を経てドイツに赴くつもりであつた。しかし旅費がなかつた。これまでも度々 Hartknoch に旅費の援助をうけていた。十二月初め、Fürstbischof Friedrich August von Lübeck から、十六才の世子 Peter Friedrich Wilhelm のヨーロッパ旅行に教師兼牧師として三年間随行してほしい、との申出を受けた。(*vgl.* Brief an Herder von F.G. Resewitz, Pastor an der deut. Petrikirche)。条件はヘルダーの提案通りに決められた。400 Taler の給与、100 Taler の旅支度金が認められ、三年間の責任も一応度外視された。その上、義務が満足に果された暁には、Fürstbischof が親しく彼を Petersburg に推薦するとの約束をうけた。この Eutin からの招聘によつて旅行継続の見込がたち、以前から憧れていたイタリヤにも行ける可能性が生れたことに喜びを感じはしたが、新しい地位での制縛や煩累を思い、何となく気掛かりでならなかつた。前途の暗さを感じながら半ば諦めの気持でこれを受諾したのである。この気分は《Mein Schicksal》と題する彼の頌詩に歌われている。„Mein Lebens verworrene / Schattenfabel! o frühe, frühe begann sie schon / Dunkel… / Schicksals-Schwestern, warum? die ihr sein Tagelos / warfet, warfet ihr's unhold stets / Irrhinüber, wohin nimmer das Götterbild / Seines leitenden Dämons wies? ———— / Matter Wandrer, wohlan! wie die verworrene / Schattenfabel auch enden mag ——!“ Eutin 公子の旅行は翌年の復活祭に始められることになつていたが、もはや Berens と同行するわけにもいかないので、ヘルダーは単身十二月二〇日にパリを立つて Brüssel と Antwerpen に赴き、両市でニーダーラント芸術を観賞し、Antwerpen から乗船して Amsterdam に向つた。途中暴風雨に遭い船は Haag 附近の砂洲に乗り上げた。不安な一夜を明かした後翌朝辛うじて救助された。彼は一七七〇年一月二〇日に Haag に着き、さらに Leiden に行つた。ここで著名な古典語学者 Ruhnken (1727～97) と面識を得た。二月 Amsterdam で、Eutin 公子の旅行が予定通り復活祭頃に決行されるとの通知を受けた。そこでイギリスおよびデンマークへの旅行は断念し、まず陸路 Friesland を経て Hamburg に赴いた。当地における Lessing との邂逅は、この旅行中はいうに及ばず、彼の比較的喜びのすくなかつた生涯に於て、最も大きな歓喜にひたりえた貴重な体験である。Lessing は丁度 Wolfenbüttel へ移住する準備の最中であつた。ヘルダーは《Laokoon》に対する自分の無遠慮な批判のためにレッシングの感情を害していないかと怖れていたが、しかしすでに旅行中レッシングの論文《Wie die Alten den Tod gebildet》の中に „Ich habe diesem Gelehrten (註. =dem Verfasser der „Kritischen Wälder“) wichtige Erinnerungen zu danken.“ という言葉のあることを知つたので、先入見なく平静にレッシングと会することができた。そして両者は意気相投合して二週間も生活を共にしたのである。„Mit Lessing habe ich vier-

zehn vergnügte Tage gehabt und wacker umhergeschwärmt.“ (an Hartknoch)。レッシングもまた友人の英文学翻訳者 Johann Arnold Ebert に次のような手紙をだしている。„Ich würde es bedauert haben, wenn ich jetzt schon weg wäre. Denn raten Sie, wer vor einigen Tagen hier ankam? Herder. —— Es hat mir notwendig sehr angenehm sein müssen, diesen Mann von Person kennenzulernen; und ich kann Ihnen jetzt nur soviel von ihm sagen, daß ich sehr wohl mit ihm zufrieden bin.“ (3. März)。ヘルダーはレッシングの人格にすつかり魅せられてしまつた。爾来彼はレッシングに深い尊敬をささげ、その死後《Denkmal auf Lessing》(1786)に於てこれを顕彰したのである。またクラウディウス(Matthias Claudius 1740～1815) とも親交を結んだ。このひとは当時三十才だつたが編集の仕事から身を引き、貧しいが自適の田園生活を営んでいた。ヘルダーは後に Straßburg から Merck 宛の手紙の中でクラウディウスを „das größte Genie“ といい、Gleim 宛の手紙では „Knabe der Unschuld voll Mondlicht und Lilienduft der Unsterblichkeit in der Seele“ と呼んだのである。なお当地で書籍商にして翻訳家たる Johann Joachim Christian Bode (1737～93) と識り合いになつたこともヘルダーには重要な出来事であつた。

旅は Hamburg から Kiel に続いた。ここでヘルダーは Eutin 公子とその傅育官 von Cappelmann と会し、彼等と連れ立つて一七七〇年三月下旬に Eutin 宮廷に着いた。彼は宮廷では厚遇をうけ、

公子および母の侯爵夫人に衷心からの好意と信頼をえた。ここで夏まで滞在し、その間文筆家、説教師および社交人として宮廷内外の信望をかちえた。しかし反対者もいないではなかつた。当時の宮中説教師長 Wolf はヘルダーをソツィニ派 (Sozinianer. 註。ポーランド人 Sozzini 1539～1604 の創設。キリストを神としてではなく高貴な人間とみなす) であると非難し、傅育官 von Cappelmann はヘルダーに打解けぬものを感じていた。„Ich genieße, Gott Lob! bisher die ganze Gnade und die außerordentlichste Unterscheidung des ganzen Hofes …; daß das wieder Neider gebe, ist die natürlichste Folge des Weltbaues, der aus Attraktion und Resistenz zusammengesetzt ist…“ (an Hartknoch, 29. Apr. 1770)。一七七〇年七月十七日に、ヘルダーは三年間もつづかないだろうという予感をいだきながら、公子とお供の連中と共に旅に出かけた。彼は公子に対する自分の感化が傅育係に妨げられるのを感じ、全旅程が不合理に組立てられて、もはや変更することができないのを知つた。Hamburg, Hannover, Kassel を経て Darmstadt に来た。途中 Kassel でヘルダーは美術館の監督官ラスペ教授 (Prof. Rudolf Erich Raspe 1737～94) と識り合つた。このひとも Klotz 論難者のひとりで、ドイツに於て Ossian を紹介した（註。本稿七七頁参照）最初のひとであり、すでに一七六五年および六六年《Neue Bibliothek der schönen Wissenschaften》に Percy の有名なイギリス古代詩文拾遺《Reliques of ancient English Poetry 1765》について報告している。また Göttingen 通過の際ボイエ (Heinrich

Christian Boie 1744〜1806）と面接を得た。ヘルダーは後年このひとの《Musenalmanach》に熱心な協力を惜しまなかつたのである。Darmstadt は公子の母の里方の地であるから、ここではかなり長期間滞在した。当地で軍事参議官の称号をもつ軍経理部長メルク（Johann Heinrich Merck 1741〜91）と友交を結んだ。メルクは当時二十九才長身痩躯、鼻の尖つた風貌をそなえ、メフィストーフェレスのモデルといわれ、博識聡明で批評眼が鋭く、ゲーテの詩作に批判と激励とを与えて、その天才を助長した。芸術および骨学の著述で名を成した。ヘルダーともこのとき以来交際をつづけたが、その揶揄と悪罵に感情を害し、やがて離間するに至つた（ゲーテ《詩と真実》第十二章参照）。――さて、ヘルダーはメルクの紹介で枢密顧問官 Hesse の家に出入するうちに、この家に寄寓していた当時二〇才の Maria Karoline Flachsland (28. 1. 1750〜15. 9. 1809; Hesse 夫人の妹で Johann Friedrich Flachsland —— Württembergischer Amtsschaffner zu Reichensweyer im Elsaß——の遺児であつた）と相愛の仲となつた。カロリーネは快活で優美な音楽好きの少女で、友達仲間では《Psyche》（註。Eros の愛した美女）と呼ばれていた。彼女は専制的傾向のある義兄の家では必ずしも幸福ではなかつた。二十六才の有名な若者の才能と風貌とまじめさとによつて、特にダルムシュタット人の敬愛の的である詩人 Klopstock に対する彼の尊敬によつて、少女の心はただちに揺ぶられたのである。この間の消息をカロリーネ自身に追憶せしめよう。„… Aus Klopstocks (damals noch unvollendeten) Messias die

schönsten menschlichen Szenen, aus Klopstocks Oden, aus Kleist (seinem und meinem Lieblingsdichter), aus den Minnesängern las er uns vor. Unvergeßlich ist mir die Darmstädter Fasanerie, wo er in der Stille des Waldes, in der feierlichen Einsamkeit des Ortes Klopstocks Ode „Als ich unter den Menschen noch war“ mit seiner seelenvollen Stimme aus dem Gedächtnis rezitierte! In Klopstock und Kleist haben ach unsere Seelen sich gefunden.

Am 19. August (10. Sonntag nach Trinitatis) predigte Herder in der Schloßkirche. Ich hörte die Stimme eines Engels und Seelenworte, wie ich sie nie gehört! …Zu diesen großen, einzigen, nie empfundenen Eindruck habe ich keine Worte —— ein Himmlischer in Menschengestalt, stand er vor mir. —— Den Nachmittag sah ich ihn, stammelte ihm meinen Dank … von dieser Zeit an waren unsere Seelen nur eins und sind eins: unser Zusammenfinden war Gottes Werk. Inniger können sich die Seelen nicht zusammen verstehen, zusammen gehören … Ach, gewiß hat niemand seine heilige Seele so gekannt wie ich!

Von diesem Tage an sahen wir uns täglich. Ich fühlte ein nie empfundenes Glück —— aber auch eine unbeschreibliche Wehmut und Schwermut: ich glaubte, ich würde ihn nie wiedersehen. (Karoline Herder : 《Erinnerungen》)。ダルムシュ

タット出発十五分前に、メルクの粋をきかした計らいで、ふたりだけで語る機会を得、婚約を交わすに至つた。„Meine letzte Viertelstunde bei Ihnen, liebster Freund, war mir so sehr zur Ewigkeit geworden …“(an Merck, 28. Aug. 1770)。

公子一行とともに Mannheim, Heidelberg を経て、Karlsruhe に於て一週間滞留した。ヘルダーは当地の Markgraf Karl Friedrich von Baden-Durlach の厚遇を受け、この平民的な領主と人類の制度や自由について意見を交わした。九月五日一行は Straßburg に到着した。ヘルダーは表面はともかく単調な旅行をつづけていたが、内面の動揺はますます募るばかりであつた。将来を考えると全く雲をつかむ思いがした。公子の随行者たる地位を放棄せねばならないことは、これまでの経験によつて確実になつた。公子の気の弱い憂鬱な性質に対するヘルダーの処置はいつも他の人々のために台無しにされた。公子のヘルダーに対する心服と旅行中ヘルダーに与えられた特別待遇とは彼等の嫉妬をかきたて、事毎に彼に不快な思いをさせるようになつた。この間彼は愛人とさかんに文通したのであるが、当時の気分を反映してか、屢々愛人の心を苛立たせるような表現を用いた。これより先、ヘルダーは、Bückeburg の財政局参議官 Westfeld から Wilhelm von Schaumburg-Lippe 伯の招聘状（一七七〇年二月一日附、Riga から転送された）を Eutin 出発直前の七月に受取つていたが、いま再び Westfeld の書簡（一七七〇年七月二九日附）を Straßburg で受取つた。それは宗務局評定官（Konsistorialrat）ならびに説教師長として Bückeburg に赴任を促すものであつた。彼は眼病の治療のため暫時 Straßburg に滞在し、ひきつづきイタリヤへ旅行することの許可を条件としてこれを受容れた。これに対して快諾の書状（一七七〇年八月三〇日附）がきたので、彼は意を決して九月二〇日公子に解約を申し出て、十月初め自由の身となつたのである。„Und so ist wieder ein Traum zu Ende! Unser Leben ist wie eine Nachtwache.“(an Merck, Okt. 1770)。この際ヘルダーとカロリーネとのあいだに生じた揉め事にも触れておかねばなるまい。彼が Eutin 家との関係を解かず快々として楽しまぬ生活を送つていたとき、屢々気紛れと愛情に対してぐらついた気持とをあらわすような手紙をカロリーネに送つた。その上、彼女は義兄からヘルダーの性格に対する不信をきかされていた。このために極度に心痛していた彼女の許に、女性の心理を傷つけるような揶揄にみちた手紙がきた。それにはレッシングの《Minna von Barnhelm》についてのカロリーネの考えに対する教師ぶつた批評が含まれていた。„Minna gefällt Ihnen nicht, als Komödie, und von Komödien hat Ihnen noch keine gefallen! Gut, meine liebe Freundin, aber warum müssen Sie sie als Komödie lesen? So mag der Hamburgische Zeitungsschreiber und der Pariser Witzling auf dem Parterre sie beurteilen … Nun sagen Sie mir, kleine eigensinnige Tadlerin! wie hat Ihnen der Charakter von Tellheim nicht gefallen können! Dieser Mann denkt so edel, so stark, so gut und zugleich so empfindsam, so menschlich, gegen alles … Warten

Sie, wenn ich nach Darmstadt komme, will ich Ihnen das Stück vorlesen, und ich trotze Ihrer Kritik…." (an Karoline, 20. Sept. 1770)。後を追うように、どんな禍が彼に迫つているかも知らず、クルダーは愛人の不安をいたわるつもりで、彼の従来の人生体験を開陳した一種の懺悔書に類する手紙 (an Karoline, 22. Sept.) や、さらにその追加の手紙 (24. Sept.) までも送つたのである。これに対する彼女の返事は絶交状であつた。それは十月一日に着いた。驚いたクルダーが直ちに弁解と陳謝の手紙を書いたことはいうまでもない。ついで翌二日に不安を訴える手紙が、そして四日には詫びの手紙が出された。これらの手紙には、人のよさ、気の弱さ、さみしがりやといつたクルダーの性格の一面があらわれており、同時に、それは当時彼がいかに愛に飢えていたかを語うよすがとなるものであるから、その中のひとつだけでも紹介しておく必要がある。

„Nach dem unruhigen Abend, nach einer wüsten, unruhigen Nacht, da meine Seele nur mit Ihnen gekämpft hat, wälzte ich mich jetzt wieder auf, Gott! um welchen Tag anzufangen! Ich bin allein auf der Erde! Von gestern an bin ich von der einzigen Freundin getrennt, die ich auf dem Erdboden hatte! Verlassen von ihr und von allem, was menschliches Herz hat——wie öde ist mir die Welt! … (2. Okt.)。第三の手紙に対してやつとカロリーネから和解の手紙がきた。これに対するクルダーの返事は数日来の不安や苦悶とそれから解放され愛人を取戻しえた歓喜の感情とをまじめな気持で表現している。„Alle Unruhen und Furien hatten sich schon an mir ausgemartert: Ich hatte schon Sonnabend, Sonntag und den halben Montag vergebens auf Ihren Brief gehofft: ich ging schon, füllen Sie es sich selbst aus, in welchen Gedanken? an die Tafel des Prinzen —— und siehe! mitten unter kam Ihr Brief. Wie ungeduldig erbrach ich ihn unter dem Tische, um wenigstens in der ersten Zeile das erste Wort zu lesen und es zu fragen: aus welchem Herzen es käme? Und da ich's gelesen hatte: da ich nur Silben las, daβ Sie noch meine Freundin wären ——süβer, göttlicher Engel! Was wollte ich mehr? Ich sackte meine Briefe ein, war am Tisch wie umgekehrt, brannte vor Verlangen, die Stimme meiner wiederkommenden Freundin ganz zu hören, und flog in meine Einsamkeit, wo ich den ganzen Nachmittag mit allen himmlischen Engeln, die sich freuen, wenn sich Menschen wiederfinden, wenn ein Hirte sein abirrendes Schaf und ein armer Sünder, wie ich, ein so gutes, himmlisches; aus lauter Edelmut und Zärtlichkeit und Würde sich trügendes Herz wiederhält —— mit allen diesen Engeln des Evangeliums habe ich heute den Nachmittag gefeiert…"

このような内的体験を経たのち、またその印象のもとで、十月十六日 Eutin との解約が正式に決定し、Bückeburg への招聘は最後的に受諾された。しかし彼は新しい職務に就く前に、著名な Straβburg の眼科手術医 Lobstein の治療をうけた。精々三週間で全治する見込だつたのが、手術のくりかえしにもかかわらず、治療は

成功しなかつた。翌年一月に医者が交替し、外科医 Busch によつて手術が行われたが、これも効果がなかつた。手術の傷口を癒着させるために、治療を始めてからまる六ケ月、一七七〇年一〇月から七二年四月までの間、全く退屈な日々を送らねばならなかつた。これはヘルダーのような活動的な精神にとつては非常な試煉であつた。そのため彼の気分は常に苛々していた。Eutin 公子と別れてから旅館 „Zum Louvre“ に居を移し、人々との交際をさけた。しかしふたりのドイツ系ロシヤ人だけは彼の日々の話相手となつていた。一人はエストニア生れの退屈な男、もうひとりはペゲローフ（Pegelow）という気持のいい男であつた。「この人はすでにリーガー以来のヘルダーの知人で、もう青年という年配ではなかつたが、ロープシュタインの指導を受けて外科学をもつと究めようと志していた」（ゲーテ《詩と真実》第十章）。この仲間にもうひとりフランクフルト（Frankfurt am Main）生れの二十一才の法律学生が加わつた。それは Goethe であつた。ヘルダーとゲーテとの出会がドイツ精神史上に於ていかに重大な意義を有しているかは、もはや知らぬひとはあるまい。両者の邂逅の模様やその交際の経緯はゲーテに語らしめよう。けだしゲーテの《詩と真実》は当時のヘルダーを如実に描いたものとして、ヘルダー研究の貴重な文献だからである。

『私にとつてきわめて重大な結果をもたらすこととなつた最も特筆すべき出来事は、ヘルダーと識り合いになり、つづいて親密に交際したことだつた。彼は、憂鬱な気持に沈んでいたホルシュタイン・オイティン公子の旅行に随伴して、共にシュラースブルクまで来たのであつた。われわれの仲間は、彼が到着したと聞くとすぐに、彼に近づきたいという熱烈な願いをいだいた。この幸運は、まるで思いがけなく偶然にまず私に恵まれた。何という知名のひとだつたか忘れたが、そのひとを訪問するために、„Zum Geist“ 旅館へ行つたのであつた（註。この頃はまだ公子と共にヘルダーはこの旅館にいた）。階段の真下で、私は、丁度これから昇つていこうとしていた僧侶らしく思われるひとりの人に出会つた。粉をふりかけた髪は円く捲髪に束ねられ、また黒い衣服もその人の特徴だつたが、それ以上に際立つていたのは、長い黒い絹のマントで、その端は束ねてポケットに突つ込んであつた。こうした多少人目を惹く、しかし一体に上品な、好ましい風采は、かねて話に聞いていたところで、それによつてこの人がこの町へ来たあの有名な人であることは疑えなかつた。そして、私が彼に話しかけたので、私が彼を知つていることはすぐ彼に判つたにちがいなかつた。彼は私の名を訊ねたが、私の名は彼にとつて何の意味ももちえないものだつた。だが私の率直なところが気に入つたらしく、彼も非常に親切に打ちとけた態度をとつた。そうして二人で階段を昇つていくときには、もう彼は熱心に話をするような気がまえになつていた。……別れ際に、私は彼の家へ訪ねてゆくことの許しを乞い、彼は実に親切にそれを承諾してくれた。私はこの特権をしばしば利用することを怠らなかつた。そしてますます彼に惹きつけられていつたのだつた。彼の態度は必ずしも如才ないとはいえなかつたが、作法に適つて礼儀正しく、それにどこか柔和なところがあつた。円い顔、広い額、やや円い鼻、そして口は

少し反り返つているが、非常に個性的で感じがよく、愛嬌があつた。黒い眉毛の下の黒い雙の眼は、一方が始終赤く炎症を起していたが、人にはたらく力を失わなかつた。彼はいろいろの問を発して私のことや、私の境遇について知ろうとした。そして彼の魅力はいよいよ強く私を惹きつけた。元来私はひどくあけつ放しの性質だつたが、殊に彼に対しては全く何の祕密も残さなかつた。だが間もなく、彼の本性の反撥的な脈搏が鼓動しはじめて、私に少なからず不愉快な思いをさせるようになつた……かように人に逆らう彼の気質のために、私はずいぶん何かと辛抱しなければならないこととなつた。というのは、一つは公子から離れようという考えと、また一つは自分の眼病のために、彼はシュトラースブルクに留まつていることに決心したからである。この病気は至つて難渋で不愉快なもののひとつで、また苦痛を伴う、恐ろしく不快で、しかも不安心な手術をしなければ治らないので一層厄介なものである。というのは、涙嚢の下方への口が塞がつていて、そのため中の液体が鼻の方へ流れてゆかず、またそれに接する骨にもこの分泌が自然に行われるような孔がないので、なおさら流れ出しようがないのだ。それだから涙嚢の底部を切開し、また骨に孔を通さなければならないのである。それで一筋の馬の毛を涙点に通し、さらに切開された涙嚢、およびそれに連絡された新しい管に通し、そしてこの両部分の疎通を回復させるために、毎日この毛を前後に動かすのであるが、このすべてはまずその箇所を外から切開しなければ実行できないし、目的も達せられないのである。』『私は手術に立会うこともできたし、この尊敬する人のためにいろいろと用を弁じ手助けをすることができた。この機会に、私は彼の大した強気と辛抱づよさを感心しないわけにいかなかつた。というのは、度重なる切開手術の際にも、しばしば繰返された痛い繃帯替えの際にも、彼はみじんも厭な様子を見せず、私たちの中で一番苦しみの少ない者のように見えたからである。』ここに描かれているヘルダーは、あのケーニヒスベルクで解剖を見学した際、恐しさのあまり気絶してしまつた十八才のヘルダーとはまるで別人の観がある。この強気は „die süße Hoffnung, daß diese kleine Kur mein Auge auch für Dich (註:=Karoline) aufheitern und gesund machen werde“ (an Karoline, 17. Okt. 1770) によつて支えられていたものであることも見逃してはならない。『この療養期間中ずつと私は朝夕ヘルダーを見舞つた。そればかりでなく終日彼の許にいることもあつたので、彼の立派な偉大な特性、該博な知識、深い識見を日毎にますます尊重するようになり、これにつれまもなく彼の叱責や非難にも一層慣れたのであつた。この人の善いむずかし屋の影響は大きく深い意味があつた。彼は私より五才年上であつたが、若いときにはすでにそれだけで大した違いである。そして、私は彼のあるがままの価値をみとめ、また彼の既往の業績を尊重しようと努めていたので、自然彼がはるかに私を凌いで優位に立つたわけであつた。しかしこの状態は愉快ではなかつた。…ヘルダーからは、どんなに振舞つてみても、決して彼に是認されることを期待されなかつたのである……彼が問い、また答え、或はその他の形で話をするにしても、いつもその談話は重要なものであつた

から、私は彼によつて日に日に、いな時々刻々に新たな見解へと押し進められずにいなかつた……彼自身はすでに十分名を成していて、その著《断篇》、《批評の森》、その他によつて、かなり以前から祖国で注目されている一流の人々と肩を並べていたのであつた。彼のような精神の中にどんな動きがあつたか、また彼のような性情の中にどんな醱酵があつたのかということは、捉えることも述べることもできない。しかし、その後多年に亘つて、彼が行い、かつ成就したことを考えると、内に潜められていた志向はたしかに偉大なものであつたことは、何人も容易にみとめるであろう。』

この頃、ヘルダーは急角度にバルデ（Barde, 古代ケルト弾唱詩人）やシェイクスピアへの関心を深め、ますますそれらに対する傾倒の度を増しつつあつた。このことは十月二十八日カロリーネに書いた手紙によつて推察される。 „Sie glauben's nicht, wie sehr ich Sie anbete, daß Ihre Seele so groß und fest und stark ist, daß sie Bardenlieder fühlen, so ganz innig fühlen, und Mingala und Roskrana（註。Ossianの詩に現われる女性）werden kann. … So hat Ihnen Romeo und Julie so gut gefallen? Und doch haben Sie dies vortreffliche himmlische Stück, das einzige Trauerspiel in der Welt, was über die Liebe existiert, nur in der schlechten Übersetzung（註。ヴィーランドの1762～66年に刊行されたシェイクスピア劇二十二篇の散文訳）gelesen… Wie sehr Shak〔espeares〕mein Steckenpferd ist, wird Ihnen vielleicht M〔erck〕gesagt haben! Ich habe ihn nicht gelesen, sondern studiert, wie ich das Wort recht unterstreiche; jedes seiner Stücke ist eine ganze Philosophie über die Leidenschaft, von der es handelt …“

なお、このような療養生活のさなかにヘルダーは《言語起源論》（Über den Ursprung der Sprache）という論文を書き上げた。これは後にベルリーン・アカデミーによつて表彰され、フンボルトの言語研究の基礎となつたものである。ゲーテはさらにつづける。『こういう風に私たちが一緒に暮しはじめてから間もなく、彼は言語の起源に関する最上の論文に与えるベルリーン市の懸賞を獲得するために応募するつもりであると、私にうち明けた。彼の論文はもう完成に近づいていた。そして手蹟の綺麗な彼は、やがて読みよい草稿を一綴りずつ私に見せてくれた。私はそういう題目について一度も考えてみたことがなかつた。私は起源とか、終末については考えられなかつたほどに、あまりにまだ事物の真唯中に囚われていた……ヘルダーの論文は、どうして人間が、人間として自分の力によつて或る言語をもちうるようになるか、またもたなければならぬかを示そうとしたものであつた。私はその論文を非常に面白く読み、それによつて大いに力づけられるところがあつた。だが、知識の点でも思考力の点でも、それに対して根拠のある批判を下す程度に達していなかつた。それだから、私は私の考え方に基づく少しばかりの思いつきを附け加えて作者に賛成の意を表した。しかしああ言つても、こう言つても同じだつた。条件づきで賛成しても、無条件に賛成しても、いずれにしても叱責され、また非難された。……

あれほど不愉快な、苦しい治療を受けても、わがヘルダーの元気は衰えなかつたが、しかしその元気はいよいよ迷惑なものになつた。彼は何かを頼む一寸した手紙一枚書くにも、何かしら嘲弄をそれに加味せずにはおけなかつた（註。例えば、ゲーテから本を借りる場合にも、ゲーテの名前に対して無躾な諧謔の詩を挿入したり、Dominico Feti 1589～1624の作品に心酔するゲーテの無邪気を揶揄する詩を作つたりして、ゲーテに不快な思いをさせた）。……このような諧謔の、明朗、晦渋、或は快活、辛辣の度合の違つた種々のものを、私はなお多く挙げることもできる。それらのものに私は腹を立てはしなかつたが、しかしうるさかつた。けれども私は、自分の教養に役立つものなら何でも大いに尊重することができたので……私は唯々としてそれに従い、ただ当時の私の立場でできるかぎり正当な非難と、不当な誹謗とを区別するように努めた。こういうわけで、実際一日として、非常に有益な教えを受けない日はなかつた。

私は、これまでとは全く違つた方面から、また違つた意味で、しかも私の性によく合つたという意味で詩歌と近しくなつた。彼が先輩の Lowth の流儀で才気縦横に論評したヘブライの詩や、彼が私たちを駆り立てて探させた Elsaß に伝わる民謡など、詩としての最古の文献は、詩は一般に世界的また民族的の贈物であつて、若干の上品な教養あるひとびとだけの私的な遺産ではないことを証明した。私はそのすべてを貪つた。私が熱心に求めれば求めるほど、いよいよ彼は惜しげなく与えた。そして私たちは至つて興味ぶかい時間を一緒に過ごした……私たちが一緒に暮したこの数週間の充実していたことについてこう言えるだろう。すなわち、ヘルダーがその後漸次に成し遂げたものの一切は、萠芽として予示されていたのであり、またそのために私はこれまで考え、学び、そして自分のものとした一切のものを完全なものにし、またより高いものへ連絡させ、そして拡大させることのできる幸運に逢つたのである。もしヘルダーがより整然とした方法によつていたなら、私は私の教養の永続的な方向に対してもまた極めて貴重な指導をえたことであろうが、しかし、彼は指導するというよりはむしろ吟味し、刺戟することを好んだ。それで彼はまず私に、自分が非常に大きな価値をおいていたハーマンの著述を紹介してくれた。だがこの著述について教えもせず、またこの非凡な精神の傾向や進路を説明したりはしてくれないで、私がこのような難解な書を理解しようとして、実際ずいぶん奇妙な真似をするのが、いつもただ彼の慰みとなつただけのことであつた。

治療に当然以上の長い日数がかかつて、ローブシュタインはその手当に迷い、やり直しをはじめ、なかなかに片がつきそうにもなくなつてからは……事態が全体に陰鬱になつてきた。ヘルダーは短気に不機嫌になり、従来通りの勉強をつづけることはできそうもなかつた。それに外科的処置の失敗の責任が、ヘルダー自身頭を過労させたことと、私たちと始終元気に、むしろ陽気すぎる交際をしたことにある、とみられはじめたので、それだけに彼は一層自制せざるをえなかつた。結局あんなにひどく苦しみ悩んだ揚句、人工の涙管は出来上らず、予期の疎通をみることができなかつた。病気をこの

上悪化させないためには、傷口を塞がなければならぬこととなつた。手術の際にあれほどの苦痛にも毅然としていたヘルダーの態度はひとを驚かさずにはおかなかつたが、生涯このような傷痕を残しておかなければならないことを考えた彼の沈鬱な、否きびしい諦念には真に崇高なものがあつた。それは彼を見、彼を愛する者の尊敬を永久に失わしめなかつたほどの崇高さであつた。彼はダルムシュタットの或る立派な婦人と識り合いになつて、その婦人の愛をえていたので、あれほど目立つた容貌を醜くしてしまつたこの病気は、彼にとつて一層憤ろしいものにちがいなかつた。彼はこの旅行の帰途に今までより自由な嬉しい気持で、かつ風采もよくして、半ば婚約のその婦人に会い、彼女とのあいだをもつと確かな、断ちがたいものにしようという考えが主になつて、この治療を受けたらしかつた。』治療の失敗に対するヘルダーの悲痛な思いは、まことに察するにあまりがある。一七七一年三月中旬カロリーネに次のような手紙をだしている。„Meine Kur ist jetzt zu Ende! Aber, haben Sie mit mir Mitleiden, nach allen Schmerzen, Kosten, Abmattungen, Versäumnissen und Verdruß und Kränkungen ist's schlechter, als es je gewesen, rot, aufgedunsen, voll Materie, ein Abscheu der Leute, das es voraus nicht war. Die Kur fehlgeschlagen! Die Hoffnung der Kur verloren! Auf eine Lebenszeit schlimmer, unheilbar, und wer weiß, von welchen gefährlichen Folgen gemacht —— O lassen Sie mich nicht mehr schreiben! Mein Gesicht hat nie eine dummere Mine, als wenn es klaget… Ach! mit welchen Ideen dachte ich zu Ihnen zu kommen, und wie komme ich!——Ich beiße die Zähne zusammen, und Sie wissen, dann hört sich nichts: also ——.“ ヘルダーはできるだけ早くシュトラースブルクを立とうと急いだ。長い滞在に入費がかさんだため、ゲーテの世話で金を借りた。この場合にも、彼は返済期限の約束を破つていながら、返金の手紙と共に、感謝や弁解の代りに、クニッテル詩格（Knittelvers）の嘲弄の句だけを書き送つたとのことである。ゲーテはいう。『感謝を厭うこと、恩恵に酬いるに不満、不機嫌を以てすることは非常に稀であつて、ただ卓れたひとびとに於てのみ見られる。すなわち、偉大な素質やその予感をもちながら下層階級または無援の境涯に生れ落ちて、そして幼いときから一歩一歩進路を切りひらいて進み、あらゆる方面から援助を受けなければならなかつたひとびとの場合、その援助が往々恩恵者の野卑なために、苦々しい忌わしいものとなるのである。というのも、このひとたちの受けるものは、現世的なものであつて、その代りに果す仕事はより高い性質のものであるために、従つて文字通りの報償ということは考えられないからである……ヘルダーはその最盛期をたえず自分にとつても、他人にとつても不快なものにした。何故かというに、彼は青年時代に避けることができなかつた不満を、のちに精神力によつて和らげることができなかつたからである。』これは勿論ゲーテがヘルダーの生涯を見渡した上での発言であり、『ヘルダーの真価については、それを害ねるかもしれないような一切の忌わしいものを呑み込むほどに大

きなまた強い考えをもち』、あれほど人生の英知に通暁したゲーテにして初めて言いうるところのことばである。『しかし畢竟彼は依然として彼であつた。彼から与えられたものは、面白く心を楽しませはしなかつたけれども、甚大な影響を与えた。実際彼の手蹟さえも私に対しては或る魔力をおよぼした。私は彼の書いた紙片一枚、いな、封筒一枚も彼の手に成るものは破つたり、棄ててしまつた覚えがない。けれども非常にはげしい時と場所の移り変りのために、あの不思議な予感にみちた、幸福だつたその頃の文書は私の手に少しも残つていない。』ヘルダーの魅力はゲーテのみならず、他の者にもその力をはたらかせたのであつた。この場合特に Stilling の名で知られたユング (Johann Heinrich Jung 1740～1817) のことに言及しないわけにはいかない。このひとはゲーテの紹介でヘルダーと知り合つた。ユングに対してはヘルダーもゲーテやその他の者に対するより『もつと寛容な態度をとつた。というのは、彼の示す反応は、いつも彼自身の受けた影響に比例するようにみえたからである……全くユングはヘルダーによつて感激させられ、自分の仕事のすべてに力を得、励みを感じたほどであつた。』またそれに応じてゲーテに対する彼の友情も薄れたようにさえみえた。まことに資質の点に於ては、ユングの方がゲーテよりもヘルダーの天性に調和していたのである。（註。以上『　』の内はすべてゲーテの《詩と真実》第十章からの引用であり、訳文は小牧健夫先生のを拝借させていただいた。）

「当時この活気のあつた私たちの仲間で、どういうことが考えられ、語られ、討論されていたかを直接知りたいと思うひとは、《ドイツの特性ならびに芸術について》(Von deutscher Art und Kunst. Einige fliegende Blätter)という冊子の中の、ヘルダーのシェイクスピアに関する論文を読むがよい」とゲーテは《詩と真実》（第十一章）の中で言つている。しかしわれわれはそのほかに《オシアンおよび往古諸民族の歌謡に関する往復書簡の抜萃》(Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker; 本稿では《オシアン論》と略記する）をも附け加えることができるであろう。《ドイツの特性および芸術について》という冊子は、ヘルダーの上記の両論文のほかに、ゲーテの《ドイツ建築術について》(Von deutscher Baukunst) とメーザーの《ドイツ史》(Deutsche Geschichte) という論稿とを含んでいる。ヘルダーの両論文の成立時期に関しては正確に年月日を挙げることはできない。しかし《オシアン論》に関しては、次の手紙によつて恐らく一七七一年七月半ば以後九月までの間であろうと察せられる。従つてビュッケブルク移住後に属する。„Ich habe ein paar Tage etwas über Shakespeare gearbeitet, aber es ist nicht mit dem Geist und Leben, als ich's anfangs zu denken glaubte. Jetzt will ich etwas über die Lieder alter Völker schreiben, das soll mir mehr gelingen. Beides ist eine versprochene Pflicht für einen Mann in Hamburg, der mir viel Gefälligkeiten erzeigt hat, und soll in das Journal, woran Klopstock und Gerstenberg mitarbeiten. "(Herder an Karoline, 13. Juli 1771)。しかしながら、原稿の大半はシュトラースブルク滞在中に書き上げられていたこと

は明かであり、その思想材料はすでに早くから彼の脳裡に貯えられていた。若きゲーテがシュトラースブルクで聴くことのできたヘルダーの潑溂たる談話の調子は、確かにこの両論文からもききとることができるのである。その発刊は一七七三年であつたが、実質的にはシュトラースブルク時代の所産であるから、この冊子について若干の説明を加えておくことにする。

一七六〇年初頭マクファースン（James Macpherson 1736～96）の著《Fragments of Ancient Poetry collected in the Highlands of Scotland and translated from the Gaelic or Erse language》（1760），《Fingal》（1762）および《Temora》（1763）がイギリスのエディンバラ（Edinburgh）で出版されるや、早くも一七六四年にドイツではふたつのドイツ語散文訳の抜萃本が現れ、ヘルダーはすでにケーニヒスベルク末期にこれを知つた。一七六八年にエズイタ派（Jesuit）のデーニス（Michael Denis 1729～1800）はヘクサーメター詩格の翻訳を著した。これに対してヘルダーは痛烈な批判を下した。イギリスおよびドイツに於て、オシアンの歌は熱狂的に受け入れられた。早くからその真偽が問題になつていたが、一八二九年にマクファースンの改作なることがふたりのアイルランドの学者によつて立証されたのである。にもかかわらず、スコットランドおよびアイルランドの古い伝説や歌謡をもととしたマクファースンの詩歌は、それ独自の美と意義とを失うことはなかつた。一七六五年にでたパーシィ（Thomas Percy 1729～1811）の《イギリス古代詩文拾遺》（Reliques of ancient English Poetry）と並んで、オシアンの戦と恋のロマンスから生ずるえもいわれぬ美しい情緒は、庶民的な素朴性と感情の真実とに対するセンスを当代によび起したのであつた。ヘルダーは何びとよりもはげしい情熱をこれに傾け、ついに民謡一般に対して独自の感入力を発揮するに至つた。ヘルダーの《オシアン論》に於て表明されたもろもろの確信は、すでに数年来彼の思想領域に根差していた。それらはハーマンの „Poesie ist die Muttersprache der Menschheit“ というテーゼから生れ、《断篇》および《批評の森》の地盤の上で成長した。それらはリーガーの著述における、国民的な芸術および文学を覚醒せしめんとするヘルダーの努力と同じ系列に属する。彼はオシアンをホメールおよびシェイクスピアと同列においた。そして自らもその若干の作品を翻訳した。この翻訳を彼は自信を以て《オシアン論》の中に披露している。また、《シェイクスピア論》も、シェイクスピアをヴィーラントより正しくその本然のすがたに於てドイツ人に仲介し、それによつてドイツ精神をそれ自身の流儀で生産的な活動に駆り立てんとする願望から生じたものである。このようなヘルダーの立脚点もしくは根本思想は、ほかならぬこの編纂書に《Von deutscher Art und Kunst》という標題を与えたということの中にすでに明かに現れている。

序でにこの書の成立事情についてなお若干の事実を述べておこう。ヘルダーの両論文は偶然の機縁から起草された。上述のカロリーネに与えた手紙の中の „Beides ist eine versprochene Pflicht für einen Mann“ という言葉がこれを物語つている。この Mann と

は、彼が曽てハンブルク滞在中に知り合つた《ハンブルク通信者》(Hamburgischer Korrespondent) という雑誌の発行者 Bode のことである。すでに一七六九年秋 Gerstenberg の《文芸書簡》(Breife über die Merkwürdigkeiten der Literatur) は Bode 書肆に移譲されていた。ヘルダーはこれに対する寄稿を約束したのであつた。一七七一年九月《オシアン論》の原稿が Bode に送られた。しかし《文芸書簡》の第二の続巻が出来なかつたので、Bode はそれだけを単独に印刷させた。ヘルダーは六〇頁ほどの小冊子ではあまりに貧弱にみえ、そのままでは世にだしたくなかつたので、《オシアン論》の「跋」(Nachschrift) とともに、《シェイクスピア論》および他の作者のものを送つた。この「跋」は最初印刷者の不注意から《シェイクスピア論》の後に入れられたのであつた。ヘルダーはこれらの論文、特に《オシアン論》について、自分の不確かな記憶のために、„im Fluge, unter ewigen Absätzen der Reise geschrieben" とかいているが、さきにも述べたように、これは一七七一年に成立したと立証することができる。《シェイクスピア論》は成程たびたび改作されて最後的な形態をえたのではあるが、しかしこの成立も同様に一七七一年以前に遡ることはできない。初め両者の形式は《文芸書簡》に合致するように考えられた。前者の《往復書簡》体は作者によつて最も脈動的な叙述の効果ある手段として採用された。後者は、その最初の形態に於ては、《Über Shakespeares Werke und Genie" の作者 Gerstenberg への書簡の形式であつた。改訂版に於て初めて論文の形式がとられたのである。

そしてこの論文は友——名前は挙げられていないが、ゲーテそのひとである——への呼掛け („mein Freund") で終つている。これは、《ゲッツ》(Götz von Berlichingen 1771) によつてヘルダーの願望を最初に実現してくれたゲーテに対する感謝と激励の辞である。(註。本稿八六頁参照) この呼掛けこそは、ドイツの東と西とからきたふたりの若者の、シュトラースブルクでの共同体験が、いかに調子の高いものであつたかを示す証拠といつてよいであろう。

なおヘルダーと《民謡》、《オシアン》および《シェイクスピア》との関係は、後に章をあらためて通観されるはずである。

ついにヘルダーは一七七一年の復活祭直後に「忌わしいシュトラースブルク」(*vgl.* an Karoline, 28. März 1771) を去つた。まず Karlsruhe で Markgraf von Baden の求めに応じて説教を行つたのち、Darmstadt に着いた。ここでカロリーネと再会し、ふたりの関係に介入する友だちのために不愉快な思いをしながらも、「短い幸福な時をすごした」。„Aber unsere Herzen waren auf ewig eins —— keine Stimme konnte uns trennen." (Karoline)。しかしヘルダーは結婚にふみ切る決心がつかなかつた。彼自身その経済的余裕のないことを知つていた。これまでの旅行は殆ど借金で賄われてきた。眼病の治療とシュトラースブルク滞在のために、さきに述べたように、ゲーテに助力を乞うたばかりでなく、すでに二度も新しい任地の Bückeburg から前借をしていたので、これらに対する償いを考えねばならなかつた。それに、従来の経験からして、Bückeburg に長く辛抱できるかどうかも甚だ疑わしく、また鋭い

自己認識によつて、どんな現在の境遇にも満足できない自分の性格も感じ始めていた。„Dort, wo du nicht bist, ist das Glück.“（《Wanderer》）。しかも、鷲の羽ばたきを以て広大な世界の中に飛びたつたばかりの若い魂にとつて、ドイツの一小国で凡庸な有給牧師として妻子のための家庭を築くというような気にはなれなかつたのであろう。Darmstadt を離れてからも、相変らず彼女との文通は頻繁に取り交わされたのである。途中 Frankfurt a. M. にゲーテの父母の家を訪ね、ゲーテの妹から彼に対するゲーテの好意をきいた。ここから一路 Bückeburg に向つたのである。

五、ビュッケブルク時代

Bückeburg（一七七一年—六六年）：——ついに四月二八日（註。Rudolf Heym:《Herder》1954 I. S. 489 による。但し E. Naumann:《Lebensbild》によれば四月二〇日とある）の夕刻 Bückeburg に到着した。待ちわびた Graf Wilhelm von Schaumburg-Lippe はすぐヘルダーを引見しようと欲したが、理髪師不在のためヘルダーの身支度に手間取り、会見はやつと九時頃になつて行われた。応待は殷懃だが何となく冷いものを感じた。この最初の出会は、両者の心に失望に似た思いをいだかせたのである。„Auf Bückeburg mag ich noch gar nicht gern kommen!“(an Karoline, I. Mai)。

伯爵はヘルダーより二〇才年長で、当時すでに数々の武勲によつて名声を博していた。七年戦争に於て砲兵隊の司令官として勇名をはせ、その後フランスの謀略で惹起されたスペイン対イギリス・ポルトガルの戦争に於てはイギリス・ポルトガル連合軍の総司令官として一七六二年スペインを撃破した。凱旋後は平和的君主として自分の所領を模範国家——フリードリヒ大王の啓蒙君主的理想の意味における——たらしめようとし、商・工・農業の発展のみならず、学問芸術を保護奨励した。厳格で風変りな性格の持主であるが、音楽、絵画の友、特にシェイクスピアの愛読者であり、歴史、政治、兵学の文献に通じていたといわれる。かつて当地の宗教局評定官であつた Thomas Abbt の死後、ヘルダーの《Über Thomas Abbts Schriften》を読みいたくこれに感激し、Abbt の後任としてヘルダーの招聘を思い立つたのである。やがてヴィルヘルム伯とヘルダーとは互いに尊敬し合うようになつた。伯はヘルダーの才賦と博識をみとめ、Abbt 以上のものであるとさえ思うようになつた。特にヘルダーの《言語起源論》がベルリーン・アカデミーに入賞した（六月）ときはわがことのように喜び、自らもそれを読みかつ賞讃した。しかしヘルダーは論文に不満を感じ、アカデミーによつて印刷に付される前に、多くの箇処に手を加えたのであつた。両者は相互に尊敬しながらも、性格の相違によつて衷心から打ちとけることはできなかつた。ヘルダーは自由を保つために宮廷内の交際をさけ孤独の生活を好んだ。„Der Idealumgang der Einsamkeit ist mir noch nie in der Welt so zustatten gekommen als jetzt, und auch nie in der Welt so geschmeckt! …… Also, mein drittes Leben, als Einsiedler! Philosoph und Schäfer!……Vor meinem Hause liegt ein Garten, zwar sehr klein, aber sehr angenehm für mich;

eine Wallhöhe schließt hin, wo ich hundert Sachen anbringen werde! Da bin ich in der Einsamkeit, in der schönsten Aussicht, von Wald und Gebürgen umschlossen; zwo Nachtigallen schlagen über meinem Kopf und zehn andre Arten im Walde vor mir. Die Blumen und Knospen brechen jetzt aus der Erde! Da liege ich bis in die Nacht …… In mein Amt bin ich so ziemlich eingeführt, aber noch sehr ungewohnt: meine ganze Seele ist Zerstreuung, und ich tue nichts so gern als herumreiten: in Minden, auf die Dörfer, und ich weiß nicht wohin—— ist das nicht alles ein ganz andrer Herder?" (an Karoline, 11. Mai)。伯爵との関係を次のようにいい表している。„Wir (註:=der Graf und Herder) leben so entfernt gegeneinander: er ist so sehr, so ganz übertäubende Achtung und Aufmerksamkeit für mich, daß ich noch so wenig von seinem nühern Charakter weiß als er von meinigen…"(an Karoline, 22. Juni)。

このような孤独の境遇の中で、将来の著述——最古の文書、歴史の哲学およびヘブライ詩等——のための材料を集めることに専念した。メルクとゲーテとから《フランクフルト学芸新聞》(Frankfurter Gelehrten Zeitung)の寄稿者となるように薦められた。この頃ゲーテはシュトラースブルクのさまざまなニュースを盛つた一通の手紙をヘルダーに書いた。これに対していわゆる „Niesewurzbrief"(註。Niesewurz とは脳鎮静剤として用いられる植物)を送つた。これは恐らく皮肉と揶揄にみちたものだつたらしく(註。この手紙は残っていない)、さすがのゲーテもかなり癪に障つたとみえる。„Ich zwinge mich, Ihnen in der ersten Empfindung zu schreiben. Weg Mantel und Kragen! Ihr Niesewurzbrief ist drei Jahre alle Tageserfahrungen wert. Das ist keine Antwort darauf, und wer könnte darauf antworten? Mein ganzes Ich ist erschüttert, das können Sie denken, Mann, und es fibriert noch viel zu sehr, als daß meine Feder stet zeichnen könnte …" 尊敬する先輩の不幸な性格に遣る瀬ない気持を吐露して、ヘルダーに対する自分の真情を訴えている。„Herder, Herder, bleiben Sie mir, was Sie mir sind. Bin ich bestimmt, Ihr Planet zu sein, so will ich's sein, es gern, es treu sein…… Ich lasse Sie nicht los. Ich lasse Sie nicht!"(Goethe an Herder)。ゲーテは《詩と真実》の第十二章で「ヘルダーと私のあいだには、気持のいい文学的交際が甚だ活潑につづけられた。ただこの交際が決して平穏に、純粋に保たれなかつたことは遺憾であつた。ところが、ヘルダーは相変らず彼一流の揶揄や叱責をやめようとしなかつた。メルクのごときは容易に激昂してしまつたが、彼はそれから私を唆して忍耐を失わせた。」といつているが、この Niesewurzbrief はまさしくその実例というべきであろう。それ故、ゲーテの仲間からは「ヘルダーに二重の栄誉をもたらした」(《詩と真実》)と喜ばれたヘルダーのビュッケブルク就任が彼に失望を与えたことも、やはり彼のこういつた不幸な性格によるところが多いと考えられる。一

方ルダーの眼には、ゲーテは軽薄な青年と映つていたのである。われわれも当時のゲーテにこのような一面のあつたことは否定できないであろう。よしルダーにどのような偏見があつたとしても。

„Goethe ist wirklich ein guter Mensch, nur äußerst leicht, und viel zu leicht und spaßenmäßig, worüber er meine ewige Vorwürfe gehabt hat.“ (an Karoline, 21. März 1772)。

しかしまた、隠遁生活における散歩や騎行中に、ルダーの美点たる《自然との融合》感情があますところなく発現した。カロリーネへの手紙の中にみられる見事な描写がそれを証明している。

„Stellen Sie sich auf der einen Seite eine Kette kleiner Gebürge voll Wald vor（註。ビュッケブルクの南方半時間ばかりのところにある Wesergebirge), die ich fast alle durchstreift und die nun indem seidnen Nebel des Herbstes und der Abendsonne flossen: davor Wiesen und Garten, auf der andern Seite das ritterliche, gräfliche Schloß, das sich im hellen stillen Wasser spiegelt: die Abendsonne vor mir: ich hatte die Englischen Lieder mit, konnte aber nicht lesen und warf mich unweit einiger Kuppeln romantischer, schwarzer Bäume auf einen wilden Hügel an einem Wasserfall, der mit doppeltem Guß, schneller und langsamer, dunkler und heller, fiel. Um ihn viel wildes Weidengebüsche, um mich alle wilde Blumen, die in Shakesp. Feen- und Liebelieder vorkommen, Berge, Sonne, Abend um mich! Ich lauschte sie und ihre Abendröte entzückt herunter;…“ (an Karoline, 2. Okt. 1771)。

一七七二年一月、ルダーにとつて重大な意義をもつことが起つた。当時二九才の伯爵夫人 Maria から彼の指導を乞う私信をうけとつたのである。„Könnten Sie wissen, wie meine Seele manchmal in der Irre herumgewandelt hat, so dächte ich, Sie redeten oftmals nur für mich allein … Werden mir daher Sachen vorkommen, wo ich Erläuterungen bedarf, so werde ich mich an Sie wenden, Sie als mein Lehrer werden mir solche nicht versagen, sondern die versäumte Zeit in dem vielleicht noch kurzen Rest meines Lebens einigermaßen nachzuholen die besten Anleitungen geben…“ (Maria Gr. z. Schaumburg-Lippe an Herder, 1. Jänner 1772)。夫人は伯爵より二〇才も年下であり、従つてルダーと殆ど同じ年輩であつた。非常に柔和なたちで、ルンフート派（Herrnhuter）のひとびとと親交があつた。夫には優しい愛情で対してはいたが、同時に夫の剛毅な性質と年令との隔りとからくる圧迫感にたえずなやんでいた。いまやルダーはマリア夫人から熱狂的な傾慕をうけるようになり、殊に彼女が女児分娩後病床に親しみはじめてからというものは、いよいよ尋常ならぬ様相を呈してきた。彼はいわば彼女の魂の司牧者、天上の浄福への導き手となつたのである。„Sie wird nicht lange leben.——O Himmel, wie hab' ich gewünscht, ihr den Messias doch vorlesen zu können! Nur oft mit ihr sprechen zu können! Aber das geht nicht an.“ (an Karoline, 24. Jan. 72)。

この間、ルダーはモーゼの天地創造史の研究に従つていた。一

七七二年二月研究資料を得るためにGöttingenに赴いた。その際有名な古典語学者ハイネ（Christian Gottlob Heyne 1729～1812）とその夫人Thereseと親交をむすんだ。ハイネは勿論ヘルダーに非常な好意をよせ、のちに彼のゲッティンゲン就任問題のためには非常に尽力してくれたのである。なおテレーゼ夫人からもよほど気に入られたらしく、ビュッケブルク帰還後、四〇才に近い彼女からあまりにも情愛のこもつた手紙を送られて当惑したことがあつた。このことは、マリア夫人の場合とともに、女性に対するヘルダーの牽引力を示す実例といえるかもしれない。テレーゼはその手紙を次のように結んでいる。„……**Sie kennen mich nur aus Viertelstunden, nur aus Fragmenten? O daß Sie mein ganzes Leben und alle meine innersten Gedanken durchschauten! …Verbergen muß ich mich nicht, nein, kommen Sie, sehen Sie mein Herz als Gattin, als Mutter…**“（24. Feb. 1772）。

これまで、ヘルダーとカロリーネとの文通は、時折感情のもつれをみせていたが、七二年の夏にはそれもすつかり解消し、再び率直な愛の言葉を高らかにかなでるようになつた。„…Du mein liebstes Weib oder ich ewig allein! Da stehen Sie also! Hier ich! Nur oben ist der, der ja! spreche…… Wie warte ich auf die Stunde, liebstes Mädchen, da ich mit Ihnen nächstens mehr sprechen kann! Unsere Herzen sind entsiegelt! Keine Hand, die sie je wieder verstopfe. Wie vieles muß ich sagen.“（Herder an Karoline）。„O gib mir immer den glatten Kieselstein uneingefaßt. Du Stein treuer Hand, an der ich ewig hängen will. Du Stütze meines Lebens, Du sollst mich in den Himmel führen——ach, ich kann nichts mehr sagen, ich will Luft holen für meine arme Brust! Unsre Herzen sind entsiegelt, auf ewig entsiegelt.（Karoline an Herder）。さきに友人クラウディウスの結婚（七二年四月）をきき、その後母の死（七二年九月三日肺患で他界した）をきいた。この頃からヘルダーは結婚を決意するに至つたようである。一体に、ビュッケブルクにおけるヘルダーの境遇は、頗る奇妙にしてかつ危険なものであつた。いわばヨーロッパ旅行の広大な雰囲気から急に最も狭隘なドイツ宮廷のひとつに投げ込まれていたのである。ヴィルヘルム伯は次第にその厳しい武人気質から、ヘルダーに反撥するものを感じはじめていた。これに逆比例してマリヤ夫人は夢想的な熱狂性によつてヘルダーの心をますます捉えたのである。このようなマリヤ夫人との関係や山野における孤独な自然体験などが、元来ヘルダーのうちに根差している宗教性を著しく深めるに至つた。彼は一七七二年一〇月メルク宛の手紙の中でこの消息をあからさまに述べている。自分の中にある「神学的自由思想家」(der theologische Libertin)は去り、自分は神祕的な熱狂者に変つた。天上と隠者の庵とは常に一緒にある。私は一種の「火の洗礼」(Feuertaufe)の中で変化することを予感し、おののきながらそれを期待している、と。ヘルダーがZürichの牧師ラーファター(Johann Kaspar Lavater 1741～1801)との文通をはじめたのはこの頃である。尤もラーファターの方ではすでにリーガーに（後にパ

リへも）手紙をよこし、有名になつた《断篇》の著者に、《彼岸》の状態に関する腹案――《Aussichten in die Ewigkeit》――にはどんな律格を用いたらよいか、との教示を求めてきたことがあつた。ヘルダーはリーガーでも旅行中でも、かなり社交人たることを示し、かつ啓蒙的人文主義の寛大なキリスト教を信奉したばかりでなく、彼本来の専門に対するよりも世俗的な学問に対する才能や好愛を示していたのであつた。その彼がいまやラーファターというような人物と親密になつたということは、明かに彼が啓示信仰者に変じたことの証拠である。また、長く杜絶えていたハーマンとの文通も復活した。一七七三年一月二日ハーマンに、神の啓示に関する著述に専念中である旨を書き送つた。

この手紙の終りに、„…Mein andres Werk mag noch liegen, ich will und muß erst meine Hütte bauen.“とある。すなわち七三年の正月以来„das Bauen der Hütte“――結婚の準備が彼の関心事となつてきた。カロリーネとの文通は極めて頻繁になり、ついに„…Meine Arme breiten sich nur nach Dir aus――und ich sehe nur die Gegend und den Himmel, wo du herkommst, Ach, wann? Wann?“(an Herder, 19. Apr. 73)というカロリーネの手紙を最後に婚約時代の終止符をうつた。復活祭後の第一日曜日を終え、ヘルダーはビュッケブルクを立つて四月二六日ダルムシュタットに着いた。一七七三年五月二日ついにふたりは結婚した。ゲーテも結婚式に参列してくれた。―しかしゲーテは胸中に悲しみを祕めていたことであろう、Wetzlerのロッテ（Charlotte Sophie Henriette Buff 1753～1828）もつい先日ケストナー（Johann Christian Kestner 1741～1800）と結婚したばかりだつたから。因に、カロリーネの《Erinnerungen》の手記によれば、結婚費用と従来のヘルダーの借金とは600 Reichstaler以上に達していたとのことである。彼等の結婚生活はこの借財を背負つて始められたのである。結婚後一時ヘルダーの仕事は停頓した。„… Und mit Ihrer Autorschaft?…Die meinige stockt noch immer, wird aber bald destomehr losbrechen.“(an Hamann, 21. Juli 73)。しかしやがて彼の予言通りに、ビュッケブルク時代の最も重要な著述が、一七七三年の夏および秋に創造の嵐のごとく書き上げられたのである。すなわち、《人類教化のための歴史のまたひとつの哲学》（Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit 1774）、《人類の最古の文書》（Älteste Urkunde des Menschengeschlechts I. Bd. 1774, II. Bd. 1776）の初めの三部および《説教者に与える十五の地方通信》（An Prediger, Fünfzehn Provinzialblätter 1774）。その他、心理学的著作《人心の認識と知覚とについて》（Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele）の初稿（1774）もこの時期に属する。同時に民謡の蒐集も着々と行われていた。《最古の文書》は一瀉千里に書きおろされた。ヘルダーの精力的な仕事ぶりをカロリーネに語らしめよう。„Sie wurde wie nur aus einer Empfindung, in einem Guß und Atem niedergeschrieben. Es waren heitere, schöne Sommertage; früh des Morgens, öfters um vier Uhr, schlich er sich zur Arbeit. Es war in der

schönsten Stimmung —— heiter, ernst, still erhaben. Rastlos arbeitete er fort. Ich erinnere mich noch deutlich, daß er den ersten Teil in sechs Wochen vollendete. Es waren einzige, glückliche, unvergeßliche Tage!“（《Erinnerungen》）。ヘルダーは曽て、女帝カタリーナの支配下にあつたリーガーを回想して、カロリーネに「リーガーでは、呪われ分割され小領主の下で喘いでいるドイツよりも多くのことをなすことができる」と書いたことがある。このようなドイツに対する嘆きはいよいよ高まつて、ついに時代の精神——自己満足して、知識と進歩とを誇る啓蒙主義——を弾劾するに至つた。若きゲーテのファウストもまた、啓蒙的楽観主義——「われわれは結局どんなにすばらしく進歩したことか」（„wie wirs dann zuletzt so herrlich weit gebracht“; 《Urfaust》220）——を嘲笑している。さらに、教育に向けられたヘルダーの精神にとつてはこの嘆きは、古くてしかも常に新しい問題、すなわち、人類史の永遠の上下動——„Weben und Aufreißen, penelopische Arbeit“——はそもそも意味があるのだろうか？ という問題にまで拡大された。この問題が最初の著述の核心である。それは一七七三年八月結婚の幸福に心はずみ、長いあいだ堰きとめられた急流のように、彼の若々しい文体を存分に駆使したものであり、彼はそれに茶化するような標題を与えた。《Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit —— Beitrag zu vielen Beiträgen des Jahrhunderts》。この著述の中には、地球上の出来事の絶望的な混乱を無限にころがりゆく奇蹟とみる観方や、神の啓示の不可解性から却つて或種の内在的な計画（歴史的必然性）への信仰を汲み出すべき力がひそんでいるのである。《Die älteste Urkunde des Menschengeschlechts》も、時代をより自由なより深い宗教的な生活感情へと覚醒せしめようとする同じ衝動から生じた。ここにはヘルダーがリーガー以来モーゼの天地創造史および古代東洋の英知について考えていたところのすべてのものが総括されているのである。

これらは言語的にヘルダーの最も魅惑的な著述であるが、同時にまた最も激情的にしてかつ最も自負にみちあふれたものでもある。従つてヘルダーの反対者は各所に現れた。彼に攻撃されたゲッティンゲンの歴史家シュレーツァー（August Ludwig von Schlözer 1735～1809）は彼の歴史哲学的見解に対して、ベルリーンの聖ニコライ寺院の主任司祭シュパルディング（Johann Joachim Spalding 1714～1804）は彼の神学的思想に対して反論した。ハーマンでさえ彼に眉をひそめたといわれる。勿論シュレーツァーやシュパルディングはドイツ精神史的意義に於てはヘルダーに匹敵しうべくもなかつたが、彼等はこれらの論争的な熱狂書にむかい立つて、男性的な思慮とキリスト教的英知の優越感とを固く持していたのである。それに中庸派の多くは彼等の側に与したのであつた。メルクやニコラーイ、およびカントもヘルダーの所説に背を向けた。特に《最古の文書》に対するカントの酷評に彼はいたく感情を害し、年来の宿望だつた《Volkslieder》の出版——この原稿はすでにハルトクノッホに送付ずみであつた——を撤回した。このような情況の下では

この企画が教師および宗務局評定官にふさわしくないものと批判される恐れがあつたからである。彼は他人に対しては仮借なき批判を下すくせに、他人からうける非難にはひどく神経質になるたちであつた。この間の消息は一七七五年二月十一日付ハーマン宛の手紙に於ても窺われる。„Die Volkslieder nehme ich zurück, an Fortsetzung der Provinzialblätter denke ich nicht: ich will und muß schweigen …Um uns ist Nacht, mein lieber H.（註：＝Hamann）, bittet Gott, daß er die Nacht ende und was er gewiß tun wird, in Licht anfkläre.——.“

ビュッケブルク時代には、上に挙げたもののほかに《ドイツ人の特性および芸術について》の発刊（一七七三年）を見、さらに一連の神学的な論文が起草されたのである。《新約聖書の解説》（Erläuterungen zum Neuen Testament aus einer neueröffneten morgenländischen Quelle〔註：＝dem altpersischen Zendavesta 1775〕）および《イエスのふたりの兄弟の書簡》（Briefe zween Brüder Jesu）等。このほかにもなお、再びベルリーン・アカデミー懸賞論文に入賞した《種々の民族における趣味の低落の原因》（Die Ursachen des gesunkenen Geschmacks bei den verschiedenen Völkern, da er geblühet）、入賞しなかつた懸賞論文《Wie die deutschen Bischöfe Landstände wurden》、およびレッシングによつて取扱われた題目《Wie die Alten den Tod gebildet》に関する論文ならびに《Älteste Urkunde》の第四部等がある。要するに、この時代はヘダルーにおける神学者および歴史哲学者の Sturm und Drang 時代であつた、ということができる。

一七七四年八月二八日、ヘルダーは三〇才にして長男（Wilhelm Christian Gottfried 1774～1806）を得た。当時彼の著述に向けられた世評や身体の不調などのため憂鬱になりがちだつたので、なおさらこの喜びは大きかつたと思われる。„…… Es ist ein braver, schwarzköfiger Junge, ganz bis auf Haut und Haar mein Ebenbild!… denken Sie sich unsre Freude… Das Knäblein hat mich und soll mich wiedergebären zu neuer Hoffnung meines Berufs!… In den ersten Tagen meines Gottgegebenen hab' ich recht Freud' und Ruhe und Leichtigkeit geschmeckt! Warum kann ich nicht immer so sein! Meine Schwere ist bloß Krankheit! ——In Schrift und Geist!“（an Hamann, 10. Sept. 1774）。

その後彼は新らしい知己をえ、また旧交をあたためる機会に恵まれたのである。直腸出血の治療のために Pyrmont 温泉に出掛けたとき、そこで初めてグライム（註。ヘルダーはこのひとを„Vater Gleim„と呼ぶ）と直接に知り合つた。これ以来両者のあいだには終生かわらぬ友情がつづいた。有名な Hannover の医師ツィンマーマン（Johann Georg Zimmermann 1728～95）とも同地で親交を結んだのである。すでにシュトラースブルクでゲーテと相識つたレンツ（Jakob Michael Reinhold Lenz 1751～92）が指導を求める熱狂的な手紙と《兵士》（Die Soldaten）という喜劇の手記とを送つてきた。ハルトクノッホがリーガーから訪ねてきた。友情の絆はさらに固く結ばれた。そ

して、彼がダルムシュタットに就職を世話したクラウディウスも一週間ほど賓客としてヘルダー家に滞在した。のみならず、長く杜絶えていたゲーテとの文通も再び活潑になりはじめたのである。„…und siehe, Du trittst herein und reichst mir die Hand. Da hast Du meine, und laß uns ein neu Leben beginnen miteinander; denn im Grunde hab' ich doch bisher für Dich fortgelebt, Du für mich. Sei Du mir auch immerfort hold und gut, liebe Schwester!(註。ゲーテは一七七二年三月上旬ダルムシュタットでカロリーネと相識って——*vgl.* Karolines Brief an Herder, 9. März 72——以来、再三ヘッセ家を訪ね彼女と会つたことがある) Mir wird's recht wohl, daß ich an Eurem Buben und Haushalt wieder teilhabe……“ (Goethe an Herder, 18. Jan. 1775)。

かれこれするうちに、ビュッケブルクの境遇に対するヘルダーの不満はますます増大していつた。ヴィルヘルム伯は金銭上のことで、たえず窮乏に悩んでいたヘルダーの感情を害するような仕打ちをしたことがあり、かてて加えて、或る凡庸な若者を牧師に採用せんとする伯の処置に彼が鋭く反対したことなどによつて、両者の関係は一層暗さをましたのであつた。この間、ゲッティンゲンおよびハノーヴァーの友人たち——ハイネ、ツィンマーマンおよびヴェストフェルト(註：ヘルダーのビュッケブルク招聘に努力したひとで、その後主君との不和からハノーヴァーに移住していた)——は、厳重な正統派の抵抗を排して、ヘルダーをゲッティンゲンに招聘しようと熱心に画策していた。そして事実それは一七七五年八月に殆ど成功した。しかし反対者たちはひそかにロンドンの王に訴え(註。当時ハノートヴァーとイギリスは君合国——Personalunion——だつた)、まず彼の正統信仰を調べるために口頭試問を受けさせるとの条件を得た。彼はこれを自分の名誉に反するものとして拒否し書面試問を申し入れたが、これが認められなかつたことはいうまでもない。ところが、そのあいだに、全く別の方面への活路がひらけていた。それはヴァイマル(Weimar)であつて、しかもヴィーラントの推薦によるものであつた。一七七五年十一月初め以来二〇才のカルル・アウグスト公(Herzog Karl August von Weimar 1757～1828)の招きでヴァイマルに滞在していたゲーテは熱心にこれを取り上げて、早速ヘルダーに書き送つた。„Lieber Bruder, der Herzog bedarf eines Generalsuperintendenten. Hättest Du die Zeit deinen Plan auf Göttingen geändert, es wäre hier wohl was zu tun. Schreib mir ein Wort.… Wieland ist eine brave Seele und die Fürstenkinder edel, lieb und hold.“ (Goethe an Herder, Weimar, etwa 10. Dez. 1775)。ヘルダーは衷心快諾の返事をだした。しかしここでも彼の招聘に故障が出た。ゲーテが彼のために尽力してくれたことは次のような手紙からも窺うことができる。„Glaub und harre noch wenige Tage der Prüfung.“ (Erfurt, Den letzten Tag des Jahres 75.), „Heute kann ich Dir schon Hoffnung geben, was ich vorgestern nicht konnte. … Ich bin mit Wielanden hier bei liebenden Menschen … Er wünscht Dich her, hatte eh die Idee als ich. Weiß aber nicht, was jetzt vorgeht. Ich hoffe,

Du sollst's allein durch mich und aus freier Wahl des Herzogs haben. Der Statthalter von Erfurt（註：=Dalberg）hat das Beste von Dir gesagt und bestätigt dem jungen Fürsten Deinen Geist und Kraft; ich habe für Deine politische Klugheit in geistlichen Dingen gutgesagt; …Ich wünsche Dich meinem Herzog und ihn Dir. Es wird euch beiden wohltun, und …ich muß das stiften, eh ich scheide（註：ゲーテは当時まだ、永久にヴァイマルに留まる決心をしていなかつた）…"(Stetten bei Erfurt, 2. 〔Jan.〕1776)。ゲーテは自分のほかに推薦者の必要をみとめたらしく、ヘルダーに好意をもつた正教信仰者たる神学者の名を彼に挙げさせたり、Jerusalem（註：有名な Wolfenbüttel の説教者兼宗教局長）と彼の交渉の様子をきいたりした。„…Ein guter Brief von ihm（註：=Jerusalem）würde viel tun… Der Herzog will und wünscht Dich, aber alles ist hier gegen Dich…"しかしついに、ゲーテの尽力が功を奏して、一七七六年二月一日ヴァイマル宗教局長 Lynker 男の公式招聘状がヘルダーの手許に到着したのである。

この間、彼の敬愛するマリヤ夫人の熱狂的な信仰が肉体の病弱、肺患による心理的な結果でもあることが判明し、一七七五年から七六年にかけての冬に彼女の病勢は悪化し、ついに同年六月十六日に他界した。これによつて彼をビュッケブルクに止めおくものはすべてなくなつた。

なお、ビュッケブルク時代が二種の喜ぶべき出来事によつて終止符をうつことになつたのは、ヘルダーの心を明るくしたにちがいない。そのひとつは、八月十八日に次男 Sigismund August Wolfgang（1776～1838）が生れたことであり、他は、Holstein からの思い設けぬ祝福、すなわちオイティン時代以来ヘルダーと友交のあつた Graf von Hahn から「多額の餞別」を贈られたことである。しかもそれは丁度、ハーマンが蔵書を売らねばならぬほど困窮しているとの知らせを得たときであつたので、なおさら好都合であつた。これまで屢々つらい思いをして助けを求めねばならなかつたヘルダーは、今度は旧友の困窮を救う幸福を味つたのである。

九月十五日別れの説教を行い、故マリヤ夫人の浄らかな信仰を顕彰しその冥福を祈つた。十九日ヴィルヘルム伯との最後の謁見が行われた。いまやこのふたりの心は故人への追憶で完全にひとつとなり、従来のわだかまりは一切解消して平穏に別れることができた。かくして彼は新教の地方監督長（Generalsuperintendent）の地位に就くべく、妻子三人を連れて勇躍新しい活動の場所に向つたのである。因に、最愛の妻に先立たれたヴィルヘルム伯はそれ以来急に衰えをみせはじめ、その年冒された病からついに回復することができなかつた。ヘルダーのビュッケブルク別離後丁度一年にして、一七七七年九月一〇日 Hagenburg の近くで此の世を去つたのである。これよりさき、夏の或日ヘルダーはもう一度伯に相見える機会をえた。湯治にきていた Pyrmont から面会を申込むと、伯から出迎えの車馬が遣わされた。彼等はこの最後の別れの時にも故人のことのみ語り合つたとのことである。

われわれは、初期ヘルダーを彼の三〇才(一七七四年)以前に、すなわち文学論を中心とした一連の著作活動から歴史哲学および神学の著述に至る時期までに限るつもりであつた。しかし Bückeburg 時代を中途でやめるわけにもいかなかつたので、それ以前の時代とほぼ同程度の紙数をこれに費したのである。本稿の課題は初期ヘルダーにおける文学論の解明とその批判にあり、これは第三章に於て総括的に取扱われるはずである。後期ヘルダー、特にヴァイマル時代は本稿の範囲外であるから、以下ごく簡単にその発展の経路を述べることにする。(附記。ヴァイマル時代は通常、《イタリヤ旅行、一七八八年》を境界線としてその前後二期に分けられる)。

附・ヴァイマル時代(後期ヘルダー)

Weimar時代(1776〜1803):——途中、ゲッティンゲンのハイネ家(註:テレーゼ夫人はすでに先年死去した)に一日、ハルバーシュタットのグライム家に一週間滞留したのち、ヘルダーの一行は、一七七六年一〇月一日午後一〇時頃ヴァイマルに到着した。いまや彼は願望の目的地に達したようにみえた。最初の報告には喜びにあふれる気持があらわれていた。„Goethe habe ich hier weit besser, tiefer und edler, als ich ihn selbst dachte. Wieland ist ein Bonhomme...Der Herzog ist ein edler, freier, wahrer, guter Junge...Die Herzogin ist ein herrlicher, edler Engel... Ich bin hier allgemein beliebt und geehrt bei Hofe, Volk und Großen; der Beifall geht bis ins Überspannte, Ungemessene.....Sie bücken sich alle zur Erde.“しかしやがてこのような喜びと満足の気分は薄れていつた。ここにもまた、どんな境遇にも満足できない彼の性格があらわれる。さきに挙げたゲーテの手紙にも暗示されているごとく、ヘルダーの推挙はヴァイマル宗教界の大部分の意見に反して実行されたのであるから、彼はたえずひとびとの冷い視線を感じなければならないようになつた。その上、夥しい無味乾燥な事務が押しよせてきたこと、ゲーテと大公とが一七七九年チューリヒにラーファターを訪ねたことに対する疑訝、中んずく、大公が説教師の宗教活動を顧みることなく、専らゲーテとともに国中をとび廻つていたということなどが、ヘルダーの心をいよいよ暗くさせたのである。

しかしながら他面、彼が次第にヴァイマルのかなり自由な空気に慣れてきたことも事実であつて、その証拠は彼の著述がこれを示している。《恋愛歌集》(Lieder der Liebe, ein biblisches Buch 1776)——以前の神学が寓意的な解釈を施していた旧約聖書の雅歌(das Hohe Lied)を恋愛歌の集成であると解釈した——、《ヨーハン・ヴィンケルマンの記念碑》(Denkmal Johann Winckelmanns 1777)、《造形芸術》(Plastik 1778)、《人心の認識と知覚とについて》(Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele 第三稿 1778)等が相次いで発表され、一七七八年から七九年にかけて、長年準備された民謡の蒐集が完成された(《民謡》Volkslieder I. Bd. 1778, II. Bd. 1779。これは後に出版者 Joh. von Müller によつて《歌謡における諸民族の声》Stimmen der Völker in Liedern と題された)。ひきつづき、《神学の研究に関する書簡》(Briefe, das Stu-

dium der Theologie betreffend 1780) および《ヘブライ詩の精神について》(Vom Geist der Ebräischen Poesie I. Teil: 1782, II. Teil: 1783) 等が発表された。

この間、ゲーテの精神的発展もヘルダーの本質をより純粋に理解しうるまでになつていた。明かにされた人間性 (Humanität) の理想は、奔放な青年時代の朦朧たる激情を抑制するようになつた。一七八三年にゲーテとヘルダーとのあいだに新たな深い友情がきざし始め、この関係はシラー (Friedrich Schiller 1759〜1805) がゲーテに近ずくまで、殆ど十年間あまりつづいた。それは神と世界とに関する考察における精神的協力の中にあらわれている。両者の提携を最も明かに反映しているものは、ヘルダーの偉大な歴史哲学的労作たる《人類歴史哲学考》(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit 1784〜91) および《スピノーザに関する対話》(Gespräche über Spinoza 1787) である。

一七八八年ヘルダーはもう一度ヴァイマルの狭隘からぬけでて、広大な世界の空気にふれる機会を与えられた。大聖堂参事会員 Dalberg——Erfurt 知事兼 Mannheim 劇場監督 Wolfgang Heribert Dalberg (1750〜1806) の末弟——がヘルダーをイタリヤ旅行に誘つた。彼はかねての宿望でもあり、かつゲーテのイタリヤ旅行にも刺戟されていたので、ただちにこれを受け入れた。しかしここでもまた苦汁を嘗めねばならなかつた。もうひとり同行者がいた。それは Frau von Seckendorff であつた。もともとこの婦人との同行には気がすすまなかつたのであるが、旅程が歴史や美術や自然美によつてではなくゼッケンドルフ夫人の遊興癖によつて決められているのを知るや、ヘルダーはひどく憤慨しローマでダールベルクの仲間から離れてしまつた。折よくそのとき、ヴァイマル大公の母君アンナ・アマーリア (Anna Amalia 1739〜1807, Hezogin von Sachsen-Weimar) がイタリヤ旅行中だつたので、彼はこれに随行して旅をつづけることができた。しかし、イタリヤの印象はもはや青年期のフランス旅行のような精神の高揚を彼にもたらすことがなかつた。ゲーテの心眼には限りない精神の糧、芸術美の泉と映つたあのローマは、ヘルダーにとつては、「墓場」ないしは「人殺しの巣窟」であつて、ゆめ「彼のいる所ではなかつた」(*vgl.* Brief an Karoline) のである。ここにわれわれは芸術家ゲーテと思想家ヘルダーとの懸隔をよみとると同時に、ヘルダーの救いがたい性格と宿命とをみとめざるをえないのである。

すでに彼のイタリヤ旅行中に、ゲーテとの友情の絆はゆるみはじめていた。妻からの手紙でゲーテとクリスチアーネ (Christiane Vulpius 1765〜1816) との関係を知つた。帰還後、ヘルダーはフランスに勃発した大革命(1789) に心酔しこれに熱狂的な声援を送り、革命に対するゲーテの消極的な態度にあきたらなかつた。ついに、シラーの影響が、ヘルダーと共にしていた精神的領域からゲーテを疎隔するようにみえた。《人道主義促進のための書簡》(Briefe zur Beförderung der Humanität 1793〜97) の集録の中にこの間の消息が窺われる。シラーがヴァイマルに現れ、ゲーテがこれと友交を結んで以来、ヴァイマルにはひとつの分裂が生じた。ゲーテ・シラーの

「古典派」(Klassiker) の盟約にむかい立つて、ヘルダーとヴィーラントとは「前古典派文学」(die vorklassische Dichtung)の理想を楯にとつて譲らなかつた。この対立はヘルダーの反カント論争によつていよいよ激化された。ヘルダーはカントの《批判哲学》(Kritizismus) の中に新しい《古典主義》(Klassizismus) の基礎づけを見出した。ヘルダーの《純粋理性批判の再批判》(Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft 1799) はカントの《純粋理性批判》(Kritik der reinen Vernunft 1781)に、また彼の《カリゴーネ》(Kalligone 1800) は《判断力批判》(Kritik der Urteilskraft 1790)に対して攻撃を加えた。が、世評はヘルダーにくみしなかつた。もはや古典・ロマン主義的理想主義の精神は、ヘルダーの心理的・歴史的文学観を超脱してしまつていたのである。ヘルダーはなおも個人雑誌《アドラステア》(Adrastea 1801～03) に於て、隠された毒舌によつてゲーテ・シラーの仲間を攻撃しつづけた。この雑誌に発表された戯曲数篇と《チッド》(Cid. Geschichte des Don Ruy Diaz, Grafen von Bivar, Nach spanischen Romanzen 1805; ヘルダー歿後アドラステア最終巻に発表された) とは、彼が再び外国の文学作品の研究と翻訳とに向う途上にあつたことを示している。

ヘルダーは当時すでに病魔に冒され、屢々卒中の発作におそわれていた。あらゆる治療もききめがなく、一八〇三年十二月十八日、朝来胸部の激痛に苦しんだのち昏睡をつづけ、ついに夜十時半頃五十九才を一期に此の世を去つたのである。彼の墓碑銘《光、愛、生命》(Licht, Liebe, Leben) は生前彼の捺印用指環にきざまれていた語である。

第三章 『初期ヘルダーの文学論』概観

一

十八世紀後半の哲学におけるヘルダーの立場を明かにしようとすれば、ひとは先ず第一に、ハーマンとヒュームの思想的門下たる彼を経験論者 (Empiriker) としてみようとする。しかし間もなくヘルダーが普通の意味とは異なつた特殊な経験論者たることをみとめるにちがいない。一体、旅行記の場合ほど、観察され経験されたものを叙述するにふさわしい純粋な機会がどこにあるだろうか。ところが、ヘルダーの一七六九年の《旅日記》をひらけば、ひとは土地や住民について聞くことの尠いのに唖然とするであろう。„Wasser ist eine schwerere Luft. Wellen und Ströme sind seine Winde: die Fische seine Bewohner: der Wassergrund ist eine neue Erde! Wer kennet diese? Welcher Kolumb und Galilei kann sie entdecken? Welche urinatorische (註:=unter das Wasser tauchende) neue Schiffahrt; und welche neue Ferngläser in diese Weite sind noch zu finden?“ ここでは性急のあまり《観察》から新しい《知識》を引出すことができないようにみえる。まるで空想が彼を新しい幻想、着想、予感へとかろやかに翔けさせている

ようだ。彼は生命を、さらに――彼の目には隠されていたのに――海底の生物を心に描こうと試みる。彼は曽て移りゆくにしん（Heringe）の群について読んだことがある（見たことはなかつた！）。それだけですぐその中に移動する北方の民族の歴史を見出そうとする。„Welche große Aussicht auf die Natur der Menschen und Seegeschöpfen, und Klimaten, um sie, und eins aus dem andern und die Geschichte der Weltszenen zu erklären. Ist Norden oder Süden, Morgen oder Abend die Vagina hominum（註：＝die Geburtsstätte der Menschheit）gewesen? Welches der Ursprung des Menschengeschlechts?“（IV. S. 351）。これは不軌奔放なる空想の犠牲でなくて何であろう。ヘルダーの観察は、慎重に理性の上にきずかれた普通の学問におけるのとは、全く異なる種類のものである。それでも勿論この旅日記から色々なことを聞くことはできる。例えば、フランスでは水先案内人や子供たちでさえフランス語を話すということ、生ける言葉や死せる言葉が存在し、死語もまた曽て生きていたということ、そしてそれらが未だ生きているかのように学びかつ教えねばならないということ等々。しかしそのようなことを知るためにフランスへの旅行が必要であろうか。ここに於てわれわれははつきりと、誤つた前提を以てこの《旅日記》に近づいたことを知るのである。《観察》ということは、ハーマンの弟子にとつては、十九世紀の実証主義を通過した現代のわれわれにとつてよりも異なつた或るものであるのだ。すなわち、外的なものを純粋かつ冷静に受容しこれを正確に記述するというようなことは、毫もヘルダーの関心事ではなかつた。かてて加えて、彼はあまりにも精神にみちあふれていた。ヘルダーにあつては、精神を外的なものの中に見出し、自然を神の象形文字（Hieroglyphe）として体験し、精神の痕跡を事物相互の関係に於て看取し、類比を見出すために、外的なものを観察する必要があつたのである。彼の観察はいわば《象徴的に視ること》（symbolische Schau）である。それはヴォルフ流の合理主義における抽象的知識を想起するひとにとつては、充分に《経験》といわれるべきものであつたろう。ヘルダーは後年彼の空想を制御し比喩と意味とをよりよく相互に調和せしめるようになつたのであるが、それは漸くゲーテが彼を純粋な観察に手引きしてからのことであつた。

本稿のごとく彼の《文学論》を取扱うものにとつては或いは論述範囲を逸脱するきらいがないでもないが、ヘルダーにおける《科学性》の意味と限界とを知ることは、結局彼の文学研究の態度と方法とを明かにする上に大きな示唆を与えるわけであるから、ここに《心理》と《認識》とに関する彼の著作にふれておきたいと思う。われわれはヘルダーの《Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele》（既出）を繙いてみると、ここでもまた、心の機能や認識の発生に関する綿密な分析や記述を、ヴォルフ流の哲学によつて慣らされていたようには、期待することができないであろう。事実それは全く異質のものである。初稿は一七七四年ビュッケブルクにて、第三稿は一七七八年ヴァイマルにて成立したのであるが、第三稿もまた依然としてビュッケブルク時代の激情的な文体と熱狂

的な考え方とを示している。すでにその出発点が即物的客観的な経験を拒斥している。あらゆる認識は比喩的である。„Der empfindende Mensch fühlt sich in alles, fühlt alles aus sich heraus, und druckt darauf sein Bild, sein Gepräge.“ このような比喩的操作による方法も、ハラー（Albrecht von Haller 1708～77）の「刺戟感応性説」（Irritabilitätslehre）から《刺戟》（Reiz）なる概念が導入され、これを以て心のあらゆる作用の起源が筋肉組織に於て表現される場合には、何となく科学的客観性を有するようにみえるのである。しかしながらこの場合でもただちに科学的な地盤は再び放棄されて、想像にみちびかれた一般化が前面に出てくる。„Ein menschliches oder (!) übermechanisches Spiel von Ausbreiten und Zusammenziehen sagt wenig oder nichts, wenn nicht von innen und außen schon die Ursache desselben vorausgesetzt würde. ‚Reiz, Leben‘. Der Schöpfer muß ein geistiges Band geknüpft haben, daß gewisse Teile diesem empfindenden Teil ähnlich, andre widrig sind; ein Band, das von keiner Mechanik abhängt, das sich nicht weiter erklären läßt, indes geglaubt werden muß, weil es da ist, weil es sich in hundert Erscheinungen zeiget.“《愛情》もまたこのような Reiz の精神的な絆として作用する。しかもヘルダーは機械的な自然解明の仕方に追従することは全然なかつたのである。彼は明確な生物学的概念たる Reiz を一般中性的概念たる《Kraft》によつて補つている。„Ist Kraft da in der Natur, die aus zween Körpern blos durch organischen Reiz einen dritten bildet, der die ganze geistige Natur seiner Eltern habe, wie wir's an jeder Blume und Pflanze sehen“. すでにここに於て、汎神論的に、Kraft という光彩陸離たる概念で以て、精神的なるものが肉体的なるものと同一視されているのであるが、さらにわれわれは、あらゆる薄暗き力、激情、衝動等を有する「内なる人間」（der innere Mensch）は《ひとつのもの》である所以をきくのである。„Alle Leidenschaften, ums Herz gelagert und mancherlei Werkzeuge regend, hangen durch unsichtbare Bande zusammen und schlagen Wurzel im feinsten Bau unsrer beseelten Fibern.“ これによつて、ヘルダーがヴォルフの亜流を非難して、その哲学を《将棋盤心理学》（Schachbrett-psychologie）と呼んだ理由を知ることができる。これはさきに、言語の達人たるひとりの文筆家による心的過程の叙述であつて、いわばあらゆる可能な表象分野から獲た概念を、真に説明しがたい現象の上に注いだものということができる。かかる geistiges Band は感官の作用に於てもはたらく。彼によれば、構想力は感官によつて培養され、神経は感覚の流れゆく運河である。„Ein Gedanke und Flammenstrom gießt sich vom Kopf zum Herzen. Ein Reiz, eine Empfindung und es blitzt Gedanke, es wird Wille, Entwurf, Tat, Handlung.“ ヘルダーに於ては、本来の意味に於て、《肉体的機能の精神的活動への転化》に関する問題は存しないのである。尤も彼は「いわゆる、心のからだに及ぼす影響、およびからだの心に及ぼす影響」（sogenannter Einfluß der Seele auf den Körper

und des Körpers auf die Seele）について語つてはいる、がしかしそれは単に《まさしくそうした事情にある》ことを確認し、かつ漠然と置換器官としての《松果腺》（Zirbeldrüse）の古い理論を引合いにだすためになされたにすぎないのである。事実また彼にとつては、刺戟や感覚が認識や意志に上昇すること、結局心の統一を比喩で以て告知することはまことに易々たることであつた。„Schon Hippokrates nannte die menschliche Natur einen lebendigen Kreis, und das ist sie. Ein Wagen Gottes. Auge um und um, voll Windes und lebendiger Räder. Man muß sich also für nichts so sehr, als für dem einseitigen Zerstücken und Zerlegen hüten. Wasser allein tut's nicht, und die liebe kalte spekulierende Vernunft wird dir deinen Willen eher lähmen, als dir Willen, Triebfedern, Gefühl geben. Wo sollte es in deine Vernunft kommen, wenn nicht durch Empfindung? Würde der Kopf denken, wenn dein Herz nicht schlüge?

ヘルダーの思想には彼独自の偉大な真理がある、と同時にそれだけまた危険な錯誤もあるといつてよい。《Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele》なる書は、ヘルダーの精神および仕事の内部にひそむ悲劇的な分裂を最も明かに露呈するものであろう。彼は自己に課した問題が冷静な科学を要求した場合には激情的霊感的な詩人であり、詩作せんと欲したところでは学者であつた。科学と文学とに於て彼は充全なる形成を拒まれていた。けだし彼には、彼の内に結合され生きているものの叙述に於て《分離》（Sonderung）の才に缺けていたからである。ここで想起されるのは、ゲーテが《詩と真実》の第十二章に於てハーマンを批判していつた言葉である。ゲーテはここで《分離》の能力の重要性を明かにしており、かつそのハーマンに関する性格描写は、部分的にハーマンの弟子たるヘルダーにもあてはまるところが多いと考えられるので、敢えて煩を厭わずゲーテの語るところに耳を傾けてみよう。『ハーマンのすべての言説が帰着する原則は次のごとくである。《人間が成就しようと企てる一切のことは、それが行為によつて、また言葉によつて、或はその他いかなる方法によつて生れるものであろうとも、あらゆる力の結合から発生しなければならない。すべて離ればなれのものは排斥すべきである。》すばらしい格言である、だがこれを遵奉することはむつかしい。なるほど生活と芸術に関しては当てはまるかも知れない。これに反して言葉を媒介とする、しかも詩的でないあらゆる伝達の場合にはきわめて大きな困難が見出される。何故なら、言葉が何かを言い現わし、何かを意味するためには、全体から分離せざるをえず、個別化せずにいないからである。人間は何かを語るとき、その瞬間一面的とならざるをえない。分離ということがなくて、どんな伝達も、どんな学説もありえない。ところがハーマンは、断乎としてこのような分離に反対して、彼が統一的に感じ、想像し、思考したことを、そのまま統一を失わずに語ろうと欲し、他人に対しても同じことを要求したので、その結果彼自身の文体にも、また他人の制作しうる一切のものにも、反対するに至つた。それ故彼はこの不可能なことを成就しようとしてあらゆ

る要素を捉えるのである。自然と精神とが冥々裡に会合する最も深秘な直観、かかる会合から輝き出る惶々たる悟性の閃光、この境域に浮動する意味ぶかい形象、僧俗の別なく著作家の透徹した金言、その他なお諧謔を交えて附加されうるようなもの、これらのすべてが彼の文体、彼の表白の驚くべき全体を形成しているのである。それ故もしわれわれにして、低処にあつて彼と親しむこともできず、高処に於て彼と共に逍遙することもできず、彼の眼前に彷彿する形姿を捉えることもできず、或は無限に広汎な文献の中から僅かに暗示された箇所の意義を、それと確かに見出すことができないとすれば、われわれは彼を研究すればするほど、益々あたりが朧ろげに、暗くなるばかりである。しかも彼の諷刺は主として生活についても、文学についても、その当座支配していた一定の特性に向けられていただけに、この暗黒は年を逐うて加わるばかりであろう。私の蒐集の中には、彼の文章の校正刷が数枚あるが、彼はその余白に自筆で諷刺の対象となつた章句を引用している。その箇所について当つてみると、そこにも模糊とした二重の光が見出される。それはわれわれに興深くも見えるが、ただこの場合われわれは通例理解と呼ばれるものを全然断念しなければならない。これらの冊子はそれだけを単独に考察することができず、いわば、この冊子の説く神託を逃げ場にする機会を待たねばならないのだから、この点でもまた神巫的（Sibyllinisch）と呼ばれるにふさわしい。これらの冊子は、どの箇所に寓せられる意味でも、いろいろの仕方でわれわれを感動させ、刺戟するので、いつ繙いて見ても常に新しいものを見出す思いがする』（小牧健夫先生訳による。圏点は筆者）。ヘルダーもまた《Sonderung》の才に恵まれていなかつた。すなわち、精神的な全量を言葉となつて現れる個々の概念に配分するという能力、つまりレッシングが《ラオコーン》に於て言語的表現の要素だと説いたところの原理的な能力は、ヘルダーにも缺けていたと思われる。彼はまさしくその最も天才的な著作に於てすら、かの《分離》の術を獲得することができなかつた。結局このことが、豊富な思想内容にもかかわらず、明確な表現、完全な形成をヘルダーに拒んだ原因である、ということができる。

ヘルダーがハーマンから受けついだ最も重要な認識は、歴史的生の本質への洞察である。第一章で述べたように合理主義もたしかに歴史を発見していたが、それは理性の思惟界ならびにその表現界の中にこれを包含してしまつていた。けだし合理主義は数学的に証明された論理的な合目的性を、歴史のもろもろの力や出来事の上にも移したからである。ところが、ヘルダーがハーマンから学んだものは、歴史的事実それ自体の把握であり、かつ、神的な世界根拠から世界の自然的な連関に於て歴史を解釈する、ということであつた。彼はこれに対してはまことに恵まれた素質をそなえていた。彼のうちには感性的な力が優勢であつたが、それは激情におけるよりも、むしろ受容し経験する器官の敏感と繊細とに於てあらわれていた。従来のドイツ精神界に於ては、ヘルダーほど深い洞察力とゆたかな多産性とをそなえたものは稀であろう。或いはブロッケス（Barthold Heinrich Brockes 1680～1747）がヘルダーに比肩しうるかもしれ

ない。ブロッケスもまた極めて繊細な観察の器官を有していた。しかしそれは何といつても外面的な分明なものの観察にすぎなかつた。そのようなものはそれ自身死せるものであり、単に機械的に動いているものであつて、詩人の思想を通して《目的組合》（Zweckverband）――ブロッケスは世界をこのように見た――の中へ論理的に包含されねばならなかつた。いかに神における地上の愉楽を歌つた（註。ブロッケスの代表的詩集は《Irdisches Vergnügen in Gott》という）にせよ、彼が事物を統括するに用いたのは技巧的人間的な絆であり、結局啓蒙主義的楽天観にほかならなかつたのである。ヘルダーの場合はこれとは全く対蹠的である。彼の観察は決して外皮に停著するものではなく、彼の思惟は毫も諸対象を相互に論理的な関係におくことではない。彼は、同時に感じ予感し眺めながら、構成体の内部へと侵入し、その中で生の奔流に、精神の脈動にふれてこれを発見する。彼は外と内との、形体とその機能とのあいだの連関を感ずるのである。かかるヘルダー精神の特質を最も明かに示しているものは一七六九年のフランスへの船旅の《日記》である。われわれはさきに、この旅行記の消極面を強調しすぎたきらいがあるのであるが、ここに再び《旅日記》に立ちかえり、彼の本質的積極面に考察の筆をすすめることにする。

一般にヘルダーの文筆活動は時代に対するプロテストである、ということができる。ハーマンのように、彼もまた時代の眼をあらゆる存在（Sein）の生ける根源に向けさせ、世界を革新しようと欲する。《旅日記》は彼の生前発表しようと思わなかつたものであるだけに、われわれはそこに彼の灼熱せる心臓の鼓動を感じ、彼の抗議と彼の新しい世界感情との告白を読みとることができるのである。„Da ging ich umher, dumm, und gedankenlos, und stumpf, und unthätig, sprach zum Lachen und nahm hundert Bücher, um hundert von ihnen wegzuwerfen, und doch nichts zu wissen.“（VI. S. 447）。この表白は、ヘルダーの活潑な批評家活動とリーガーにおける彼のかなりすぐれた地位とを思い浮べるならば、頗る奇異の感にうたれるであろう。しかし彼はここで彼の境遇と時代の情況とを仮借するところなく叙述しているのである。ここには啓蒙主義時代とヘルダーとの全対立がはつきりと示されている。彼は百冊の本を読み、そしてそれらを投げすてる。人々と語り問題を討論するが、しかも物笑いのたねになるのがおちだ。彼は自分を愚昧、遅鈍、無思想と感じる。だが一体、この時代ほど討論のために懸賞問題を次々に提出したような時代はなく、もはや展望しがたいほど夥しい学問的労作や批評的寄与が生活をみたしていたのに、どうして「無思想」などということが彼の場合いいうるのであるうか。ここに於てわれわれはこう判断せざるをえない、ヘルダーは啓蒙主義のかかる営みそのものに無聊を覚えたのだ、と。事実《旅日記》は彼の生涯の分岐点において成立したものであり、彼がリーガーにおける狭隘な活動に飽き、そこから広大な天地へ逃れ、彼の過度に強烈な著作衝動を憚るところなくはたらかしめようとしたことは明かである。当時彼の内部に欝勃とわきたち後に極めて魅惑的な著作に於て形成されたところの一切のもの、すなわち可能性への憧憬、

想念の充溢といつたものが、この日記の中に渦巻き表現され明晰を求めて喘いでおり、しかも究極の言葉は見出していないのである。まさにこの故にこそ、この作品はヘルダーの魂の最も忠実な鏡であるということができる。そこに《感性》に対する讃辞が見出されることは当然である。„Man verliert seine Jugend, wenn man die Sinne nicht gebraucht. Eine von Sensationen verlassene Seele ist in der wüstesten Einöde: und im schmerzlichsten Zustande der Vernichtung. Nach langen Abstraktionen folgen oft Augenblicke dieses Zustandes, die verdrießlichsten im Leben. Der Kopf wüste und dumm: keine Gedanken und keine Lust sie zu sammeln: keine Beschäftigung und keine Lust sich zu beschäftigen: sich zu vergnügen. Das sind Augenblicke der Hölle: eine völlige Vernichtung, ein Zustand der Schwachheit, bis auf den Grad, was zu begehren.“ この言葉はまさしくハーマンの的熱火の閃光を思わしめる。にもかかわらず、ここにはハーマンに比して何たる懸隔が存することか！ ハーマンは博覧強記の宝庫の中で、彼のもろもろの着想を連想的につなぎ並べ、これらをレッシングのようには論理的にでなく、外面的には相互の関係なしに、内面的には予感の暗い糸によつて弛く結び合せているのである。ヘルダーもまた思想の論理的結合などは意に介しないのであるが、しかし彼は思想を連想的に並べたてたり、単なる予感によつて結合したりすることはない。ヘルダーの本領は個性的な生および精神の状態を有機的な連関に於て叙述することにあつた。啓蒙主義の心理学は上層感覚と下層感覚とを区別する。前者は視覚と聴覚とであり、後者は嗅覚、味覚および触覚である。中んずく視覚は明晰な直観の媒介者として重視された。ヘルダーはかゝる等級づけを拒否する。いなむしろそれを逆倒しさえする。明るい直観や冷い概念を媒介する視覚ではなくて、暗黒、深淵の世界をひらくところの爾余の感覚が彼には重要であつた。しかも彼の本性はいわばたえず刺戟を受けやすく感じやすい状態にあるようにつくられていた。彼は人間や事物をして冷やかに自分に作用せしめることができず、それらのものによつて魂の内奥を点火され、感情の閃光を以てその作用に応じたのである。中庸の感情生活を営んだヴィーラントは „Der Mann ist wie eine elektrische Wolke.“ とメルクへの手紙の中でヘルダーを評している。ヘルダーの事物把握の仕方はいわば帯電である。事物は彼の感情の熱火のもとで灼熱し、彼はみずからの内的な動きを事物の中へ照射する。かくして全世界はこの強力な電流の中で生命をうるのである。彼自身が自分の知覚の仕方を表明しているのを聞いてみよう。„Wenn ich in gewissen Augenblicken noch jetzt meinem Gefühl eine Neuigkeit und gleichsam Innigkeit gebe: was ist's anders, als eine Art Schauder, der nicht eben Schauder der Wollust ist. Selbst die stärksten Triebe,die in der Menschheit liegen, fangen in mir so an, und gewiß, wenn ich in diesen Augenblicken zum Werk schritte, was könnte für eine frühere Empfindung dem neuen Wesen sich einpflanzen als eben dieselbe?... Ein erstes Werk, ein erstes Buch, ein erstes

System, eine erste Visite, ein erster Gedanke, erster Zuschnitt und Plan, ein erstes Gemälde geht immer bei mir in dies gotische Große, und vieles von meinen Planen, Zuschnitten, Werken, Gemälden ist entweder noch nicht von diesem hohen zum schönen Stil gekommen oder gar mit dem ersten verschwunden. Gefühl für Erhabenheit ist also die Wendung meiner Seele: darnach richtet sich meine Liebe, mein Haß, meine Bewunderung, mein Traum des Glückes und Unglücks, mein Vorsatz in der Welt zu leben, mein Ausdruck, mein Stil, mein Anstand, meine Physiognomie, mein Gespräch, meine Beschäftigung, alles. Meine Liebe! Wie sehr grenzt sie an das Erhabene, oft gar an das Weinerliche! ... Wie kann mich ein Unglück, eine Träne im Auge meiner Freundin rühren! ... Mein Leben ist ein Gang durch gotische Wölbungen, oder wenigstens durch eine Allee voll grüner Schatten: die Aussicht ist immer ehrwürdig und erhaben : der Eintritt war eine Art Schauder: so aber eine andere Verwirrung wird's sein, wenn plötzlich die Allee sich öffnet und ich mich auf dem Freien fühle.“ このようなひたすら前へ前へと過りゆく文章の群——それはあたかも野獣の群に似ており、同時にすべては出口から脱走しようとしている——の中に、表象と概念との推積の中に、感嘆文の連続に於て示される興奮状態の中に、夥しい句読点、ひとつの思想を次の思想の中に滑りこませるための入口ともいうべきコロンの頻繁

な使用の中に、われわれはルダーの全体像を把握することができるのである。それはまさしくルダー自身が „halbverständlich, halb sombre“ と規定したところの言語にはかならない。

„Der erste Anblick von Nantes war Betäubung: ich sah überall, was ich nachher nie mehr sahe: eine Verzerrung ins Groteske ohngefähr.“ これはルダーが航海の後ナントでえた最初の印象である。啓蒙主義とは彼にとつて端的にフランス精神を意味する。ナントで出会うものは悉くフランス精神の代表とみなされる。„Bei aller Munterkeit und Belebtheit, wer hätte in ihm... den Langweiligen errathen sollen, der sich auf seinem Lehnstuhl zermartert und die schrecklichste höllische Langweile auf die muntersten Gesichter ausbreitet, der immer einen Diskurs zu lang findet, frägt und keine Antwort Lust hat zu hören, mitten im Diskurs ein langweiliges Gähnen hervorbringt und an nichts Geschmack findet——wer hätte den in ihm raten sollen?“ (IV. S. 440) さきにも述べたように、彼は当時感じはじめていた無聊や倦怠から逃れるために航海を思い立つたのであるが、まさにこの退屈な人間の見本をいまやフランスに於て発見したのである。ルダーによれば、かかる退屈なフランス的啓蒙主義は事実またドイツにも流行しているのだ。„Und würklich an diesem Charakter war recht das Französische zu sehen, was nichts als Gleißnerei und Schwäche ist. Seine Höflichkeit war politesse und honeteté, oft auswendig gelernt und in Worten : seine

Lobeserhebungen fingen damit an. ‚er sprach Französisch' und endigten damit, er war von einer politesse, daß — — und der Nachsatz fehlte. Seine Geschäftigkeit war leicht, aber auch um nichts: Briefe schreiben, wie Wasser; es waren aber auch gewässerte Briefe, die nichts enthielten als Meteorologische Verzeichnisse über Regeln usw. Seine Delikatesse war todte Ordnung, z. E. Symmetrie auf dem Tische, oder Faulheit. Seine Ruhe Gedankenlosigkeit. Sein Urtheil eine Versicherung voriger Jahre über die er weiter nicht dachte: sein Widerspruch oft der simpelste Gegensatz ohne Umschweife und Gründe: kurz bei allen guten Seiten, die abgebrauchteste, entschlafenste Menschliche Seele, die Gähnendes gnug hatte, um zehn Andre um sich einzuschläfern und gähnend zu machen." (ebd.)。このようなフランス精神に対する酷評は、いかにルターがフランス精神を啓蒙主義と同一視し、かつそれに反撥を感じていたかを知らしめる。しかるにフランス語に対しては大きな価値を認め、その特質を正当に評価し、言外にフランス精神の積極面を匂わせている。„...denn sie (註:=die französische Sprache) ist die allgemeinste und unentbehrlichste in Europa: sie ist nach unserer Denkart die gebildete: der schöne Styl und der Ausdruck des Geschmacks ist am meisten in ihr geformt, und von ihr in eine andere übertragen: sie ist die leichteste und einförmigste, um an ihr ein Praegustus der Philosophischen Grammatik zu nehmen: sie ist die ordentlichste zu Sachen der Erzählung, der Vernunft und Raisonnement...Ich will, daß selbst der Gelehrte besser Französisch, als Latein könne!" (IV. S. 393)。フランス語は小説や理性や推理といったことがらに最も適している。学者でもラテン語よりフランス語のできる方がよいと主張するのである。つとに少年の頃からラテン語に習熟していたはかならぬ彼が、さらに次のような文章に出会うといささか首をかしげざるをえない。この場合ドイツ語よりフランス語に優位をみとめているらしくみえるからである。„Sie hat einen Reichtum an feinen und delikaten Abstractionen zu Substantiven, eine große Menge Adjektiven zur Bezeichnung insonderheit Dinge des Geschmacks, eine Einförmigkeit in Construktionen, die Zweideutigkeiten verhütet, eine mehrere Kürze von Verbis als das Deutsche; sie ist zur lebendigen Philosophie die beste." (IV. S. 428)。このような外見上の矛盾——或は、ルター精神の宿命的な分裂——はどのように解決されるであろうか。ルターは「フランス語は哲学のことばである」か否かを自問して、„Ja sie (註: = die französische Sprache) kans seyn, nur Franzosen müsten sie nicht schreiben! nicht sie für Franzosen schreiben! sie als todte Metaphysische Sprache schreiben!" (IV. S. 427) と答える。彼はフランス語に哲学的精神を帰している。ただそれは本来哲学的なフランス人のためには書かれる必要がないであろう。事実すでに彼等の国語はフランス語であり、従って哲学的なのだから。ルターによれば、国語

がそのまま哲学的であるという、そのことのためにフランス人には、本来の意味に於て、「母」国語、すなわち彼等みずからの世界の根拠が缺けているのである。ここでいう《哲学》とはいわゆる理性形而上学を意味する。従ってフランス精神に対するハルダーの批判は、それが生の全体的充溢を減殺するという点に向けられる。この批判はまた明かにハルダー自身と啓蒙精神との関係を示す。彼がフランス人について、彼等の談論はいつもあまりに長すぎ、質問をして返答はききたがらず、談論のさなかに退屈な欠伸をしでかし、どんなものにも嗜好を感じない（前出）、と書くときハルダーはおなじことを自分自身についても告白し、百冊の本をとりだしたり、投げすてたりする（前出）、という。かかる倦怠が彼自身の生を麻痺させるのをおそれ、より広大な世界に未知の可能性を求めて旅路にでたハルダーの気持は必ずしも想像するに難くない。彼は端的に、啓蒙の学識と科学とを „Metaphysische Verzeichnisse über Regeln“, „todte Ordnung“, „Gedankenlosigkeit“ とみなし、かつまた、その全教養を《暗誦された知識》とみなすことによって、生に敵対する啓蒙主義的傾向を特徴づけている。《批評の森》（既出）の中で彼は叫ぶ。„Lehrlinge der Wissenschaft! so schläft eure Seele ein: Alle ihre Glieder lähmen sich, wenn sie sich in die Gewohnheit legen, auf den Worten und Erfindungen andrer zu ruhen.“ (IV. S. 58)。啓蒙的な知を思想のない単なる暗記ことみなしたハルダーは、かかる知に対して仮借するところなき抗議を試みた。„Und das ist der klägliche Zustand unsers heutigen ganzen Reiches der Gelehrsamheit. Wir haben so viel zu lernen was andere gedacht, und endlich lernen wir selbst nichts, als *lernen*...Man verkürzet, zieht aus, erleichtert, und so wird unser captus natürlich so bleiben, wie man ihn haben wollte, die verkürzte Gestalt der Geister, von denen wir lernen.“ (IV. S. 59)。当時の美学研究の状況についても大きな不満をいだき、„...doch was träume ich von einer solchen Philosophie des Schönen in unsrer Zeit? in unsrer Zeit? wo nichts verworrener geliefert wird, als Lehrbücher der schönen Wissenschaften und Künste.“ (IV. S.127) といい、他の箇所では、„Nichts als ein Chaos von Kapiteln, Definitionen und Worten, und also kein einziger wahrer ursprünglicher Begriff der Aesthetik im ganzen Buche.“ (IV. S. 61) と極言している。ハルダーの反啓蒙的態度を示す最も鋭い評言は恐らく次の箇所であろう。„Und denn eigentlich unsere Journalisten? Unsere deutsche Bibliothekare? Sie mischen Himmel in Erde und Erde in Himmel. Sie werfen mit Kunstausdrücken umher, wie die Menschen-ähnlichen Künstler in Afrika, die durch ihre Nachäffung alles dessen, was sie sehen, so berühmt sind, wie diese in ihrem Hermonischen Affengesange mit Sand und Nußschalen. Sie tadeln, was sie nicht verstehen, und reden, wo sie nichts von wissen, dogmatisiren in Metaphern und metaphorisiren in Ausdrücken.“——それからクロッツ（既出）に批判が向けられる。„Ein Klotz schreibt

ganze Bücher von Künsten, wo der Künstler, wie Angelo sagen würde: meine Magd hätte sich besser darüber erklärt!"（IV. S. 128）。ヘルダーにとつては、合理主義的な思惟は、それ自身の根拠を失つている概念を以て奇術を行うこと以外の何ものでもない。しかもこの《暗記》について „Sein Urtheil〔ist〕eine Versicherung voriger Jahre über die er weiter nicht dachte." と書く場合、啓蒙主義を独自の方法で特徴づける。ここに合理主義の積極的および消極的な両面があらわれている。ヘルダーがたえず論難した啓蒙的人間は、以前の思惟成果によつて自分の世界の保全を計つたのである。しかし勿論、このような保全はまた、ドイツ語の言語領域に於てヴィーラントと共に頂点に達したところの、卓れた社交能力でもあつたということができる。たしかにかかる社会性は、あらゆる天才的奇行やあらゆる激情的狂乱から共同体を護つたのであるが、しかし周知のごとく、あまりにも烈しい天才主義的情熱のためにドイツは痛烈に震憾されることとなつたのである。けだし、確乎と大地をふまえ新しい地盤の上で身を安定させるというわざは、ゲーテのようには必ずしもすべての人々に与えられてはいなかつたからである。だからといつて啓蒙人たちは自らの世界を断えず新たに確保すべき任務を解かれたとは信じていなかつた。それ故彼等は依然として法律、規則、規範に従つて生きた。が、それらの根拠と起源とは彼等の知るところではなかつたのである。ヘルダーはそれについて „Ihr seid in dem Augenblick nicht in dem inneren Lichte"（IV. S. 58）という。この „inneres Licht" の缺乏はとりもなおさず彼にとつて „todte Ordnung", „todte Metaphysik" を意味し、その安全性の中で人間は倦怠を覚える。万事は初めからすでに在来の規範に従つて認められているのであるから、これから発見せらるべき世界はもはや存在しないのである。尤もどんな概念的な世界理解でもつまるところはひとつの „philosophische Grammatik" に行きつくのであるが、しかしこの「哲学の文法」は、その根拠と起源とが未だ開かれており、かつ思惟が生の根底から断ち切られていないところでのみ有効である。まさしく精神の明るさと魂の温さとをつなぐものは „inneres Licht" にほかならないのである。

重ねていおう。啓蒙的な自己保全から生ずる倦怠を破り、一切の存在の根拠を新たに確認し生存の源流に浸るために決行されたのが、かの航海旅行だつたのである。„...alles giebt dem Gedanken Flügel und Bewegung und weiten Luftkreis! Das flatternde Segel, das immer wankende Schiff, der rauschende Wellenstrom, die fliegende Wolke, der weite unendliche Luftkreis! Auf der Erde ist man an einen todten Punkt angeheftet; und in den engen Kreis einer Situation eingeschlossen. Oft ist jener der Studierstyl in einer dumpfen Kammer, der Sitz an einem einförmigen, gemietheten Tische, eine Kanzel, ein Katheder——oft ist diese eine kleine Stadt, ein Abgott von Publikum aus Dreien, auf die man horchet, und ein Einerlei von Beschäftigung, in welche uns Gewohnheit und Anmaßung

stoßen. Wie klein und eingeschränkt wird da das Leben, Ehre, Achtung, Wunsch, Furcht, Haß, Abneigung, Liebe, Freundschaft, Lust zu lernen, Beschäftigung, Neigung——wie enge und eingeschränkt endlich der ganze Geist. Nun trete man mit Einmal heraus, oder vielmehr ohne Bücher, Schriften, Beschäftigung und Homogene Gesellschaft werde man herausgeworfen——welch eine andere Aussicht! Wo ist das feste Land, auf dem ich so veste stand? und die kleine Kanzel und der Lehrstul und das Katheder, worauf ich mich brüstete? wo sind sie, für denen ich mich fürchtete, und die ich liebte!——0 Seele, wie wird dirs seyn, wenn du aus dieser Welt hinaustrittst? Der enge, veste, eingeschränkte Mittelpunkt ist verschwunden, du flatterst in den Lüften, oder schwimmst auf einem Meere——die Welt verschwindet dir——ist unter dir verschwunden! Welch neue Denkart! aber sie kostet Tränen, Reue, Herauswindung aus dem Alten, Selbstverdammung!—" (IV. S. 348 f.)。これは世界や生活を或る定まつた観点に従つてのみ見る固定的な立場から投出されたひとの言葉である。ルターは息苦しい部屋、説教壇もしくは講壇であろうと、単調な仕事もしくは同質的社会であろうと、もはや個々の固定した対象に停着することができない。いまや彼は個別的なものにとどまることを欲しないのである。„Ich gefiel mir nicht, als Gesellschafter,…ich gefiel mir nicht als Schullehrer,…ich gefiel mir nicht als Bürger,…

Am wenigsten endlich als Autor…"(IV. S. 345)。いうまでもなく、古く馴染んだ世界からのかかる脱出は、いわば自己譴責、落涙、後悔を意味する。これらの文章には直接パーマンの《Bekehrung》を想起させるものがある。さらにルターは書きつづける。

„Auf mich selbst…machte der Flug eines Vogels und der Blitzstrahl des Gewässers und der stille Mond des Abends andere Eindrücke als sie zu Lande gemacht hatten, und nun auf einen Seefahrer, der unkundig der See, vielleicht als ein Vertriebner seines Vaterlandes, als ein Jüngling, der seinen Vater erschlagen, ein fremdes Land suchte. (IV. S. 357)。親密な世界から投出された人間は、いわば《無》の前に立つているのであり、この《無》を介して新しい世界を透視することができるのである。しかしルターにあつては、一切は先ず未だ要求であり、プログラムである。それはまさしく Sturm und Drang のファウスト的生の感情にはかならない。《旅日記》には „gotisch" ということばが屢々見出されるが、啓蒙主義はこのことばを《中世的・古代フランケン的・野蛮的》という意味に於て使用した。啓蒙家の眼には、ゴシック寺院の様式は《錯雑・誇張》と映り、彼等はこれをギリシャ寺院の《高貴なる単純》の対蹠とみなしていた。すでにパーマンは《das Alte Bund》の世界に左袒し、これをより根源的な、より啓示にみちた世界として、啓蒙主義の讃美した古典時代を駁撃したのであつたが、いまやルターにとつては、ゴシック的なるものは広漠ないし渺茫たるものとなつた。それはまた《巨大・強力・暗黒》なるものとして、もはや軽蔑すべきも

のでなく、彼が魂の内奥に於て感知したところの、無限に交錯し怒濤のごとく押寄せる巨人的志向を表現するものとなつた。かかるファウスト的生の感情は《旅日記》の各所に胎動しており、特に文化哲学的な試案が語られるとき歴然と現れる。„Welch ein Werk über das Menschliche Geschlecht! den Menschlichen Geist! die Cultur der Erde! alle Räume! Zeiten! Völker! Kräfte! Mischungen! Gestalten!...Großes Thema; das Menschengeschlecht wird nicht vergehen, bis daß es alles geschehe! Bis der Genius der Erleuchtung die Erde durchzogen! Universalgeschichte der Bildung der Welt!“ (IV. S. 353)。ヘーゲルの《精神現象学》(Phänomenologie des Geistes 1806) の中では、意識が弁証法的過程をとつて最後の段階に於て絶対精神に到達し、まさしく冒瀆的に神となつたとすれば、ヘルダーの如上の言葉は、魂は生成の中で絶対精神に到達するであろう、ということを意味する。ここでヘルダーはかかる発展の結果を予言者的に先取し、そこへの進行を要求しているのである。この切なる要求は、字間をあけた多くの単語（註。本稿では Sperren しなかつた）、夥しい感嘆符やダッシュをもつ《旅日記》の全文体の中に窺われる。ヘルダーは、本来の意味に於て、何という無際限の人間たることか！《人類教化の世界史》——この計画をよむと、ひとは必ずや眩暈をもよおすだろう。彼みずから眩めき波浪逆まく無涯のはるか彼方を眺めながら、彼をフランスに運びゆく船の上に立つていたのである。時代はかかる広大な景観を好んだ。ライプニッツは単子 (Monade) の無限なる上昇的発展を夢み、レッシングは輪廻 (Seelenwanderung) の仮設に援助を求め、かかる発展のために必要な時を準備した。しかしかような啓蒙時代の最も大胆な空想も、極度に常軌を逸した若きヘルダーの幻想に比すれば、何たる平凡さであろう！かかる無限なるものの幻影に直面しながら、しかも有限なるものにかかわりあうためには、無限なるものの punktuell な点火が必要である。なぜなら無限なるものは Sukzession (継続) に於ては結局呈示されえないからである。ヘルダーの文体はまさしく das punktuelle Zünden des Unendlichen の現れとみることができる。それ故ダッシュや不完全な文章の意味するものは、些かも不可能性に対する断念ではなくて、むしろ極度に気負つた確信である。《旅日記》の表現はすべて《未来》にかかわるものである。先ず要求 (Anspruch) が厳存する。それは未だ《充実せる現在》、《古典的瞬間》から遠く隔つている。それはいわば Geist が Seele の解き放たれた奔流を阻止せんとする際に用いる最初の鉤である。ここにヘルダーの全労作を解く鍵が、すなわち魂の中から出現し不断に生成してやまぬ彼の世界——ドイツ民族にとつては疾くに伝統となつてしまつている世界——の精神的地平が見出されるのである。

啓蒙主義的硬直の真只中から全く新しい生感情と世界感情とが突発する趣きは、ドイツ精神史上最も大規模なもののひとつである。ニュートンにとつては世界は機械的体系 (mechanisches System) であつたが、ヘルダーにとつては世界は感情を通して直接彼にうちとける生きた自然 (lebendige Natur) である。人間の根底は感覚、

感情であつて、判断や理性の推理ではない。判断や推理といつたものは感覚にもとづいており、これを単に変容することができるにすぎない（IV. S. 7）。「一切の中に感入せよ」（Fühle dich in alles hinein! IV. S. 530）とはヘルダーの根本的な要求を意味する。このようにヘルダーは感情や魂の言葉の中に生存の根拠と起源とを知覚せんがために、規範通りに固着した世界に反抗したのである。魂について、„du flatterst in den Lüften...schwimmst auf einem Meere.“ といわれ、或いは極めて簡単に、„Das flatternde Segel, das immer wankende Schiff, der rauschende Wellenstrom, die fliegende Wolke, der weite unendliche Luftkreis!“（IV. S. 345）と描写される。ここには明かに対象的世界の一切の固定せる外囲線を拭い消そうとするヘルダーの努力がみられる。あらゆる固定的なものは分詞形容詞の中で発散し溶解される。もはや船や帆などは対象として表象されないで、一切のものとひとつである魂の奔流だけをさきとろうとする。従つて話題になつているのは《外界》（Außenwelt）なのか、それとも《感情》（Gefühl）なのかは、もはや区別することができない。魂は世界の中にあり、世界は魂の中にある。このような状態性は、或る対象化された世界の中でその世界の根源を問わしめるものにほかならない。

しかしながら、奔流は永遠に厳石に激突してばかりいるのではなく、その激しい狂奔から休息するために平らかな河床を必要とする。ヘルダーの無限なる魂の奔流には深刻な悲劇性がまといついているのである。それは彼よりはるかに渾一的で自然に近い逞しさをそなえたハーマンの与り知らなかつた悲劇性である。リーガーではヘルダーは最も人気ある説教師であつたにもかかわらず、同時に彼の説教についての蔭口もきかれた。「説教は終りごろには味気ない気の抜けたものになつてしまう」と。この評言は恐らく彼の著作の大部分にもあてはまるのではなかろうか。彼はただに《北方の魔仙》のごとく神秘的な英知の伝達者たらんことを欲したばかりでなく、著述に於て彼の啓示を同時に科学として与えんと欲したのである。ところで科学とは、素材、経験ならびに思想や着想を論理的に培養育成し、限界づけ、秩序づけることの謂である。またすべての創作家はあたかも、三次元の現実を二次元の平面の上に投射し、その投影像を視点に従つて按配し技巧的な構図をつくるところの製図者に似ている。ヘルダーは彼の掻き集めた莫大な素材を果してどのように制限しようとするのであろうか。彼に押寄せてきたような圧倒的な思想は、いかに秩序づけられるであろうか。受容、理解、解釈の能才たるヘルダーの巨大な精神といえども、かかる広大無涯の領域の前では無力であり、目的に達しないうちに崩壊せざるをえなかつたようにみえる。彼の労作の大多数はすべて断片——くしくも処女出版書の題名は《新ドイツ文学評論断篇》（既出）というのであつた——の印象を与える、たとい外面的には完結せるごとくみえようとも。彼はそのことを感じ、屢々新たに計画や試案の決定的改作を試みたのである。さらに彼の研究にはたえず思いつきのようなものや概観的なものが附着している。彼は終生これを越えることはできなかつた。彼はドイツ精神史における最大の策励者として、ドイ

ツ文学および文化史のゆたかな認識をみのらせ、彼の打鳴らした晨鼓は多方向にひびきわたつたのである。にもかかわず、彼の概念にして科学的試錬に堪え、明確な事実を表現するようなものは殆ど存在しないのではないかとさえ思われる。ここに彼の悲劇性がある。

彼のかかる悲劇性は必ずしも知的活動の面に於てのみあらわれたのではない。むしろ彼の生涯はその性格のために苦汁にみちたものとなつた。彼の生活における疲憊は常に時機尚早の観があつた。青年時代に全世界を抱懐せんと欲した人間が、終に失意の気むずかしい不平家となり果てる。最も快的とみえた境遇でさえ、彼には冷やかさ、よそよそしさに、いなむしろ敵対的なものに変じていつた。彼は願望としては恐らく、人々を彼の存在でみたし、自身を彼等の存在でみたそうとしたにちがいない。が、事実はいつもただ自己を失う限界と危険とを感じたにすぎない。それ故、他者に浸透しそれを享受することに於て、自我に浸透しこれを享受するという使命を与えられていた彼が、気むずかしや、批判家となり他人の業績の誹謗家となり終つたのである。ヘルダーを他の何びとよりもよく知り愛しかつ尊敬していたゲーテは既に青年時代に於て、ヘルダーのこのような性質もしくは無躾に悩まされていたのであつた。この消息は第二章で述べたように、《詩と真実》の第十章に於て窺うことができる。ゲーテはヘルダーの排斥性や反対癖のために何度となく嫌なめを見なければならなかつた。「ヘルダーは機嫌のよいときには比類のないほど愛想がよく、その話すことには天才的な巧さがあつたが、不機嫌になると反対の結果が同じ程度に著しく出た。」しかしゲーテは、「こうした索引性と排斥性とは、すべての人間がその天性に応じて或いは多く、或いは少く、或いは緩漫な、或いは急激な脈搏としてもつており、この発作を通じて自分の性状を暴露するのが常で、それを実際に抑制しうるものは極めて少く、大概は単に抑制したとみえるだけである」といい、「ヘルダーの反対好きな、辛辣な、咬みつくような気分が優勢になりがちだつたのは、彼の天性からよりも、その病気と、それに伴つた苦痛からでてくるのであつた」と、頗る同情ある弁明をしながらも、「私の中には一方に於て彼に対する強い愛好と尊敬があり、他方には彼の時々の反対癖によつて起される忌々しさがあつて、このふたつはたえずせめぎ合つていたから、遂には私の中に自己分裂が生じ、この分裂はその特殊な性質上からいうと、私の生涯では一番最初に現れたものであつた」と告白せざるをえなかつた。そしてゲーテは「自分の中に深い根を張り、段々と詩の形になつて生育しかけていた」或る種の題材に関する異常な興味を、ヘルダーの前では最も用心深く隠すことに慣れてしまつた。それは《Götz von Berlichingen》と《Faust》のことである。ゲーテがこのような形象が内心に生じつつあることを、ほかならぬヘルダーに知らしめなかつたということは、十分悲劇的といつてよいであろう。その後ヘルダーはゲーテの仲間と美しい友交関係にあつたあいだでも、たえず自ら求めて彼自身と他人とに不快な思いをさせた（《詩と真実》一〇章。本稿第二章 Straßburg 時代参照）。それ故さすがのゲーテも、ヘルダーのかような性癖は「青年時代から必然に尾を曳いた或る種の不満がはたらいていたからで、彼は

後々までも、自分の精神力でそれを緩和することができなかつたのである」（同上、一〇章）と評するに至つた。ヘルダーはどんな境遇にあつても幸福を感じることができず、自分の仕事に対しても決して満足することを知らなかつた。かかる個人的弱点は終生彼につきまとい「絶望しながら墓の中へ入つた行つた」（ゲーテ）のであるが、他面このような性格が却つてあのような尨大な著作をなさしめたともいいうるのであつて、個人生活における短所のゆえにその偉大な業績を軽視してはならないのである。

二

《根源》（Ursprung）への探求はヘルダーを駆つて Shakespeare へ、Ossian へ、往古の民謡へ、ギリシャやエジプトへ向わせ、《人類の最古の文書》という記録をつくらしめた。勿論かかる根源はハーマンによつてすでに指向されていたが、しかし根源思想が思想史的に生産的なものとなるためにはヘルダーを俟たねばならなかつた。ヘルダーはゲーテ時代（die Goethezeit）の本来的な振励者であり、かつ現代がなおゲーテ時代に感謝をささげることを知るかぎり、現代の創始者でもある。

ビュッケブルク在住時のヘルダーの労作は、その激しさとともに思想の広汎な変化を反映している。彼は新しい重心を探し求めていたが、それを見出すことは長期にわたる困難な企てであつた。かの航海旅行はわずかにその企ての端緒というべく、それはただ腹案を熱せしめたにすぎず、実行はまだ後日をまたねばならなかつた。しかるにヘルダーは常に、抑制することを知らず、多くを言わんとする衝動にかられた。あたかも予言者のごとく、みずからの使命を果さねばならぬという信念に燃えていたからである。ビュッケブルク時代の著述にみられる激越、支離滅裂および闘争的傾向はすべてこれに基因する。Ossian や Shakespeare に関する論文は、彼の内面的激動のあらゆる徴表をになつている。形式的な効果は全然顧慮されていないかのように、彼の思想は過剰に放出された。普通の読者にはその奔流に歩調をあわせることはむずかしいように思われる。ここにもみられる夥しいプンクトやコンマはさながら異物の奇怪な侵入のごとき印象を与える。しかしこれは《旅日記》の場合のように、内面の直接的な露呈とみることができるであろう。従つてここに於てもまた、われわれはヘルダーの帯電的な事物把握のゆたかさに触れるのである。ヘルダーは Ossian と Shakespeare との繙読によつて、近代文学の最も勢力ある運動、すなわち民衆文学——Volksdichtung, Volkslied, Volkspoesie——の高揚を躁急に招来せしたのであつた。

James Macpherson(1736〜96)によるオシアン詩は初めて三巻をなして刊行された。すなわち、《Fragments of ancient Poetry》(1760)、《Fingal》(1762) および《Temora》(1763) がそれである。この中最初の十五篇の詩は、三世紀に在世した Fingal の息子たるバルデ（Barde, 古代ケルト弾唱詩人）Ossian のゲール語原典から翻訳されたものと称せられていた（しかしこれがマクファース

ンの改作たることは後に判明した)。有名な Dr. Hugh Blair 著《オシアン批判》(Criticial Dissertation on the poems of Ossian)は一七六三年に現れた。この時機は、イギリスに於てもドイツに於てもオシアンの出現にとつて極めて好都合であつた。ボートマー(Johann Jakob Bodmer 1698〜1783)がこの頃発見された《ニーベルンゲンの歌》(Nibelungenlied)の写本の第二部を刊行(1757)したこと、クロプシュトックが祖国の英雄や文学の位置を高めようとして、ギリシャ神話とゲルマン神話とを同一視したばかりでなく、ケルト民族の文化的伝統とゲルマン民族のそれを混淆し、ケルトの詩人階級バルデをドイツ詩人のごとく取扱つたこと、さらにマレー(Paul Henri Mallet 1730〜1807)が自著《デンマーク史入門》(Introduction à L'histoire de Dannemarc 1755, 1766)の附録として《Edda》の見本的抜萃を印刷に付したこと、およびそれにつづいて北方の研究がひろく流布されるに至つたこと。これら一連の現象はドイツの過去に対する讃美、ドイツ文学における祖国的感情の端緒となり、オシアンの出現に対して特に好都合な雰囲気を醸成していたのである。なおこれと並んで他の要因も存在していた。文学は憂欝な思い煩いや陰気な気分をたのしむ庶民性を帯び、人心は繊細な哀感や人倫を説く感傷主義に溺れており、かつE・クライストやゲスナー(Salomon Geßner 1730〜88)のような人々の牧歌的自然描写が嘆賞されると同時に、往古の文学とその推定された理想的人間性とに対する感受性はいよいよ増大しつつあつた。オシアンはかかる時好に投じたのである。ドイツ文学がすでに昼間の光に向つて歩みつつあつたとき、古代ケルト弾唱詩人からの光線はドイツ文学に少なからぬ恩沢を施しえた、と同時に、西欧的観察からすれば、これをかなり眩惑的かつ性急に前進せしめたことにもなるのである。バルデの陰霧ただよう景観の偉大さは、その英雄たちの勇敢さや汚れなき志操に対する印象ぶかい背景をなしており、超自然的なものは、いわば新しい国民神話を示唆するような形で表現されていた。もろもろの物語は素朴とパトスとにみちあふれ、それらの律動的な散文体は、旧約聖書の典型に従い Homer や Milton の面影を偲ばせて、極めて魅力的であつた。オシアンは十八世紀を弾劾する多くの性質をそなえていた。マクファースンのオシアンは最初は本物と思われていただけに、異常な権威をもつていたので、これらの性質は《自然への親近性》もしくは《古代性》と規定された。同時にオシアンは当時一般の好奇心をかきたてるだけ十分に異様なものだつたのである。

オシアンの抜萃はドイツではすでに一七六二年に現れはじめていた。その主要な翻訳はエンゲルブレヒト(Joh. Andreas Engelbrecht 1733〜1803)の《Fragmente》とヴィッテンベルク(Albrecht Wittenberg 1728〜1807)の《Fingal》とであつた。両者ともに一七六六年ハンブルク(Hamburg)で刊行され、イギリスの原本と同様、散文訳であつた。デーニスによるヘクサーメター(Hexameter 六律脚)稿態の中の初め二巻は一七六八年に、第三巻は一七六九年に発刊されたが、これは最初の完全なドイツ語訳であり、マクファースンの序文および註釈のほかに、以前にはただ抜萃しか

訳されていなかつたBlairの《Dissertation》を含んでいた。従来はただFingalと短い詩の十篇のみがドイツに知られていたにすぎなかつたので、それだけなおさらオシアンの卓越性について過大な表象が生じた。そして《マクファースンのオシアン》に対する疑惑は、ゲルステンベルク(H. W. v. Gerstenberg 1737～1823)が《文芸書簡》(Briefe über die Merkwürdigkeiten der Litteratur)に於て説いた以外は、全く真面目に考えられることはなかつたのである。

ヘルダーはただちにオシアンの魅力に服した。ハーマンは疾くにこの道を準備していたが、しかしヘルダーをバルデに導き入れたのはハーマンではなかつた。けだしハーマンはオシアンについては極めて稀にしか言及しておらず、一七六九年に初めてその一部を入手したのである。その間恐らく一七六五年であろう、すでに民衆文学に対する嗜好があらわれ始めていたヘルダーは、直接みずからオシアンに向つたと考えられる。リーガーを去るまでには彼は二つのハンブルクの翻訳とデーニスの第一巻とを知つていた。従つて彼はオシアンの半分だけに通じており、オシアン批評については不十分に知られていたにすぎない。《新ドイツ文学評論断篇》の中ですでに、彼は幾度となくバルデを引合いにだした。当時物議を醸したこのバルデの詩の真偽についての問題は、ヘルダーにとつて当初は全く副次的なことであつた。《批評の森》の中で、「これらの歌の本源的独創性はその感情に於て証明されている」(III. S. 27)というだけで彼には十分であつた。彼は過度にこの詩の魔力の下に伏していたので、それについて疑惑の生ずる余地はなかつた。後年ヴァイマルでオシアンの典拠や翻訳を精確に調べたとき、自分の経験した最初の感激を《人道書簡》(Briefe zur Beförderung der Humanität 1793～97)の中で回顧している。„Als man die Aechtheit der Gesänge anstritt, hinderte mich dieser Zwist nicht, der Stimme der Geister zu lauschen, die um Ossians Harfe schwebet,“ (XVIII. S. 464)。フランスではDiderot, TurgotおよびSuardによる翻訳や批評をよんだ。これらはみなマクファースンの示したバルデの詩を根源的な自然状態の描写とみなしていた。次いで、オイティン(Eutin)への航海中にオランダ海岸の近くで船が坐礁した。オシアンをよみながら、風雨の夜を「海水に洗われ、夜半の風に吹きまくられて」(mit Meer bespült, und mit Mitternachtwind umschauert; V. S. 169)船縁で過さねばならなかつたとき、オシアンが感応しやすいヘルダーの心に与えた印象は実に名状しがたいものがあつたに相違ない。彼はFingalを厳粛な雰囲気の中でよみ、比類なき感動におそわれた。ヘルダーの独自な感情にはすでに何か醗酵をうながすものがあり、しかもバルデについては不完全かつ間接的な知識しかなかつたのであるから、この場合彼の感動は、いわばオシアンの理想化された表象によるものであつた、ということができる。いかにヘルダーは天翔ける想像力によつてたえず現実の代りに陰影を見たことか！ いかにすべての印象は彼の精神の中でゴシック的なひろがりを受容したことか！ ヘルダー自身これを説明している。航海中に彼の従来の観方や計画が変革されるとともに、彼は《自然への復帰》を体得するに至つた。このことによつてオシアンは、《

世界史》および《往古の文学》の研究に於て重要な地位を占めたのである。疑いもなくオシアンの感情はヘルダー自身の感情と一致しており、そして強烈な文学的ないし歴史的な魅力をもつオシアンについての彼の表象は、高度に浪慢化され、神秘性、不測性、不可解性の息吹にみたされていたのである。なお後年、《ホーレン》（Horen; Schiller の発行した雑誌）への寄稿論文《Homer und Ossian》や一八〇三年《Adrastea》の中でも、ヘルダーは若き日にこの詩がよび起した恍惚と驚愕について語っている。

アムステルダムに於て、彼はデーニス訳の他の二巻を知った。これはたしかに相当役立ちはしたが、しかしまたそれに対し非常な失望を感ぜざるをえなかった。ともかくこれで彼はオシアンの全貌を知ることができたわけである。彼の考察の出発点をなすものはデーニスの翻訳であった。彼はついにイギリスの原本も、その他、デーニスの翻訳以外のテキストも入手できなかったのである。しかも彼の意見によれば、デーニスの翻訳は完全に失敗作なのである。„Hätte der Herr D. die eigentliche Manier Ossians nur etwas auch mit dem innern Ohr überlegt.“（V. S. 160）という言葉は、オシアンの内面の声をききとる繊細な耳をもつものは自分のほかにないことを言外に託するものであろう。ヘルダーはデーニスが非ドイツ的なヘクサーメターを用いてバルデをホメール化したことを非難し、さらにスカルデ（Skalde 古代スカンヂナヴィアの歌人）の詩節や詩句の構造およびクロプシュトック流の自由韻律を研究しなければならぬ、と翻訳者に要求する。詩の翻訳にあたってはその本質的なもの、音調を逸してはならない。単に意味内容（Sinngehalt）を移すだけでないオシアンのような詩人は「内的感覚」（die innere Empfindung）を模写するには、「外的なもの、感能的なもの」（das Äußere, das Sinnliche）を、「形、ひびき、音調、旋律に於て」（in Form, Klang, Ton, Melodie）模写する。従ってここで明かになることは、《内的感覚》は、どこか内に存するのではなく外に存する——すなわち、音調、ひびきの中に、旋律の中にあるのである。それにもかかわらず、innere Empfindung は「暗くかつ不可測のもの」（das Dunkle, Unmeßbare）であり、「歌とともに奔流のごとくわれわれの魂の中に流れこむもの」（was uns mit dem Gesang stromweise in die Seele fließet; V. S 162 f.）なのである。けだし音調、ひびき、旋律はものを意味せず、ただ聞えるだけであるから。しかしながらこの innere Empfindung は単に各個人の魂の中ばかりでなく、各民族の魂の中にも流れるのである。ヘルダーは若きゲーテの心に、詩（Poesie）は「世界的または民族的の贈物」（eine Welt- und Völkergabe;《詩と真実》一〇章）であって、ギリシャ人の独占物でないゆえんを刻みつけた。特にクロッツに対する論難に於てヘルダーは、詩が単に好きな国民の尺度に従ってのみ批判されることの誤謬をくりかえし強調した。何となれば、詩の基準は詩人およびその時代の精神の中に存するからである。であるから、最大のギリシャ詩人ホメールは「彼の時代の生きた慣習から」（aus dem lebendigen Gebrauch）批判されるならば、彼があらゆる時代の詩人ではなく、「彼の世紀、彼の国民の最も幸運な頭

脳」(der glücklichste Kopf seines Jahrhunderts, seiner Nation; III. S. 199) 以上の何ものでもないことが判明するであろう。どの国民もみずからの魂から独自な国民的文学 (nationale Literatur) を産出することができる。かくしてヘルダーはドイツ人に対してもフランスやイギリスの典範から解放された独自の文学を要求する。しかるにヘルダーの思想はただちに国民的な視点を越えてゆくのである。ここにヘルダーの独異性がある。種々相異なる民族の文学を比較するならば、単に国民的独自性のみならず、さらになお詩そのものの本質や根源を解明することができるであろう。従つてヘルダーにとつては、オシアンはもはやギリシャ文学の後にはるか隔つているものではなく、むしろ直接ホメールと、さらにまたシェイクスピアと並立するものとなる。事実同じ文章の中でヘルダーはクロプシュトックや古代ヘブライ文学にも論及している。それ故、彼がみずからのオシアン翻訳の見本を《創造についてのモーゼの歌》(Mosaisches Lied von der Schöpfung) に関する論文に挿入することは何ら怪しむに足りないのである。

勿論カロリーネ・フラクスラントとの出会によつて生じたヘルダーの内心の激動が、オシアンとの共感を倍加したであろうことは容易に察せられるところである。彼はオシアンを屢々彼女宛の手紙の中で取扱い、この手紙にデーニスからの抜萃や彼みずからの手で修正した抜萃を附け加えた。シュトラースブルクにおけるゲーテとの出会やイギリス文学への傾倒——ヘルダーはこの時期に „immer britischer" になるといつた——は、ビュッケブルクで孤独と隠遁を経験する前のいわばひとつの幕間を意味した。彼は界隈の森林を散歩するときはいつもオシアンを一冊携えていたほど、これに心酔していた。苦痛をともなう憂鬱と鎮めようのない欲望とから醸しだされるかような気分の中で、ヘルダーは一七七一年の七月末から八月にかけて、彼自身の構想力によるひとつのオシアン像を眼前に泛べながら《オシアン論》を書いたのである。ところで、ヘルダーはこの年の十一月にやつとゲーテからイギリス版(ゲーテの父の所有)を借りることができたが、そのときはすでにその論稿は印刷に付されてしまつていた。従つて、彼は十一月以前にはオシアンの真の形式を知らなかつたのであるから、彼自身がオシアンの真の姿を歪めるものとみなしたところの翻訳本によつて自分の判断を形づくつたということになる。つまり彼のオシアン像は、往古の文学についての彼の知識から——より穿つた見方をすれば——臆測による気随な知識から、概括的に組立てられたのである。かくして Sturm und Drang の《自然性》讃仰は、極度に不確実な前提に基づくひとつの浪慢化された表象から生じた。ヘルダーは古典古代の権威に挑むためにオシアンを利用した。彼は初め、クロプシュトックのように、ケルト人とスカンヂナヴィア人とを混同することによつて、オシアンをエッダと一緒くたにしていた。尤もケルト人に関する歴史的事実は常に考慮されていたのではあるが。このことは、詩は普遍的な賜物であつて特定民族の独占物ではない、という彼の主張を裏書きする例証である。しかし同時に彼は、オシアンの風変りな異種性によつて国民的特性に視線を転ずることを余儀なくされ、やがて詩

をこの視点から性格づけ始めた。彼がオシアンの権威を揚言するゆえんのものは、文学の本来の対象をなすものは Handlung（事件の進行）であつて Beschreibung（叙述）ではない、というレッシングの――専らホメールに依拠した――理論に対抗するためでもあつた。オシアンが名声を博したのは、古えの文学一般の特質とみなされる諸徳性をそなえていたからである。されば、オシアンはほかならぬこれらの特質を支持するために呪出されたものというべきである。《Naturdichtung》（自然文学）と《Kunstdichtung》（技巧文学）との著名な対立は、ただちにヘルダーの批評活動の主要題目となつた。《オシアン論》はそれを展開しかつ深化したものである。にもかかわらず、オシアンがヘルダーの詩論と民謡に対する興味との本来の出所であつた、ということは行き過ぎであろう。詩論と民謡に対する興味との基礎はすでに初期の著作の中に明白にあらわれており、ヘルダー自身この点を縷々力説している。また彼の妻の《Erinnerungen》では、彼を Volksdichtung に熱中せしめた原因は聖書であると説明している。その他彼はラトヴィアの民謡（lettische Volkslieder）にも通じていた。彼は航海後に書いている――„Aber auch das（註：＝難船のこと）ist noch nicht eigentlich Genesis des Enthusiasmus, über welchen Sie mir Vorwürfe machen; denn sonst wäre er vielleicht nichts als individuelles Blendwerk, ein bloßes Meergespenst. Wissen Sie also, daß ich selbst Gelegenheit gehabt, lebendige Reste dieses alten, wilden Gesanges, Rhythmus, Tanzes unter lebenden Völker zu sehen, denen unsre Sitten noch nicht völlig Sprache und Lieder und Gebräuche haben nehmen können, um ihnen dafür etwas sehr Verstümmeltes oder nichts zu geben.“（V. S. 169 f）。ヘルダーがバルデに強い関心を示し詩論を展開するに至るまでにこのような事実のあつたことを看過してはならない。オシアンは、ここに於て或る観点を強固にし、かしこに於て或る新しい観点を提示しつつ、すでに発生しかけているもろもろの見解を助成し、かつ明確にしたのである。名状すべからざる奇怪な刺戟がオシアンから発し、オシアンは一時、往古の詩人の原型と化した。ほかならぬオシアンの曖昧模糊たる性質がひとびとに魅惑的と感ぜられた。尤も、そのような不慥さはヘルダーの批判的方法の適用と矛盾したにちがいない。けだし、オシアンの時代については全然知られてはいないも同然であり、詩そのものがあらゆる具体的な事実に缺けていたので、ヘルダーはオシアンをその時代の諸条件の下で解釈することができなかつたはずだからである。

オシアンをパーシイ（既出）の《イギリス古代詩文拾遺》と関連させることはヘルダーには当然のことであつた。この Reliques はラスペの紹介によつてはやくも一七六五年ドイツの一般読書界に知られていた。しかし Reliques がヘルダーの仕事に於て役割を演じ始めたのは、彼が一七七一年八月ビュッケブルク到著後にラスペからそれを借用した後のことであつた（*vgl.* Briefe an Raspe 31. Mai 1771 und 25. August 1772; Düntzer C, III, S, 286）。その間、ヘルダーはフランスでパーシイの論文の抜萃をよみ、大いに興味をそ

そられた。Reliques を入手した直後に書きおろされた《オシアン論》は部分的に Reliques の面影をとどめている。ヘルダーのオシアン評価はいうまでもなく Volksdichtung の擁護のために、ひいては自国民の民謡を発掘せしめるべくドイツのために打鳴らされた晨鼓にたとえられるであろう。

オシアンに対するヘルダーの異常な熱意は凡そ直接的には二つの原因に帰することができる。一つは、オシアンの真偽についての囂々たる議論に対してゲルステンベルクの示した軟弱な態度に飽き足らなかつたからであり、他は、デーニス翻訳本のヘクサーメター稿態に対して大きな失望を感じていたからである。ヘルダーは詩人の原初的かつ非叙事的な精神が傷つけられるのを黙視することができなかつたのである。デーニスの翻訳に対するヘルダーの論評は善意の訳者を完膚なきまでに打ちのめした。オシアンは叙事的であるよりは抒情的であるという見方がヘルダーに於て強化されたのは、臨機に諸断篇を結合してより大きな統一体にした、というマクファスンの緒言における若干の漠然とした暗示によるところが多いと思われる。すでに早くから叙事詩的なものの抒情詩的根源をあらゆる詩歌の発端として信じていたヘルダーは、もはや疑う余地がなかつた。パーシイの Reliques を入手したとき、すべての蔭影は追払われた。一切はいまや《Volkslied》もしくは《Nationallied》となつた。《創世紀》における天地創造史についてさえ、それが太古の単純素朴な民衆の歌から発生したものと説かれた。ヘルダーはその中から個々の譚詩を分けだした。すなわち《Von der Schöpfung der Welt》，《Vom Sabbat》および《Vom Verderben der Welt》がそれである。これらを、パーシイの民謡もしくはオシアンの（臆測上の）抒情的根源と血縁関係にあるヘブライ人たちの詩的なロマンツェ（Romanze）である、とみなした。彼は自分の思想に深く捉えられていたので、これらの根源的なヘブライ譚詩を、彼が特徴的な民謡形式一般とみなしたところの形式、すなわち Chevyjagd-Strophe（註。Chevy とはイギリス民謡《Chevy Chase》に歌われた地名）に書きなおしさえしたのである。それ故、彼が《Edward》や《Brudermord Kains》については一気呵成に語ることができたのは当然のことといわねばならない。マクファースンもしくはその他のひとびとがどのような説をなそうとも、ヘルダーにとつては、オシアンは真に抒情詩であり、Lied であり、無意識の創造精神によつて告知される自然の自発物である。„Aber das（註。episch を意味する）ist er nun nicht, und sehen Sie, das wollte ich Ihnen nur sagen, von jenem（註。Ossian in Hexametern を意味する）hat schon, wie mich dünkt, eine Kritische Bibliothek geredet, und das geht mich nichts an. Ihnen wollte ich nur in Erinnerung bringen, daß Ossians Gedichte Lieder, Lieder des Volks, Lieder eines ungebildeten sinnlichen Volks sind, die sich so lange im Munde der väterlichen Tradition haben fortsingen können— sind sie das in unsrer schönen epischen Gestalt gewesen? haben sies sein können?“（V. S. 160）。

かくしてヘルダーは詩の自発的な起源に関する説を展開するに至

つたのである。オシアンのみならず、パーシイ、シェイクスピア、ラプラント人の歌謡、エキスモーの哀歌、童謡およびギリシャ人までも、その主張を確固たらしめるために引寄せられた。これらのものの特徴は、敢為奔放と飛躍動揺、生々しさと庶民的様式のゆたかな形象とである。これらの性質は、《技巧》によつて《自然》が追放されてしまう前に見出されるものであり、これこそ詩の性質にほかならない。ヘルダーは、ドイツ文学にかかる性質の缺けていることを発見した。まことに、素朴性と直接性、民謡のもつ自然的豁達性が取戻され修復され形成されないうちは、ドイツ文学の救済はどこからも到来しなかつた。他の時代や場所に身を移して考えるという驚くべき才能とともに、かかる特性はヘルダーに於て極めて顕著だつたので、彼はオシアンの考察にあたつて、オシアンそのものよりもはるかにオシアン的であり、ケルト人よりもはるかにケルト的だつた、ということができるのである。

すでにハーマンにとつてそうであつたように、ヘルダーにとつてもクロプシュトックの頌詩(Oden)は原始的な調べをひびかせているドイツ語である。すでに《断篇》に於て、そのリズムに感動している。„Bei dem ersten Anblick sogleich schien er（註:＝der Rhythmus der Klopstockischen Oden) mir sehr ähnlich zu seyn mit dem Numerus der Hebräer, so viel wir von ihm wissen, und mit dem Silbenmaß der Barden…Ich wüßte nicht, ob diese neue glückliche Versart nicht eher die natürlichste und ursprünglichste Poesie genannt werden könnte.“ (I. S. 208)。頌詩の魔力に魅せられた彼は „Ode! sie wird wieder, was sie war! Gefühl ganzer Situation des Lebens“ (V. S. 206) と叫ぶ。いうまでもなく彼は頌詩を単なる伝統的な詩学の一ジャンルとはみず、生粋の抒情詩、すなわち心臓の声、内的感覚の描写、魂の言語と考える。かような頌詩の本質から得た詩の発見は、ダルムシュタットの社交界に、中んずく彼の許婚カロリーネ・フラクスラントに、かつまた、シュトラースブルクの友人たちに測るべからざる影響を及ぼしたのである。ここでは彼は、吃驚しながらも彼の新しい哲学に耳を欹てるひとびとを見出した。その最も注意ぶかい聴き手は若きゲーテであつた。ヘルダーの新奇な言説に魅せられたゲーテは、病室におけるヘルダーの度重なる気むずかしさの発作にも容易に堪えることができた。《詩と真実》に於て „Ich verschlang das alles…“（既出）と書く場合、ゲーテはヘルダーの若き世代に対する異常な意義をみとめているのである。「人間の心臓の対話」(Gespräch Menschlichen Herzens) は古い民謡の中でもきさとることができる。すでにケーニヒスベルク時代に、ヘルダーは《抒情的歌謡の歴史》(Geschichte des lyrischen Gesanges) を書くためにこれらの歌謡の蒐集を考えたが、しかし当時では未だ計画の域にとどまつた。《Lieder, Lieder des Volkes, Lieder eines ungebildeten sinnlichen Volkes》（既出）たるオシアンの歌は、あらためて彼をこの計画に向かわしめたのである。„Nur wer ist der sie sammle? der sich um sie bekümmre? sich um Lieder des Volkes bekümmre? auf Straßen und Gassen und Fischmärkten? im ungelehrten Rundge-

sange des Landvolks? um Lieder, die oft nicht skandirt, und oft schlecht gereimt sind? wer wollte sie sammeln——wer für unsre Kritiker, der ja so gut Sylben zählen, und skandiren können, drucken lassen?“（V, S, 189）。民謡はあらゆる人間の自由に委ねられたままであり、それらはただ集められねばならなかつたのである。ヘルダーは勿論、当時の学者が自然の声をききとるために未開の民の歌謡を集めることの必要をみとめる、とは毫も信じていない。なぜならそのようなことは学者の関心事とは遠く隔つていたからである。„In fremden Sprachen quälte man sich von Jugend auf Quantitäten von Sylben kennen zu lernen, die uns nicht mehr Ohr und Natur zu fühlen gibt; nach Regeln zu arbeiten, deren wenigste, ein Genie, als Naturregeln anerkennt; über Gegenstände zu dichten, über die sich nichts denken, noch weniger sinnen, noch weniger imaginiren läßt; Leidenschaften zu erkünsteln, die wir nicht haben, Seelenkräfte nachzuahmen, die wir nicht besitzen——und endlich wurde Alles Falschheit, Schwäche und Künstelei.“（V. S. 182 f.）。あらゆる作為、不自然、虚飾を嫌悪したヘルダーが民謡の蒐集を企てるに至つたのは、ドイツ文学に自己発見と自覚をうながすためであつた。民族の慣習、感情、興味を表現している過去の歌謡は未来の基礎となるべきであつて、現今もはや通用しないギリシャやローマの典拠と考えられてはならなかつた。他国の文学は順調に成長しえたのであるが、ドイツ文学の道は、《Von Ähnlichkeit der mittlern englischen und deutschen Dichtkunst》（1776）の中で述べているように、ルネサーンスが導入した外国の影響によつて遮断されていたのであつた。これを救う唯一の方策は、ヘルダーが屢々表明したように、民族的伝統が断絶したところで繋ぐこと、すなわち中世文学に立ち帰ることであつた。伝えられた中世の伝統は、いわばひとつの連鎖としての民謡の中に生きつづけていたのである。

ヘルダーは民謡の蒐集について友人たちに熱心な助力を乞うた。彼に多くの材料を提供したゲーテの内にドイツ抒情詩の最も美しい花が咲きそめるというようなことは、多少とも衒学的なヘルダーには全然予感できなかつた。ひとつの類概念を立てることは、民謡に於ても彼のよくなしうるところではない。民謡が忘れられないように彼はそれを蒐集するのであり、むしろ歌謡の中に根源的な詩をききとることに彼の本領があつたのである。しかしまた、曾てカロリーネに告白したようには、この蒐集は彼にとつて決して „närrischer Einfall“ ではなく、„der wahre Ausdruck der Empfindung und der ganzen Seele“ なのである（*vgl.* Herders Lebensbild, hg. v. E. G. von Herder, 3. Bd. Erlangen 1846, III. 78/94/128）。《Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker》の中に „Je entfernter von künstlicher, wissenschaftlicher Denkart, Sprache und Letternart das Volk ist: desto weniger müssen auch seine Lieder fürs Papier gemacht, und todte Lettern-Verse seyn: vom Lyrischen, Lebendigen und gleichsam Tanzmäßigen des Gesanges, von lebendiger Gegenwart der Bilder,

vom Zusammenhange und gleichsam Nothdrange des Inhalts, der Empfindungen, von Symmetrie der Worte, der Sylben, bei manchen sogar der Buchstaben, vom Gange der Melodie, und von hundert andern Sachen, die zur lebendigen Welt, zum Spruch- und Nationallied gehören, und mit diesem verschwinden——davon, und davon allein hängt das Wesen, der Zweck, die ganze wunderthätige Kraft ab, die diese Lieder haben, die Entzückung, die Triebfeder, der ewige Erb- und Lustgesang des Volks zu seyn!"(V. S. 164)とある。ルターによれば、「技巧的な科学的な考え方」や「死せる文字」は、対象になんら sinnen すべきことがないのに、それについて dichten する、これに対し「抒情詩的なもの」や「生けるもの」は「感情の急迫」から発生するのである。さらにペルー (Peru) の民謡について言う。„Als Weisheit habe ich das Liedchen nicht angeführt: denn Sie wissen, in welchem Ruf die dummen Peruaner stehen? Ich rede von Symmetrie des Rhythmus, des Sangbaren." (V. S. 171)。くりかえし „das Lyrische des Wohlklanges, des Reims, der Wortsetzung, des dunklen Ganges der Melodie"(IV. S. 161) について語られる。佳調、韻、配語および旋律の朦朧たる動きこそ、ルターからすれば、生粋の抒情詩を特徴づける要素なのである。それどころか、詩の音楽性を極度に重視したルターは、音楽と詩とは起源に於てひとつであつたと信ずる。ハーマンにおけると同様、ルターに於ても音楽は非常に重大な意義を有している。すでに一七六六年に彼は友人シェフナー(Johann Georg Scheffner) 宛の手紙に „Ich halte mich überhaupt mit viel Vergnügen auf dem Rain zwischen Musik und Poesie auf, weil ich...in ihr...die feinsten Regeln...und Grundsätze zur Ausbildung der Aesthetik finde, die noch wie Gold unter der Erde ruhen..." と書いた。なお《viertes Kritisches Wäldchen》の次の言葉もこの際引用する必要があるであろう。 „...und da dies empfindungsreiche Wesen der Musik von jeher nahe an der Sprache gewesen: so ist hier die musikalische Poesie, über die wir kaum einen Versuch der Theorie, wohl aber mehr praktische Muster haben, der große Vorhof zur Pforte der allgemeinen musikalischen Aesthetik." IV. S. 120)。音楽と言語との関連はすでにレッシングによつて指摘されていた。しかも当時の問題はいつも声楽と器楽とのあいだの先在性に関することであつた (*vgl.* 27. Laokoonfragment)。しかるにルターの問題提起は発生に関するものではない。彼は音楽と言語との共通の根源を両者の「単純な音感覚」(einfache Tonempfindung) の中に見出し (IV. S. 117)、両者の根源的統一はそれらの性質上当然のこととみるのである。„Dies Naturband zwischen Ton, Gebärde, Tanz und Wort erkannten oder empfanden alle Völker und überließen sich dem ganzen Ausdruck ihrer Empfindung. Was die Natur gebunden hatte, ja was in Ausdruck der verschiedenen Sinne Eins war, wollten sie gewaltsam nicht scheiden." (II. S. 73)。不自然な技巧的分離や抽象作用などには全然無

関心な未開の民は、音、身振り、踊り、言語のあいだをつなぐ根源的な自然の紐帯を意識している。これはヘルダーの終生変らざる確信であつた。《Adrastea》に於ても次のような言葉が見出される。„Daß Leid und Freud, das ganze innere Gefühl in seiner Weite und Tiefe sich nicht anders als harmonisch aussprechen kann, daß es melodisch strömen muß, dies ist die heilige Gewalt, die uns ergreift und umschränkt, und im Innern regelt, ja die uns unter dieser Regel mit Allem zusammenband, mit Allem zusammen stimmte.“ (XXIII. S. 559 f.)。音調は、ヘルダーによれば、いわば「直接的な心臓のことば」(eine unmittelbare Herzenssprache, XXIII S. 329 f.)であり、音調の力こそは人間を世界と調和せしめ、かつ「人間の内面を規制する」ものなのである。なお《言語の問題》については後ほど再びとり上げるはずであるが、その前に一応、ヘルダーの思想と同時代の文学的傾向との相違をさらに明かにするために、彼の《シェイクスピア論》を取扱うことにする。

三

すでにヘルダーより以前にシェイクスピアの天才に対し世人の注意を喚起したものは、ゲルステンベルク(《Über Shakespeares Werke und Genie》in: 《Merkwürdigkeiten》2. Samml. Brief 14～18)およびレッシングであつた。しかしヘルダーと彼等とのあ

いだにはシェイクスピア批判の方法に於て著しい逕庭がある。ヘルダーにとつては、《時と場所の統一》(die Einheit von Ort und Zeit)について小理窟(まさに彼にはそう思われたのである!)をいう議論はすべて、全く余計なものなのである。なぜなら、彼は戯曲の発生ということに問題の全部を投げ入れ、そこからのみ、かの統一の規則は理解されうるものであると考えたからである。従つて彼が合理主義的なフランス人の文学観を嘲笑したとしても、なんら不思議とするに足りないのである。くりかえし彼は一切の文学の根源はその独自な《Ton》の中にのみきき取ることができると強調する。彼がヴィーラントのシェイクスピア翻訳を非難するのは、それが字義通りの翻訳であるにもかかわらず、シェイクスピヤ劇をその本然の精神に於て把握することができなかつた、とみるからである。そして詩の精神は、さきに述べたように、音調と旋律の中にあらわれているので、特に戯曲の中に挿入された詩に注意を向けたのである。それ故、ヘルダーのシェイクスピア観は根底に於てそのオシアン観と同一であり、彼のシェイクスピア認識は殆どそのオシアン認識と同様不完全なものである。シェイクスピア劇に関するヘルダーの知識は主として(尤もすでにシュトラースブルク時代ハーマンと共にこれに親しんだのであるが。第二章参照)ヴィーラントの翻訳から得られたのであつた。尤もその翻訳の仕方に対しては否定的である。ヴィーラントの翻訳はその散文体によつて読者に原文の自由と無法則性とを過大に表象せしめ、また一方、その註解は、偉大な天才の創造物を前にしてひとりの不器用者がとまどいしているような感じを

与える。ヘルダーがジョンスン版を入手したのは一七六九年であつた。それまではイギリスのテキストでは恐らくハムレット（Hamlet）とマクベス（Macbeth）を知つていたにすぎない（第二章シュトラースブルク時代参照）。ドイツにおけるシェイクスピア批評の領域でも彼は単に二人の重要な先輩――ゲルステンベルクおよびレッシング――を有していただけである。ゲルステンベルクは自分の印象に酔う人間であつて、美学的規範による判断よりも、自分の心に訴えるものを重視した。ゲルステンベルクがシェイクスピアの創造性と人間の現存に対する解釈力とを強調したとすれば、レッシングはこのイギリス詩人をフランス擬古典主義批判のための尺度とみなし、同時にシェイクスピアによつて、アリストテレスの確立した悲劇の本来の目的――カタルシス（Katharsis）――が、フランス人よりもみごとに果された、と主張したのである。フランス人はアリストテレスの規則に深く馴染んでいたが、シェイクスピアはそうでなかつた。この事実から、規則や規定を顧ることよりも悲劇の真の目的に到達することの方に問題がある、という結論が生ずるのである。

ヘルダーのシェイクスピア解釈の心髄は、この詩人が創作の土台として民衆的な物語詩や伝承、民謡やロマンツェを使用したということ、いな、彼の全作品がかような根源から発生したということであつた。„Wie? auf welche Kunst und Schöpferweise Shakespeare eine elende Romanze, Novelle, Fabelhistorie zu solch einem lebendigen Ganzen habe dichten können? … Wie hat Shakespeare aus Romanzen und Novellen Drama gedichtet?“ (V. S. 229)。――これこそ、ヘルダーが解かんと欲したところの基本課題にほかならない。後年ヘルダー未亡人が確言したように、オシアンの場合と同様、ヘルダーをシェイクスピアに傾倒せしめた源は又しても民謡だつたのである。彼の民謡の理解が拡大するにつれて、彼のシェイクスピア観もまたいよいよ独異の光彩を放つに至つた。従つて一七七一年八月にラスペから借り受けたパーシイのReliques は単にオシアン論を完結せしめたばかりでなく、彼のシェイクスピア観をも成熟せしめたのである。ホメールやオシアンの叙事詩が遍歴歌人の歌謡や朗吟叙事詩（Rhapsodie）から発生し、後に結合されて連関ある統一体となつたのと同様に、シェイクスピアの戯曲は譚詩の素材、すなわち抒情詩的なロマンツェの戯曲化から生じた。Johnson, Warton および Theobald の有力な所見はこの説を支持したのである。例えば、„… er entlehnte seine englischen Historien von englischen Chronisten und englischen Balladen“ もしくは、„Lieder mit geschichtlichem Inhalt, die damals sehr beliebt waren, gaben oft einen Vorwurf ein und legten ihn nahe. Viele seiner gelegentlichen Anspielungen beziehen sich auch auf Stücke dieser Art… Zum Thema Romeo und Julia hat sich eine Ballade erhalten, deren Entstehungszeit weit vor Shakespeare zu liegen scheint.“ 或いはまた、Ich zweifle nicht daran, daß er die Eingebung, den König Lear zu schreiben, von einer Ballade über dieses Thema empfing.“ ――これらの文章はすべて、譚詩がシェイクスピア劇の成因たること

を表明している。なおまた、このことを明かに証明する文書はほかならぬ《Reliques》である。そこには次のような標題の章がある。„Balladen, die zur Erläuterung Shakespeares dienen"——„Balladen, die bei Shakespeare wiederkehren oder irgendwie zur Erklärung seiner Werke beitragen,"„…unser grober Dramatiker, der gelegentlich alte Balladen verwendet und sogar den Plan von einem, wenn nicht von mehreren seiner Stücke aus ihnen entnommen hat."（Reliques の独訳）。

だから、ヘルダーがオシアン論に於てあれほど執拗にドイツ民謡の蒐集を叫んだことに何の不思議があろう！ 民謡は詩というよりむしろ詩の前段階というべきである。まさにこの故にこそ、彼はゲーテに、エルザス（ElsaB）で民謡の抄録を集めることを強要したのであつた。それらは、《spinters and the knitters in the sun》の歌う《Come away, come away, Death》やその他彼がシェイクスピアの作品から知つたところの多くのものと同様に、彼の民謡蒐集に役立つたと思われる。ゲーテの集めた物語詩の中の八篇は、不実な情人を歌つたものである。《Urfaust》におけるグレートヒェン悲劇（Gretchen-tragödie）の筋にどのような他の要素が加わつたとしても、その起源は民謡の中にあるということは明白である。そして Urfaust がゲーテの青年期になお流行していた《民衆劇》(Volksdrama) や《人形芝居》(Puppenspiel) に基づいていたことを想起するならば、われわれはすべての戯曲が庶民的要素から構成されたということ、かつ、それが戯曲化された民謡、戯曲化された国民年代記および高められた民衆劇であつて、ヘルダーがシェイクスピアの伝承を叙述するところと全く軌を一にしていることを知るであろう。同様にゲーテは《Clavigo》の悲劇的結末を不実な情人を歌うエルザスの民謡から借りた。また、ゲーテはドイツ文学の自然的発展が未だ外国の影響によつて断たれていなかつた一時代の国内史譚——Götz von Berlichingen の自叙伝——に向つた。同じ根拠からゲーテはまたシェイクスピアの手法に倣つて、歌謡や譚詩を自分の戯曲の中に挿入したのである。例えば、《Urfaust》における „Es war ein König in Thule", „Es war eine Ratt' im Kellernest", 《Götz》における „Es fing ein Knab' ein Vögelein", 《Egmont》における „Freudvoll und leidvoll"——これらすべては民謡調をにない、„Under the Greenwood tree", „Willow, willow, willow" およびその他の先例にたよつている。また一方、《Claudine von Villa Bella》における民謡の直接的な評論は、ヘルダーの所説とゲーテとのつながりを明かに知らせるものである。それ故、ゲーテはドイツ民謡から現れ出たとみることができるであろう。かりにドイツ文学が、イギリス文学のように、中世の詩的遺産から自然に発展しその基礎の上に築かれていたとすれば、恐らくヘルダーといえども、あれほど露骨に当り散らしあれほど激烈な反撃にでる必要はなかつたであろう。けだし Percy の論文や R. Dodsley の《Select collection of old plays》(1744) の緒言、ならびに Johnson の権威ある註解等を介して、ヘルダーは譚詩流布者および遍歴歌人としてのシェイクスピアを発見するに至つたのである。彼

にとつては、ひとつの正規の系統がスカルデン（Skalden）やバルデン（Balden）からエリザベス王朝の劇文学の最盛期を経てその後もなお継続していることは確実であつた。従つて小冊子《Fliegende Blätter》（既出）の中でオシアンとシェイクスピアとが並列されているのはまことに故あることといつてよい。

シェイクスピアは、さきに述べたように、民衆伝承を豊かにかつ実のり多く利用したのであるが、結局彼自身も民衆伝承の一部となつたのである。ホメール叙事詩の Spielmannsdichtung（吟遊歌人の詩歌）が抒情詩的であつたように、シェイクスピア劇のそれは戯曲的であるといえるであろう。ヘルダーはすでに、戯曲的要素を譚詩の本質的特性である、と強調した。さらにシェイクスピア劇の中に挿入されたもろもろの小さな抒情詩は民謡の様式と極めて区別しがたく融合していた。従つてシェイクスピアはまさしく《民衆詩人》の名に値いするものだつたのである。文学は屢々新しい道の指標となる。シェイクスピアのあらゆる作品は、まさにドイツが不幸にも拒否されていたところの道に照明を与えたのである。ここに、ヘルダーがギリシャ、フランスおよびイギリスのあいだに試みた歴史的比較――これが《シェイクスピア断篇》の大部分を占めている――の本来の意義がある。ヘルダーは国民的差異を強調する。ギリシャの文化世界に属したギリシャ劇を模作し、もしくはギリシャ劇の規則を全然異質的なフランス的環境の中で適用しようとする試みは、ヘルダーには極度に背理的なものと思われた。彼はこの確信を心中に秘めておくことができなかつた。しかるに、イギリス劇はフランス劇よりはるかにギリシャ劇に似通つていた。それは自主的かつ独創的であつて、模倣によつて自己の本然から逸脱することはなかつた。常に独自の根源と目的とを有していた。シェイクスピアは Dichter des Volkes であり、国民の思想や感情を表現した。彼の作品は、ソフォクレス（Sophokles 496～406 v. Chr.）のそれのように、素朴な民謡から発生したのであるから、シェイクスピアをソフォクレスの兄弟として指示するのは、単にヤング（Edward Young 1683～1765）の言説の空虚なくりかえしでは決してなかつたのである。しかし両詩人のあらゆる同質性にもかかわらず、ひとつの差異は看過されてはならなかつた。このことが比較批評（vergleichende Kritik）に対するヘルダー独特の寄与を示している。ギリシャ劇は神をまつる祭典の一部として発展したものであり、ギリシャの社会が単純であつたために三統一などが守られたが、シェイクスピア劇は複雑な社会事情や豊富な歴史的条件を土台にしているので「事件の海」（ein Meer von Begebenheit）という観を呈し、従つてその形式や仕組が複雑であるのはやむをえない。ギリシャ劇は単純な発端から多様性へと発展するのであるが、イギリス劇は多様性から単純化へと進行する。いずれもそれぞれ独自性と正当性とを有している。このことはまた戯曲以外の文学にとつてもいいうることであり、それらは桎梏から自由でそれ自身の守護神に忠実であつた。けだし詩的霊感は元来普遍的なものだからである。ヘルダーはシェイクスピヤ劇に展開される運命や事件が結局各人物の性格に由来するものであることを理解しえなかつたが、両者の異質面を明確にしたこと

は、何といつても彼の偉大な功績といわねばならない。従つて、ヘルダーは論文の終りに《Götz von Berlichingen》の作者に対し激励の辞を述べ、この作者の活動によつてドイツ文学のルネサーンスが導入せられ、ドイツ文学はエリザベス時代の偉大な創作と競合しうるようになるであろう、と期待することができたのである。…„Glücklich, daß ich noch im Ablaufe der Zeit lebte, wo ich ihn begreifen konnte und wo du, mein Freund, der du dich bei diesem Lesen erkennest und fühlst und den ich vor seinem heiligen Bild mehr als einmal umarmt, wo du noch den süßen und deiner würdigen Traum haben kannst, sein Denkmal aus unseren Ritterzeiten（註：＝Götz）in unserer Sprache unserm so weit abgearteten Vaterlande herzustellen. Ich beneide dir diesen Traum, und dein edles deutsches Wirken lass' nicht nach, bis der Kranz dort oben hange. Und solltest du alsdann auch später sehen, wie unter deinem Gebäude der Boden wankt und der Pöbel umher stillsteht und gafft oder höhnt——dein Werk wird bleiben und ein treuer Nachkomme dein Grab suchen und mit andächtiger Hand dir schreiben, was das Leben fast aller Würdigen gewesen: Voluit! quiescit!（註：＝Er hat gewollt! Er ruht!）"（Der Schluß von Herders《Shakespeare》）

如上の思想に比すれば、ヘルダーにあつては、実際の演劇術上の問題は大した意義を有していないようにみえる。尤もヘルダーは統一、アリストテレスのカタルシス、幻覚、性格描写および舞台効果のような特定の諸問題にかかわる考察を少しは述べねばならなかつた。これらの諸問題に立入るには《歴史》がヘルダーにとつて唯一可能な通路なのである。にもかかわらず、これらの諸問題が彼にはどうでもいいものであつたとか、もしくは彼がシェクスピア劇は舞台に上演されるよりむしろ読まれるものであるとみなした、とかいう風に即断してはならないのである。

シェイクスピアの天才を把握するヘルダー流の遣り方はまさに革命的な意義を有している。独創的天才を神性もしくは憑依の相に於て把握することは、勿論ありふれた方法である。しかしヘルダーはかかる視点に停着してはいなかつた。彼によれば、天才は宇宙有機体の一部分であり、宇宙有機体がその使命を人類に告げるために使う代弁者なのである。それ故、ヘルダーがシェイクスピアを Schöpfer, Göttersohn または Dramatischer Gott と呼ぶときはいつも、彼の修辞的な比喩を用いたのではなく、かえつて文字通り彼のいう言葉のままを意味したのである。シェイクスピアはまさに天来の感興を起さしめる。彼は神にひとしいもの、小規模の創造主であり、その仕事は創造そのものへの類推に於て行われ、創造そのものをひとびとに理解できるようにするのである。創造は単に一度きりで完結せるものでなく、それはさらに続行し到るところわれわれの眼前に行われる。そして自然は生々発展する生ける全体であり、一切の歴史はかかる過程の最高の現象形式である。歴史の執行者は世界の偉大な天才、カーライル（Thomas Carlyle 1795～1881）のいう意

味での《Heroen》にほかならない。詩人の職能は、眠れる自然をめざませて新しい生命となし、自然の作用を追形成もしくは追創造し、同胞が自然を知覚し把握するようになるためにこれを彼等の前に復活せしめ、そうすることによつて神の意図を顕わし、詩人がその部分であるところの自然もしくは万有を解釈することである。詩人の役割は、すぐれた天賦と洞察力とによつて予定された世界計画を認識しかつ遂行するように人間をみちびくところの教育者もしくは宣教師の役割に似ている。事実シェイクスピアを通してヘルダー自身の心に芽生えたのは、まさしくこのことであつた。„Wie vor einem Meere von Begebenheit, wo Wogen in Wogen rauschen, so tritt vor seine Bühne. Die Auftritte der Natur rücken vor und ab; wirken ineinander, so disparat sie scheinen; bringen sich hervor und zerstören sich, damit die Absicht des Schöpfers, der alle im Plane der Trunkenheit und Unordnung gesellt zu haben schien, erfüllt werde——dunkle kleine Symbole zum Sonnenriß einer Theodizee Gottes …Eine Welt dramatischer Geschichte, so groß und tief wie die Natur; aber der Schöpfer gibt uns Auge und Gesichtspunkt, so groß und tief zu sehen!“ (V. S. 220～21)。つまりシェイクスピア劇は徹頭徹尾世界の解釈である。シェイクスピアは歴史を戯曲化した、が、それは必ずしも単に歴史劇を書くという普通の意味に於てではない。彼の作品はあくまでも現実らしい見せかけによつて、啓示そのものと本質的に類似している。従つてヘルダーが、「シェイクスピアを繙くや否や一切の劇場、書割、俳優は脳裡から消え去る」——ここから論述は横道にそれてシェイクスピアを抒情詩人とまで極言する——という場合、それは彼が自分に与えられる世界過程の啓示、すなわち „Blätter aus dem Buch der Begebenheiten, der Vorsehung, der Welt“ (V. S. 219) に専ら魅せられていることを意味する。かくしてシェイクスピアが、ホメールやオシアンと全く同様に、ヘルダーの精神の中でモーゼ、マホメットおよびプロメートイスと結合する理由を、われわれはつきりと理解することができる。ドイツの作家たちを鼓舞するためには、これ以上強力な手段は恐らく見出されなかつたであろう。ヘルダーによる詩の宇宙的意味の発見は、ドイツにおける新しい運動に、その目的のいかに偉大であり、いな、崇高でさえあるかを感ぜしめた。かかる感情にうながされた Sturm und Drang は使命遂行の信念に燃えて開始されたのである。しかしながら、その過度な自我意識にひそむ危険は、爾後ドイツ文学の中に断えず現れたのであつた。

四

いうまでもなく啓蒙思想に於ても、すでにライプニッツ以来《言語》なるテーマは精神科学的研究の中心に立つていた。しかしヘルダーの言語問題に対する関心ないし努力は、言語の神的な起源と伝達とに関する教説もしくは言語伝達の基礎を相互的社会的合意にありとする学説に向けられたのではない。彼はこれらの説に対して、言語の起源は全然人間的なものであるとして異論を唱えるのであるが、

だからといつて簡単に新しい言語理論を打建てるのではない。彼の研究の過程は、あらゆる形而上学的思想に反対して、言語の所有を人間の本質とみなした（ζῶον λόγον ἔχον）古代にこの問題を結びつける、ということを示している。ローマ哲学やその地盤の上で媒介されたギリシャ哲学、後にスコラ哲学やデカルト以来世俗化された哲学は、Logos を Ratio と翻訳したのであつた。この場合たしかに Logos の概念は巧みに翻訳されてはいるが、その意味は著しく縮小されてしまつた。なぜなら Ratio とは爾来わずかに Vernunft を意味するにすぎないからである。本質に於てハーマンに刺戟されたヘルダーの偉大な業績は、明かに啓蒙主義的言語観の立脚点の不可能性を示すと同時に、歴史に繫縛された彼自身の立場をあらわしている。すでにケーニヒスベルク時代の手記の中に言語、文字および文法の起源に関する草案が見出される。さらに《Fragmente》や《Kritische Wälder》における夥しい発言は、言語の問題に対するヘルダーのたゆまざる努力を知らせる。リーガーでもアカデミーの懸賞問題についての腹案をかきとめていたが、この問題は旅行中および若きゲーテに師事されたシュトラースブルクに於て解決を見出したのであつた。これがすなわち《言語起源論》（Abhandlung über den Ursprung der Sprachen 1772）という彼の最も天才的な業績となつたのである。

ところで、ヘルダーのシュトラースブルクおよびビュッケブルク時代における著作には、くりかえし感情の表現が問題になつている。感情は、彼によれば、あらゆるものの自然的紐帯としてあらゆるものと諧和するものなのである。一切が明るく、目に見え、区別されている啓蒙精神の優勢に対して、ヘルダーは Seele の本源性を強調する。いうまでもなく Seele の存在様式の特徴は感情すなわち内面性にほかならず、これは啓蒙の与り知らぬところであつた。ヘルダーの他の諸著作におけると同様、《言語起源論》に於ても内面性の問題が取扱われたのである。一見したところ、感情の問題が言語の問題を手がかりにして論ぜられるということは不思議に思われるかも知れない。しかしこの労作は事実《激情》（Leidenschaft）の分析から着手される。„Alle heftigen, und die heftigsten unter den heftigen, die schmerzhaften Empfindungen seines Körpers, alle starke Leidenschaften seiner Seele äußern sich unmittelbar in Geschrei, in Töne, in wilde, unartikulirte Laute.“（V. S. 5）。からだの感覚とこころの激情は、叫喚や音調やはつきりしない音声の中にあらわれ、これらを通してのみききとれるのである。内部はまさしく外部に、すなわちその具体に於てあると感ずる。かくしてヘルダーにとつては、音、メロディー、リズムは、いな、「あらゆる外部的なものは、単に内なるこころの反照」（„alles Aeußere nur Abglanz der innern Seele“ VIII. S. 183）を意味するにすぎない。„Diese Seufzer, diese Töne sind Sprache: es gibt also eine Sprache der Empfindung, die unmittelbares Naturgesetz ist.“（V. 6 f.）。そして嘆息や音調が言葉なのである。しかしこの場合、人間についていわれているのだろうか、それとも動物のことなのであろうか。この章は „Schon als Thier hat der Mensch

Sprache."(V. S. 5.)という文章で始まる。人間ももとは動物だつたのである。自然のうちにあるあらゆる存在は相互に隔離しあうことのない共通の秩序を有している、という見解がくりかえし述べられる。人間が動物と共有しているかような感情の言葉を《自然の言葉》(Sprache der Natur; V. S. 7)と名づける。かかる《自然の言葉》は、「激情の高潮と大海」(die Fluth und das Meer der Leidenschaften; 同前)を堰きとめ、干乾かし、疏水したわれわれの技巧的な言葉によつて駆逐されてしまつた。ところが感情の激する瞬間には、叫喚により、音調や音声により、もしくは、ヘルダーがくりかえしいうごとく、《Accente》(同前)によつて、かような母なる自然の言葉がひびくのである。彼はこの《自然の言葉》の残余を原始語の中にききとると信ずる。原始語の動詞は語根に於てなお感情の叫びにみちているのである。洗練された後世の形而上学的な言語は理性と社会との子であつて、殆ともしくは全然その生みの親の幼時を知ることがない。„eine solche(註:=feine, späterfundne Metaphysische) Sprache, das Kind der Vernunft und Gesellschaft, kann wenig oder Nichts mehr von der Kindheit ihrer ersten Mutter wissen."(V. S. 9 f.)。しかるに、古い未開の言葉は淵源に近ければ近いほど、それだけ多く生母の幼時を内臓しているのである。„…allein die alten, die wilden Sprachen, je näher zum Ursprunge, enthalten davon(註:=von der Kindheit ihrer ersten Mutter) desto mehr."(同前)。ヘルダーはクロプシュトック、シェイクスピア、オシアン、聖書および素朴な民謡の言葉のリズムの中に自然の言葉の音調をききとるというのであるから、この懸賞論文の真の効績は言語の発生的展開の立証にではなく、むしろ言語の構造の開明にあつたと思われる。因に、ヘルダーの《言語起源論》は現今でもなお超克されていない。フンボルト(Wilhelm von Humboldt 1767〜1835)の大規模な言語哲学的著作やカッシーラー(Ernst Cassirer 1874〜1945)の《象徴形式の哲学》(Philosophie der symbolischen Formen 1923〜29)の第一巻によつて、この論文の真価があらためて確証されたのである。

ヘルダーによれば、啓蒙主義の《理性言語》(Vernunftsprache)には《自然言語》(Natursprache)との絆は断ちきられており、これに反し、古代の言語にはなお感情との根源的なつながりが示されていたのである。„Ihre Aussprache war so lebendig und feinorganisirt, ihr Hauch war so geistig und aetherisch, daß er verduftete und sich nicht in Buchstaben fassen ließ."(V. S. 13)。感情の言葉は魂の奔流であり、魂の音声は理智の眼を以てしては把握し識別することができない。自然の言葉は童児や感能の民に固有な音調を有しているから、いかなる「精神的な弁論や形而上学」(V. S. 16)よりも深く魂に浸透する。実にヘルダーの文章自体が、感激に酔える魂の吃りながら発することばであるかのように見える。勿論ここには、聡明な精神を以て絵画、物語もしくは戯曲の法則を分析するレッシングの明晰な言葉は存在しない。啓蒙的世界から投げだされたヘルダーは現存在の奔流に沈湎し、この底から新しい世界を打建てようと欲する。ここでヘルダーの叙することは、

生の間断なき奔流であり、魂の言葉であり、帰するところは内面性の讃歌なのである。

ヘルダーにあつては、本来的な詩は「人間の心臓が神と、自己と、全自然と交わす対話」(Gespräch Menschlichen Herzens ——mit Gott! mit sich! mit der ganzen Natur!" V. S. 206) であり、またヘルダーの人間学によれば、人間は決して自然全体から超脱するものではないのである。それ故、思惟する人間は、もし彼が感情によつて全自然と結合しないならば、この世に於て孤影悄然たる運命をになわねばならないであろう。このことを最も端的かつ特徴的に示すものは《St. Johanns Nachtstraum》と題する詩の一節である。„Bin nicht zu denken hier! zu sein, zu fühlen!" (XXIX. s. 366)。かくしてヘルダーこそは、生ける自然の美が言葉となつた最初のひとなのである。かのロココ趣味が人工的庭園の剪定された樹林の中で娯んだような自然、悟性の抽象作用に類する作為的な自然は、もはやヘルダーの眼中にはないのである。彼のいうところの自然は、彼が海の狂瀾や森のざわめきの中で衷心からの感情を以て経験したような、元素的、根源的な自然である。„Unendlich, ach! / Unerschöpflich bist du schön! /Mutter Natur!" (XXIX s. 365)。ここには母なる自然の無限性を言葉で捉えることのできないもどかしさが感ぜられる。ただ „Ach" を口ごもることができるだけだ。——まさしくこれこそ自然の言葉にほかならぬ！ しかし自然のあらゆる美は人間がそれを感ずるが故にこそ存在しうるのである。これすなわち Sturm und Drang の《感ずる我》(das fühlende Ich)

の現出にほかならない。„Fühle dich/ und die Schöpfung fühlet sich!—" (XXIX. s. 444)。一七七三年の詩《Die Schöpfung》の中に——„...ich/bins, in dem die Schöpfung sich punktet, der in alles quillt/ und der Alles in sich füllt!/Bis zur letzten Schöpfung hin / fühlet, tastet, reicht mein Sinn! / Aller Wesen Harmonie / mit mir——ja ich selbst bin sie!" (同前)。ここに於ては、彼の感情は主客の間隙などには全く関知するところがない。Ich と Schöpfung とは、いわばひとつの調和音をだすために掻き鳴らされる二本の弦にほかならない。同じことが《Das Saitenspiel》の最後の詩節で歌われる。„Verhall', o Stimm', ich höre/Der ganzen Schöpfung Lied./ Das Seelen fest an Seelen/Zu Herzen Herzen zieht./ In Ein Gefühl verschlungen/Sind wir ein ewig All:/In einen Ton verklungen/Der Gottheit Wiederhall." (XXIX. s. 93)。自我と自然とがひとつであることをヘルダーは「神性のこだま」と名づける。啓蒙主義にあつては、神は悟性概念のように明晰であり、神の存在は人間的尺度に従つて理性に頤使され保証されていたのであるが、ヘルダーにあつては、神はわずかに《Ton》としてききとられるにすぎないのである。すでに、初めて聖書を読んだとき彼は神に驚倒し、それはもはや捉えられず、ただ感ぜられるだけであつた。いうまでもなくこの原感情は、ビュッケブルクにおけるマリア伯爵夫人との交誼から生じた幾分わざとらしい敬虔と混同されてはならない。尤もかような不自然な敬虔もまた全くヘルダー的であつて、彼に於て無視することのできない一面ではある。

Ich と Natur とが同一のものであるように、《Gott》なる詩の中では、Ich と Gott もまた同一なる所以が歌われている。„Verborgner Gott. Du mir so fern und nah,/andringend mir, in meinem Innersten/durchfassend mich,…“ (XXIX. S. 609 f.)。神は近きにありて捉えがたく、しかもわれに迫り来つて、わが内奥に浸透する。さらに《Die Schöpfung》ではくりかえし „Ich wie Gott“ (XXIX. s. 437 f.) といわれる。創造的天才は神のわざに劣らぬものをなしとげることができる。„O Gott was gabst du mir!——all deine Welt/schaff' ich dir in mir nach!——“ (XXIX. s. 230)。しかも神もまたそれが感ぜられるかぎりに於てのみ存在するのだ。かくして、《Ich 即 Natur》および《Ich 即 Gott》の関係から、結局 Gott と Natur とは同じものとなる。このことは、ヘルダーが東洋人の言葉に於て「神の気息」をいい、すぐ同一のものとして「吹く風」という同格語を附け加える場合にもうかがわれる。„…da bei den Morgenländern die Rede gleichsam ganz Spiritus, ganz fortgehender Hauch und Geist des Mundes war, … Es war Othem Gottes, wehende Luft, die das Ohr aufhaschete … daß dies Wehende aber den Ursprung ihrer Sprache verrathe, ist offenbar.“ (V. s. 13 f.)。

まさしく Seele の本来的な機能は「人間の心臓と神もしくは自然との対話」にほかならず、しかもこの対話は《Wort》ではなく《Ton der Empfindung》なのである。かかる《Ton der Empfindung》としての《Gespräch Menscslichen Herzens》は、航海旅行以来ヘルダーの内にひびき始め、彼が諸民族の幼年期やそれらの言葉の中でききとつた《Töne der Kindheit》の記憶をよびおこす。われわれは《旅日記》の中に、われわれが「幼年時代に長いあいだ内心ひそかにいただいている」(IV. s. 360) 音調や夢をよみとることができる。それどころか、そこではできるかぎり「最初の諸印象を永遠ならしめ」、そして「それらの人生に及ぼす全影響を示す」(IV. s. 375) ことが問題になつている。ヘルダーの陶酔せる魂にとつては「幼時の想像力の最初の戯れと柔軟多感な魂に対する最初の強い印象とをききとる」(IV. s. 366) ことは至高のわざなのである。どんな成人後のさかしら（理性）でも「幼年時代の夢、全生涯の信仰を破壊することはできない」(IV. s. 359) のである。ヘルダーの詩に於ても、目ざめたるひとの《Koinos Kosmos》の中に長く余韻をひびかせる魅惑的な夢の魔術が表現される（註：Herakleitos における夢みるひとの《ἴδιος κόσμος》私的宇宙と目ざめたるひとの《κοινὸς κόσμος》公的宇宙とは丁度 Seele と Geist との区別に相当するであろう）。童児は母親からきいた物語の音調やリズムをあらゆる概念的な理解からまもつて、自分の魂の中にしまい込んでおく。彼は成長するにつれてその物語の内容は疾くに忘れてしまつたとしても、依然として「消え去らずに幾日間も魂の中で」(XXII. s. 183) 余韻をひびかせている物語の音調は覚えている。つまり人間の内部には「高次な仕事」(die höheren Leistungen) の下地をなす《Ton》が存在しており、この Ton は人間の生が自己を知るようになるための根源を意味する。従つて現存在はあらゆる談話の音調のなかに開示される。

ロゴスはいまや単に理性的なるものを意味するばかりでなく、ヘルダーによつてこの概念は再び本源的なギリシャ的ひろさに於て認識されるに至つた。現存在は全体としてすでに言葉のリズムに於て開示されているのである。

ヘルダーによれば、感情の魔術を顕わさないような言葉は死せる形而上学とみなされる。しかし感情の薄暗い魔術は概念を得ることも対象を表象することもできない。概念や対象の表象は、人間の他の能力によつて可能となるものである。ヘルダーは《言語起源論》に於て、音声や音調、《感情の叫喚》(Geschrei der Empfindung; V. S. 17) を人間が動物と共有する言葉とみなさざるをえない。そして、かかる感情の叫喚が言語の起源をなすものであるとすれば、この起源は《超人的》なものではありえず、却つて単に《動物的》なものたるにすぎない(同前)。感情の叫喚から明確な概念に到達することは不可能である。しかるに《人間の》言葉の本来的な特性は、「語の明るい概念」(der helle Begriff des Wortes; 同前) の中にある。《概念》というものは、ひとり人間にのみ賦与された《思慮》(Besonnenheit; V. s. 34) によつてもたらされるのである。„Man bilde und verfeinere und organisire dies Geschrei, wie man wolle; wenn kein Verstand dazu kommt, diesen Ton mit Absicht zu brauchen: so sehe ich nicht, wie nach dem vorigen Naturgesetze je Menschliche, willkührliche Sprache werde?“ (V. s. 18)。音調も感情の叫喚も悟性によらなければ人間の言葉とはならない。„Der Mensch in den Zustand von Besonnenheit

gesetzt, der ihm eigen ist, und diese Besonnenheit (Reflexion) zum erstenmal frei würkend, hat Sprache erfunden.“ (V. s. 34)。動物的な本能の状態から熟慮の状態に移され、この熟慮(反省)を初めて自由にはたらかせた人間が言葉を発明したのである。しからば一体《Besonnenheit》もしくは《Reflexion》とは何であろうか?人間の内面は元来《Occean von Empfindungen》または《schwebender Traum der Bilder》(同前)であり、Seele の奔流にほかならない。しかし人間の「感性的状態」(der sinnliche Zustand; V. s. 33) は動物のそれほどに強くないということが、人間を動物から区別する。その代り、人間には《幾多の明るさ》(mehrere Helle; V. s. 28) が与えられている。人間は盲目的に大地の一点に繋縛されることなく自由に《彼の諸力を処理すること》(Disposition seiner Kräfte) によつて《状態性》(Zuständlichkeit) から超越することができる。かかる人間の素質をヘルダーは Verstand, Vernunft, Reflexion, Besinnung または Besonnenheit というのである。彼は Reflexion を説明して、人間は感覚の大洋からひとつの浪を停止させ、それに注意をむけ、そしてそれを意識するようになる、というぐあいに叙べている。„Der Mensch beweiset Reflexion, wenn die Kraft seiner Seele so frei würket, daß sie in dem ganzen Occean von Empfindungen, der sie durch alle Sinne durchrauschet, Eine Welle, wenn ich so sagen darf, absondern, sie anhalten, die Aufmerksamkeit auf sie richten, und sich bewußt seyn kann, daß sie aufmerke.“ (V.

s. 34)。ドイツ観念論に於て Geist という名を得ている Reflexion は、人間の内面を不断に流れる感覚の奔流からひとつの浪を停め、分離し、これを他の浪から区別するところの人間固有の能力であり、また、あらゆる性質を知るばかりでなく、それらを区別しかつそれらの中のひとつ又は多くのものを認めることができるものである。この区別され認知されたものは、人間が自意識によつて感情の奔流から隔離したところの標識である。この最初の標識、従つてまた自意識のすべての標識が《Wort der Seele》なのである。„Er (註：=der Mensch) beweiset also Reflexion, wenn er nicht bloß alle Eigenschaften, lebhaft oder klar erkennen, sondern Eine oder mehrere als unterscheidende Eigenschaften bei sich anerkennen kann: der erste Aktus dieser Anerkenntnis gibt deutlichen Begriff; es ist das Erste Urtheil der Seele—und—wodurch geschehe die Anerkennung? Durch ein Merkmal, was er absondern muste, und was, als Merkmal der Besinnung, deutlich in ihn fiel! ...Dies Erste Merkmal der Besinnung war Wort der Seele! Mit ihm die Menschliche Sprache erfunden! (V. s. 35)。彼はまたこの《Wort der Seele》を „das blöckende Schaf" の例を以て描いている (*vgl.* V. s. 35ff.)。要するに、ヘルダーは言語の現象によつて Seele の力と Geist の力とを呈示することができたのである。これはドイツ思想史上最も雄大なもののひとつである。ヘルダーによれば、人間の衝動は、動物のようには、人間を羊に向つて駆りたてない。人間は感覚の中でそれ（羊）を「白い、温和な、柔毛のある」ものとして感官に受けとることができる。しかし彼は未だそれを羊として認識してはいない。Geist の力、すなわちヘルダーのいう《besonnen sich übende Kraft》によつて、人間は内的感覚の闇を明るくすることができる。Reflexion は諸感官を流れる感覚の奔流から感覚の或る標識を分離する。意識は羊の《Blöcken》を羊の最も本質的な標識として知覚する。かかる羊の本質的標識は意識にとつて《Erinnerungszeichen》として《Merkwort》となるのである。言葉は感情とその感性的な表現との中に、叫喚と音声との中に根ざしているのであるが、だからといつて言葉の本質はそれだけでは未だ完全に把握されていないのである。感覚は言葉らしいひびきを洩らすにすぎないが、Reflexion は意味し、かつ確立する。現存在の奔流の中から、意識は再び或ものをそれと認める。意識におけるかような再認識は「言葉が語に成ること」(Wortwerden der Sprache)である。このことは、言葉はつねに生成(Werden)、すなわち Seele の Geist への変成たる所以を示している。ヘルダーの本質的に重要な課題は、《感情の状態性》から《表象の対象性》への断えざる移行を指示することにあつた。感情、本能、魂といつた内的存在は硬化した啓蒙主義には全く無縁のものであるが、対象性（Gegenständlichkeit）もまた啓蒙主義の知るところではなかつた。啓蒙的人間が学的に振舞うのは、一切が可測的なものとして彼にひらかれている場合にかぎられる。認識は、啓蒙主義の場合には、単に量的な「設計」(Entwurf)に追いつく以外の何ごとにも関わり合う必要がない。むしろ啓蒙主義には「関連」(Bezüge)

が重要なのである。従つて表象はその本来的根拠を喪失したというべきである。けだし、現存在は、ヘルダーの「自然は悉皆万有と楷和する」という、その万有とひとつである、ということが表象の根拠だからである。かくして啓蒙主義は死せる形而上学となる。しかしGeistがなおその根拠を意識しているところでは、言語は本来の意味に於てロゴス（λόγος）である。言語はSeeleとGeistとに参与する。ここに於て人間は至高の境地に達し、Seeleたると同時にGeistたる存在となる。ヘルダーの全努力は、状態性からいかにして対象性が生ずるかを断えず新たに示すことに向けられていた。感性的状態はいかなる人間、いかなる民族に於ても、独自的、個性的である。われわれの現存在の最深の根底は独自的、個性的であると、ヘルダーはくりかえし強調する。まことに、様々な言語の考察に於て、言語の魂の根底に耳をかたむけ、そのひびきをききとることは、ヘルダーにとつて最もすばらしい課題だつたといいうるであろう。

正統信仰者は、簡単に言語を神の贈物とみなすことによつて、言語の発生の問題を回避した。合理主義者は言語を国家のように人間相互の契約から導出し、唯物論者は言語を動物のことばの発達したものとして身体器関の音から説明したのである。ヘルダーはこれら諸見解のあいだを彼独自の進化論（Entwicklungstheorie）の道を歩んだのであつた。たしかに彼もまた或種の言語を動物に帰している、がしかし、それはいわば一時的な激情や自然音のことばである。さきに述べたように、人間を動物から分つものは《思慮》であり、印象を理性的に反省する才賦である。人間はかような思慮と反省とを以て印象に適合せる概念や名称をつくる。言葉の発展は感性的なもの（das Sinnliche）から精神的なもの（das Geistige）へと進行する。自然的な民は感覚的に知覚される個々の事物や行為の表現を多くもつている。教養が増大するにつれてますます言葉は個々のものを表現する必要が少くなり、個々のものを集団記号に纒合し、それによつて感覚的現実から遠去かり抽象的となるのである。

文化の進展につれて教養財が非感性化され精神化される、というかかる見解はまたヘルダーの文学観の根底にも存しているのであり、ここから彼はVolkslied, Volksdichtungなる概念に到達したのである。彼によれば民謡は一民族の最古の根源的文学なのである。ヘルダーは、抽象的なるもの、感傷的なるもの及び不自然なるものを教養ある詩人の詩歌の中に、これに反し、生粋なるもの、感能的なるもの及び根源的なるものを自然歌謡の中に指摘することができた。ところで、彼がシェイクスピア劇における歌謡もしくはエッダの諸断篇を民謡として称讃する場合、ただちにVolkなる概念は拭い去られる。そして、作者が無学な野人であろうと、教養ある詩人であろうと、いずれにせよ古くて感能的本源的であるような歌謡なら何でも、民謡と名づけたがる傾きがヘルダーに見られるようである。

一七七四年の民謡蒐集はシェイクスピアおよびイギリス文学の研究と密接につながつている。事実これは四年後に出版された《民謡集》とは異なり、イギリスとドイツのものに限られていた。そしてそのひとつの章全体がイギリスの劇作家にささげられていたのである。ヘルダーがシェイクスピア研究に携つたのは、シェイクスピアが民謡から出発したからであり、かつ、彼が民謡に没頭したのは、民

謡がシェイクスピアの本質を明かにしたからである、といつてよい。前にもふれた《Von Ähnlichkeit der mittleren englischen und deutschen Dichtkunst》という論文はヘルダーの批評的寄与の中でも最も徹底的なもののひとつであるが、彼はここに於て、ドイツとイギリスとは血縁的同種であり、両国民には起源的に共通な神話や言語が存在するにもかかわらず、何故ドイツはひとりのシェイクスピアをも所有しなかつたか、という理由を明かにしようと試みた。イギリス文学は中世の民衆的実質の上に築かれ、それを摂取しつつ生長してきたのであるが、ドイツはこの道を歩まず、ドイツ往古の郷土的遺産とのつながりを喪失してしまつていた。この事実が、ゲルマン歌人の後裔たるシェイクスピアをドイツ詩人たらしめようとする要求を生ぜしめるのである。イギリスに於ては、その生粋土着の詩的伝承は極めて強力であつたため、ルネサーンスの異質的実体もこの伝承の進路を逸脱させることができず、却つてそれに同化され利用されたのである。しかるに、カルル大王(Karl der Große 742～814)編纂古代ゲルマン英雄詩集の喪失、ルネサーンスおよび宗教戦争を将来した中世ドイツ文化におけるラテンの優勢などによつて、ドイツ文学はドイツ的実質をうばわれ、フランス文学に隷属し来つた。かくしてドイツ文学は徹底的に衰弱し、いまやドイツの現在と過去との断絶は救うべからざるていのものとなつたのである。„Aus älteren Zeiten haben wir also durchaus keine lebende Dichterei, auf der unsre neuere Dichtkunst, wie Sprosse auf dem Stamm der Nation gewachsen wäre; dahingegen andre Nationen mit den Jahrhunderten fortgegangen sind, und sich auf eigenem Grunde, aus Nationalprodukten, auf dem Glauben und Geschmack des Volks, aus Resten alter Zeiten gebildet haben. Dadurch ist ihre Dichtkunst und Sprache national geworden, Stimme des Volkes ist genutzt und geschätzt, sie haben in diesen Dingen weit mehr ein Publikum bekommen, als wir haben. Wir armen Deutsche sind von jeher bestimmt gewesen, nie unser zu bleiben: immer die Gesetzgeber und Diener fremder Nationen, ihre Schicksalsentscheider und ihre verkaufte, blutende, ausgesogene Sklaven.“ (IX. s. 528)。

要するに、ヘルダーの民謡蒐集の意図は、未来の作家を彼等の創作の基礎となる過去の喪われた宝に近づかしめ、当時のドイツに於て新しいシェイクスピアやスペンサー(Edmund Spenser 1552?～99)を数多成長せしめるために、エリザベス王朝時代のイギリスに比肩しうるような文学的条件をつくりだすことにあつた。しかしこの一七七四年の蒐集は時代の蔑視と敵意とのために印刷に付することができなかつた。それはヘルダーの Lieblingsidee に対して致命的な打撃を与えたのである。それ故、一七七八年—七九年の《民謡》(Volkslieder 2 Bde.)は必ずしも一七七四年の民謡蒐集と同じ企図を実現したものでなかつた、ということは注意されねばならない。いつたい Volksdichtung とは Nationaldichtung なのか、それとも Pöbeldichtung なのであろうか。事実ヘルダー自身この表現を融通無碍に、多彩な意義に用いたのである。初めのうちは、素

朴かつ粗野な未開人の歌でありさえすれば簡単に Volkslied とみなされがちであつたが、後（一七七八―七九）の民謡集（註：後に出版者 Joh. von Müller によつて《歌謡における諸民族の声》Stimmen der Völker in Liedern と題された）が刊行されたとき、Volkslieder と Kunstlieder とが分たれ、《Volk》の概念は彼なりに確立されたようである。„Volk heißt nicht der Pöbel auf dem Gassen, der singt und dichtet niemals, sondern schreitet und verstümmelt.“ とはいえ、ヘルダーの Volkslied に対する概念規定はとうてい厳密な学的分析にたえうるものではないであろう。しかしながら、彼が Volkslied の概念を以て当代ならびに後代に与えたところの洞察は極めて深く、ドイツ詩の歴史に対する彼の影響はまことに生産的であつた。ヘルダーと Volkslied との関係は、あたかもルソーと Naturidee との関係にひとしい。ヴォルテールやニコラーイのごとき合理主義者はそれに冷笑を浴びせたであろう。がしかし感受性に富んだひとびとは、そのあらゆる科学的欠陥を超えて、その中に新文学を発芽させるところの生ける種子を発見したのであつた。たしかに、ゲーテの最も美しい詩はヘルダーの民謡の発見なしには生れえなかつた、というのは行き過ぎであろう。しかしゲーテ自身は、いかに彼がヘルダーによつて従来とは全然異なる世界の詩を知るに至つたかを確認したのである。よし、科学がヘルダーの方法や論理の欠陥、徹底性の不足を非難しようとも、ドイツ精神の歴史的生活は、当時の学者たちから得られなかつたような、ほかならぬ彼等の科学性のゆえに却つて生じえなかつたような刺戟および振励をヘルダーから受けているのである。

精神が永遠の脈動を保持するためには、その見方や方法は波浪の山や谷のごとく交替せざるをえない。幾十年ものあいだドイツ的思想性を規定してきた科学的理性の下に直接的かつ根源的な生の表現として生きていたところの諸力に再び思いをいたし、これを新たに蘇らせることこそ、まさに Sturm und Drang の使命にほかならない。ヘルダーはハーマンとともにかかる力を内心に感じ時代に呈示したところの先覚者のひとりだつたのである。（完）

附記。本稿は昭和二七、二八、二九年度文部省科学研究費（総合研究《ドイツにおける市民的文学》）による研究成果の一部である。

参考文献

Herder, J. G., Sämtliche Werke, hrsgb. von B. Suphan, 33 Bde., Berlin 1877～1913.（本稿のヘルダーからの引用はこれによつた。ローマ数字は「巻」、アラビヤ数字は「頁」を示す）。ついでに、この全集の中最も重要な著作の「発行年」と「巻」とを紹介しておく。

1767: Über die neuere deutsche Literatur. I. II.

1769: Kritische Wälder. III. IV.

Journal meiner Reise. IV.

1772: Abhandlung über den Ursprung der Sprache. V.

1773: Von deutscher Art und Kunst. V.

1774: Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit. V. XXXII.

Älteste Urkunde des Menschengeschlechts. (2. Band 1776) VI. VII.

An Prediger. Fünfzehn Provinzialblätter. VII.

1775: Erläuterungen zum Neuen Testament. VII.

1776: Lieder der Liebe, ein biblisches Buch. VIII.

1777: Denkmal Joh. Winckelmanns. VIII.

1778: Plastik VIII.

Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele. VIII.

Volkslieder. (2. Teil 1779) XXV.

1780: Briefe, die Studium der Theologie betreffend. X. XI.

1782: Vom Geist der Ebräischen Poesie. (2. Teil 1783) XI., XII.

1784: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. (bis 1791) XIII, XIV.

1785: Zerstreute Blätter. (bis 1797) XV.

1787: Gott. XVI.

1793: Briefe zur Beförderung der Humanität. (bis 1797)XVII, XVIII.

1794: Christliche Schriften. (bis 1798) XIX.

1795: Terpsichore. (bis 1796) XXVII

1799: Metakritik. XXI. XXII.

1800: Kalligone. XXII.

1801: Adrastea. (bis 1803) XXIII, XXIV.

Herders Werke, hrsgb. von Ernst Naumann(15 Bde.), Bongs Goldene Klassiker-Bibliothek, Leipzig 1912.

Herder, Maria Caroline von, Erinnerungen aus dem Leben J. G. von Herders, hg. von J. G. Müller, 2 Bde., Tübingen 1820.

Herder, Emil Gottfried von, Herders Lebensbild, 3 Bde., Erlangen, 1846

Düntzer, H. und F. G. von Herder, Aus Herders Nachlaß, 3 Bde., Frankfurt a. M. 1856～57.

Reisiger, H., Joh. Gottfr. Herder. Sein Leben in Selbstzeugnissen Briefen und Berichten, Berlin 1942.

Schauer, H., Herders Briefwechsel mit Caroline Flachsland, 2 Bde., Schriften der Goethe-Gesellschaft, XXXIX, XLI, Weimar 1926～28.

Haym, R., Herder, 2 Bde. hrg. von Wolfgang Harich, Berlin 1954.

Kühnemann, E., Herder, 3. Aufl., München 1927; Herders Persönlichkeit in seiner Weltanschauung, Berlin 1893.

Wiese, B. von, Herder. Grundzüge seines Weltbildes, Leipzig

1939.

Brändle, Joh., Das Problem der Innerlichkeit —— Hamann, Herder, Goethe——,Bern 1950.

Dilthey, Wilh., Schriften III.

Gillies, A., Herder und Ossian, Berlin 1933; Herder——Der Mensch und sein Werk, Hamburg 1949.

Gundolf, F., Shakespeare und der deutsche Geist. 4. Aufl. Berlin.

Kommerell, M., Der Dichter als Führer. Berlin 1928.

Korff, H. A., Geist der Goethezeit. Leipzig 1923～30; Humanismus und Romantik, Leipzig 1924.

Meinecke, F., Weltbürgertum und Nationalstaat 7. Aufl. 1928; Die Entstehung des Historismus, 2 Bde., München und Berlin 1936.

Schmidt, Eva, Herder im geistlichen Amt. Leipzig 1956.

Schmitz, R., Das Problem 《Volkstum und Dichtung》 bei Herder, Berlin 1937.

Troeltsch, E., Der Historismus und seine Probleme (《Gesammelte Schriften III》), Tübingen 1922.

Unger, R., Herder, Novalis und Kleist. Frankfurt 1922; Hamann und die Aufklärung, 2 Bde., Halle 1925.

Walzel, O., Deutsche Romantik, 2 Bde., 5 Aufl. Leipzig u. Berlin 1923.

Wedel, M., Herder als Kritiker, Berlin 1928.

Weiser, C. F., Shaftesbury und das deutsche Geistesleben, Leipzig 1916.